

令和5年度八幡公民館主催事業 5月5日より先着受付

第18シリーズ

30人募集

八幡史学館

回	月日	内容	講師
1	6月13日(火)	・家康側近、本多正純の生涯と八幡 ・太平洋戦争と八幡	山岸弘明 氏
2	7月11日(火)	飯香岡八幡宮と八幡	平澤牧人 氏
3	8月8日(火)	八幡浜の海苔づくり	時田光夫 氏
4	9月12日(火)	八幡の地理学	小関勇次 氏
5	10月10日(火)	八幡の字名と千葉県の難解字名	佐倉東雄 氏
6	11月14日(火)	八幡の富士信仰	立野 晃 氏

6回講座です。すべての会に参加できる方が対象です。

時間:午前9時30分から11時30分

場所:八幡公民館 視聴覚室

参加費:無料

1回目講師
山岸弘明氏



公民館天井絵

山口 達画伯「四季草花園」

八幡公民館0436(41)1984

八幡公民館主催事業「八幡史学館」第18シリーズ第1回

家康側近本多正信、正純父子の八幡領とその生涯

～大河ドラマ「どうする家康」、
栄光の首席老中から「流され人」として憤死～

令和5年6月13日

山岸弘明



徳川家康



本多正信



豊臣秀吉



織田信長



八幡の江戸時代は本多正信、正純親子と永井直勝3 給に始まる



岡田准一と松本潤

大河ドラマ
どうする家康

4日
長篠を救え！

奥三河の山深き長篠城が、武田勝頼（真田郷敦）率いる武田軍に包囲される。窮地に陥った長篠城主の奥平信昌（白洲迅）はその状況を徳川家康（松本潤）に伝えるため、奥平家の地侍である鳥居強右衛門（岡崎

信長に援護を求める

体育）を三河・岡崎へ送り出す。武田軍の包囲網を突破し、やがて岡崎にたどり着いた強右衛門からの手紙を受け取った家康は、織田信長（岡田准一）に援護を求める。すると後日、信長は2万を超える軍勢を率いて岡崎にやって来る。そして、天下統一に向かつて突き進む信長は、参戦の条件として、驚くべきことを家康に提示する。



松本潤（左端）、岡田准一（右端）

大河ドラマ
どうする家康

23日
姉川で
どうする！

徳川家康（松本潤）らは、敦賀・金ヶ崎からの撤退の激戦を命からがら生き延び、京の織田信長（岡田准一）の屋敷に戻ってくる。だが、休む間もなく、家康は信長から、浅井・朝倉討伐の先陣を命じられる。そし

長政から密書が届く

て、近江・姉川のほとりに陣を敷いた家康の元に、北近江の戦国大名の浅井長政（大貫勇輔）から「共に信長を討ち取る」と呼びかける密書が届く。織田・徳川と浅井・朝倉の両連合軍が向き合い、決戦の時が近づく中、家康は信長を裏切るか否かの決断を迫られる。

※選挙開票速報のため、NHK総合は午後8時15分からの放送となります。

ふるさとの歴史

八幡公民館エリアものがたり

第三十七話◆「銃後」の守りとB29の空襲



八幡国民学校女子生徒の剣道教練

長引く日中戦争は第二次世界大戦となり、市民生活は一層深刻化した。お米や木炭、衣料などの生活必需品が配給や切符制となる。壮年や学生は前線へ、娘たちは軍需工場に駆り出された。男手のなくなった銃後は年寄と女性が残った。防空頭巾にもんべ姿の主婦が竹やり訓練や防空演習に励んだ。

昭和十九年日本軍はレイテ沖海戦で大敗。戦艦「武蔵」が沈没、連合艦隊は事実上壊滅した。太平洋全域の制空権を米軍に奪われ、マリアナ諸島の基地からの重爆撃機B29の本土攻撃が始まる。翌二十年三月、三万機の大編隊が東京下町に焼夷弾の雨を浴びせた。死者十万人。八幡の人たちは夜空を真っ赤に染めた炎と噴煙を呆然と見つめた。六月沖繩が玉砕、八月広島、長崎に原爆投下、昭和天皇の「終戦詔勅」が全国に放送された。

千葉県内では千葉市の七夕空襲、蘇我、船橋、銚子などで多くの犠牲者が出た。八幡は九十九里浜からの首都進攻路にあたり、連日空襲警報のサイレンが鳴った。小学生だったという女性も「教室から校庭の防空壕に飛び込んだ。B29の爆音はいまでも忘れられませんが」と語る。八幡への機銃掃射もあり、男性一名が犠牲になった。



蘇我

千葉市中心部の戦災図

（山岸弘明Ⅱ主催事業「八幡史学館」講師）

ふるさとの歴史

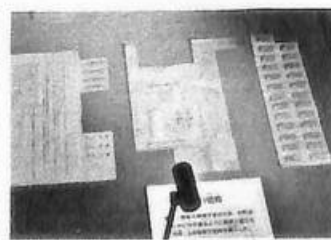
八幡公民館エリアものがたり

第三十八話◆ 終戦直後の八幡

昭和二十年八月十五日「終戦詔書」が発表され、太平洋戦争は無条件降伏で終息した。「やっと戦争が終わった」という安堵感と先行き不安が交錯した。

国内外の軍人と大陸引揚者の大移動が始まる。たまたまスマトラ島の作戦行動で国内にいた野口彰さんが真っ先に帰ってきた。飛行服姿の身一つ。「足が付いてる」家族は大喜びした。一方、男子二人を失った家もあった。都会は焦土、住む家も食料もない。比べて八幡はまだ恵まれた。半農家が多く、フトン綿や衣類をコメと交換した。海で小魚やあさり、海苔、うこ（海藻）が獲れた。

マッカーサー進駐軍の陽気なアメリカ兵が八幡にもやってきた。チョコやチューインガム目当ての子どもたちがジブを囲んだ。町には店も仕事もない。汽車切符や配給に並び、モノを求めて人々が群がった。



歴史博物館展示の配給切符

予科練→土浦海兵隊終戦の芝崎菊呂さんの戦後は秋葉原焼け跡の組立てラジオに始まる。二十四年八幡で電気商会を開店。日本経済は朝鮮特需を契機に拡大した。「力道山の店頭白黒テレビに人の山、冷蔵庫と洗濯機が連日売れた。」電化三種の神器がもてはやされた。九十七歳、いまでも電気工事の第一線で活躍する。



商工会展示即売会にでぎわう芝崎さんの店

（山岸弘明Ⅱ主催事業「八幡史学館」講師）

寛政重修諸家譜 第一冊

寛政重修諸家譜 第一冊

初編 八戸 山崎氏

東照宮一は、元禄二年、一、
東照宮一は、元禄二年、一、
東照宮一は、元禄二年、一、

東照宮一は、元禄二年、一、
東照宮一は、元禄二年、一、
東照宮一は、元禄二年、一、

東照宮一は、元禄二年、一、
東照宮一は、元禄二年、一、
東照宮一は、元禄二年、一、

寛政重修諸家譜
(国会図書館蔵書データベース)
巻六百九十三「藤原氏、兼通流、本多」

寛政重修諸家譜 第六百九十三
藤原氏 兼通流
本多

東照宮一は、元禄二年、一、
東照宮一は、元禄二年、一、
東照宮一は、元禄二年、一、

東照宮一は、元禄二年、一、
東照宮一は、元禄二年、一、
東照宮一は、元禄二年、一、

東照宮一は、元禄二年、一、
東照宮一は、元禄二年、一、
東照宮一は、元禄二年、一、

東照宮一は、元禄二年、一、
東照宮一は、元禄二年、一、
東照宮一は、元禄二年、一、

東照宮一は、元禄二年、一、
東照宮一は、元禄二年、一、
東照宮一は、元禄二年、一、

新訂寛政重修諸家譜 巻六百九十三「藤原氏、兼通流、本多」

寛政重修諸家譜 第六百九十三
藤原氏 兼通流
本多

東照宮一は、元禄二年、一、
東照宮一は、元禄二年、一、
東照宮一は、元禄二年、一、

東照宮一は、元禄二年、一、
東照宮一は、元禄二年、一、
東照宮一は、元禄二年、一、

東照宮一は、元禄二年、一、
東照宮一は、元禄二年、一、
東照宮一は、元禄二年、一、

東照宮一は、元禄二年、一、
東照宮一は、元禄二年、一、
東照宮一は、元禄二年、一、

東照宮一は、元禄二年、一、
東照宮一は、元禄二年、一、
東照宮一は、元禄二年、一、

令和5年度「八幡史学館」次回以降の予定

- 第2回 7月11日=飯香岡八幡宮と八幡 平澤牧人(飯香岡八幡宮神官)
 第3回 8月8日=八幡浜の海苔づくり 時田光男(八幡公民館運営委員会副会長)
 第4回 9月12日=八幡の地理学 小関勇次(清和大学特任教授)
 第5回 10月10日=八幡の字名と千葉県の難解地名 佐倉東雄(八幡郷土史研究家)
 第6回 11月14日=八幡の富士信仰 立野 晃(前鎌ヶ谷市立郷土資料館長)

史学館郷土史ニュース

1)PDFDVD「八幡史学館レジュメ集」を作成

- ①平成18年から18シリーズを迎えた八幡史学館講座のレジュメを「八幡史学館DATE
 FAIL③」にまとめた。第18シリーズ参加者でご希望の方に差し上げます。
 ②昨年の記念DVD「いまよみがえる昔八幡町」ユーチューブ視聴数が1300に

2)昨年11月「市原歴史博物館」開館、見学者2万人を突破

- ①市民待望の「市原歴史博物館」がスタート。「旧石器・縄文」「弥生・古墳」など6つの
 テーマに、市原のものだけで日本の通史を綴る。
 ②最大の見どころは、佐倉歴史博物館から里帰りした市原の至宝「王賜銘鉄剣」。「王とは
 だれか」の謎を解明。埼玉で作られた最大規模の人物はにわ、「国府は市原郡にあり」造
 塔の華と謳われた国分寺七重の塔、迫力満点の「五大力船」実物船と大スクリーン映像
 など魅力まんたん。オープン延べ入場者数が5月始め2万人を突破した。
 ③八幡地区では五大力船、八幡海岸、飯香岡八幡宮、塩田と海苔養殖、足利義明などが取
 り上げられている。
 ④5月のゴールデンウィーク中、広瀬盧竹が描いた明治40年ころの「故郷姉崎町年中行事」
 展が、故郷姉崎を知る会との市民連携企画展として開催された。

3)県博「おはまおり」千葉博「足利義明展」に八幡宮大太刀など

- ①県立中央博物館昨年秋の企画展「海に向かう神々の祭 おはまおろし」に飯香岡八幡宮
 の徳川家康銘大太刀、由緒本記、社地絵図、おはまおろし写真、柳橋、市川本店と史学
 館の戦前むかし写真館映像(縮小編集)が展示された。
 ②千葉市郷土博物館の政令市30周年記念展「我、関東の將軍にならん、小弓公方足利義
 明と戦国期の千葉氏展」に、飯香岡八幡宮所蔵で、足利氏代々の根本家臣団・小曾根信
 直寄進の「大般若経」が展示され、奥書の義明征夷將軍と高基征夷大將軍の両家繁栄を
 祈願した一節が展示会のタイトルになった。また八幡地区の足利義明五所伝説、伝足利
 義明夫妻墓などがパネル展示された。
 ③千葉県文書館の企画展「房総教育史 明治を生きた先生たち」に「教育一家〜岡田寅三
 郎・茂生・俊(菊間)〜が紹介され た。

4)「写真が語る 市原市の100年」いき出版社から出版

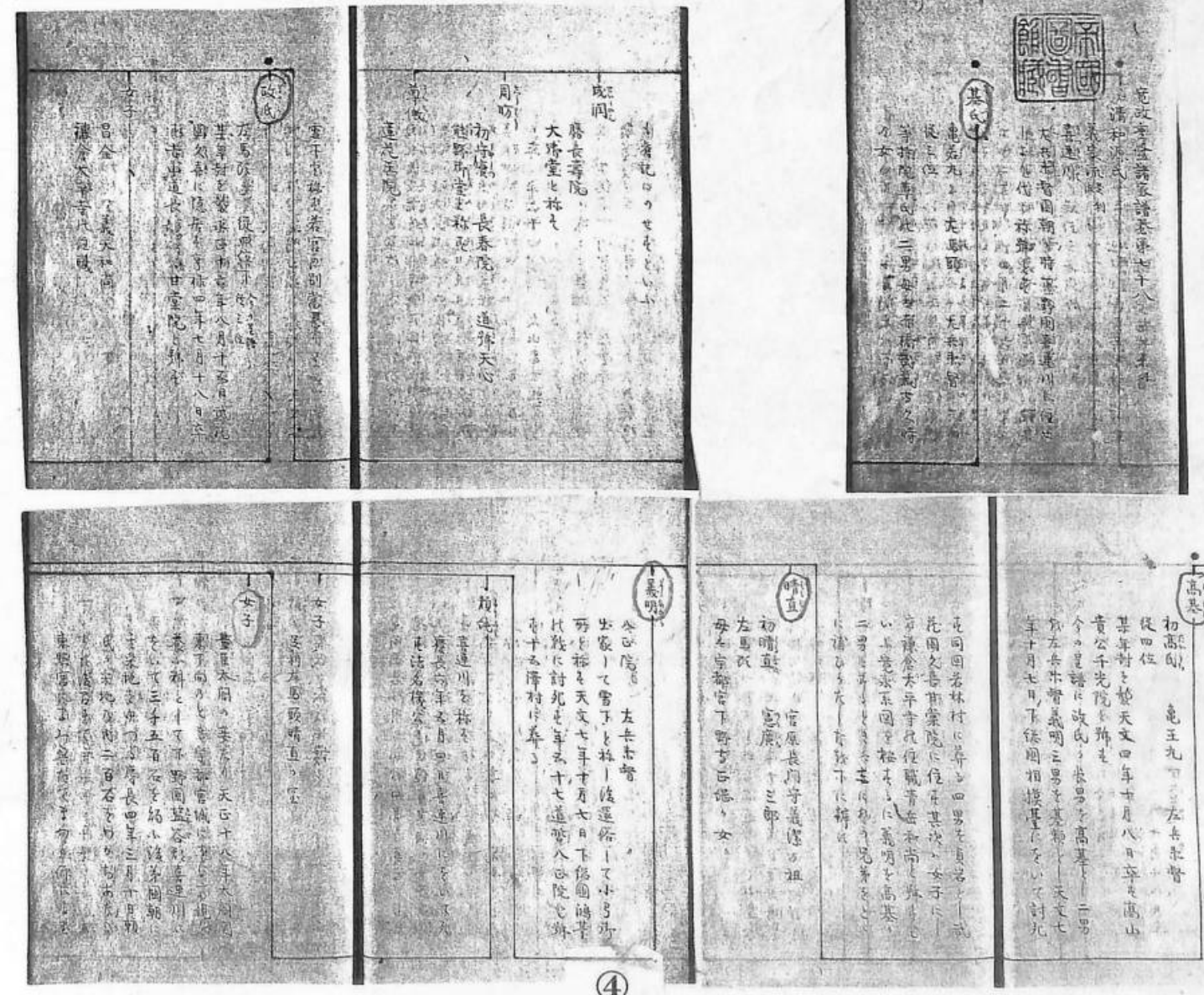
- ①山岸講師が編集委員代表として共著、八幡公民館、飯香岡八幡宮、八幡史学館チーム、
 市川本店など協力。市内図書館蔵書、書店にて好評発売中。

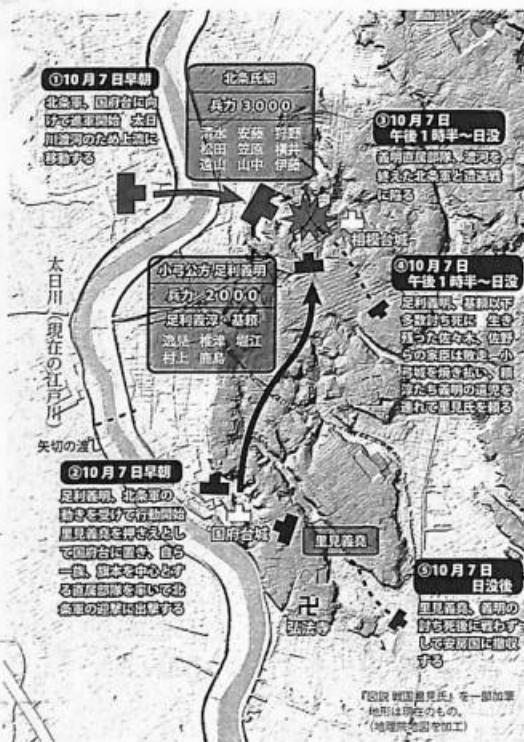
伝足利義明・義純父子以下1千騎が眠る 「相模台の戦い」聖徳大学経世塚碑銘調査

令和3年(第16シリーズ)「鎌倉府正嫡にかけた男」補遺

- ①飯香岡八幡宮や五所とゆかり深い戦国武将・小弓御所足利義明は、天文7年9月安房・里
 見氏、上総・武田氏を率いて国府台に出陣、小田原城の北条氏綱も10月6日葛西城に着陣、
 両軍は太日川(現在の江戸川)を挟んで対峙した。
 ②翌7日朝、北条勢は松戸に迂回して渡河し、これを知った義明は1千騎の手勢を率いて南
 下、午後矢切から相模台あたりで遭遇戦となる。交戦およそ3時間、小弓軍は打ち負け、
 夕刻義明とその子義純、弟高頼はじめ1千騎(諸説)が討たれたといわれる。小弓公方家は滅
 亡、里見氏は戦うことのないまま退去した。(詳細は令和3年講座資料参照)
 ③昨年秋に開催された、千葉市郷土博物館の「小弓公方足利義明と戦国期の千葉氏展」解説
 パンフレットから「戦況図」「快元僧都記」を、また「寛政譜」などを補遺した。
 ④「当講座」では、松戸市岩瀬・聖徳大学構内に所在、松戸市指定史跡で天文7年「相模台
 の戦い」戦死者を葬った跡といわれる「経世塚、相模台戦跡碑」を解説調査した。

寛政重修諸家譜 国会図書館蔵書「清和源氏喜連川」の足利義明系図



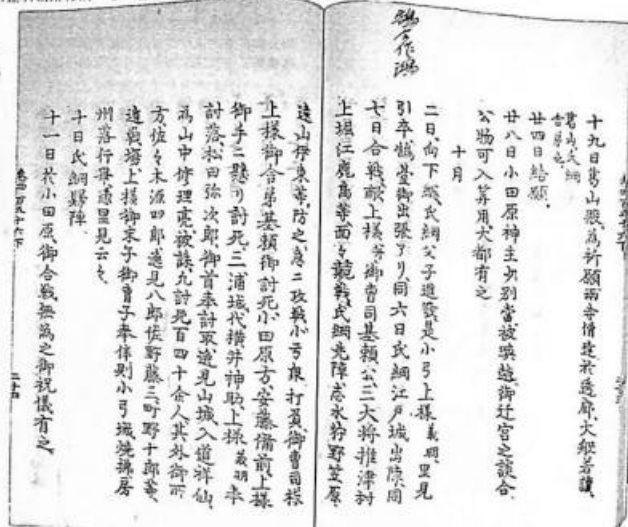


4-9 パネル
「第1次国府台合戦戦況図」

資料は、関東戦国史における一つの画題となる「第1次国府台合戦」の戦況図である。天文7年（1538）10月7日、相模台（現在の松戸市）で足利義明率いる小弓公方軍と北条氏綱率いる北条軍が激突した。この戦いにおける義明の戦時目標は、これまで「関宿（現在の野田市）攻略」のためとされてきたが、近年は「高基（現在の東京都葛飾区）制圧」が目的との説が出されている。

この戦いに小弓公方軍は敗れ義明は討死にす
るが、敗因として、北条軍に比べて小弓公方軍
の兵数が少なかったことが挙げられている。

千葉市博物館の義明展に展示された 「相模台の戦い戦況図」

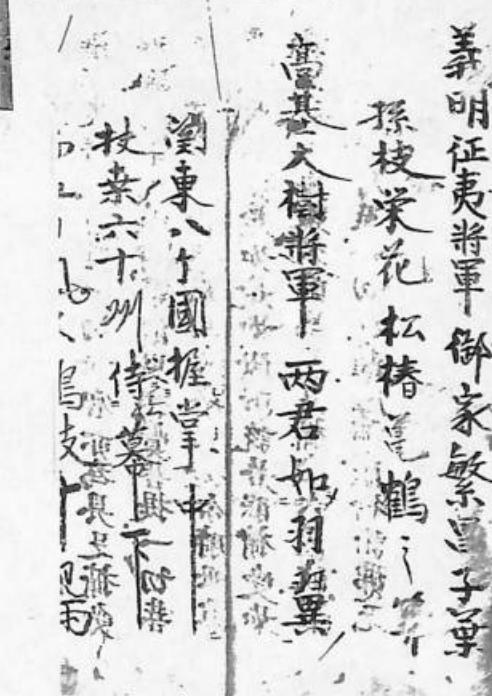
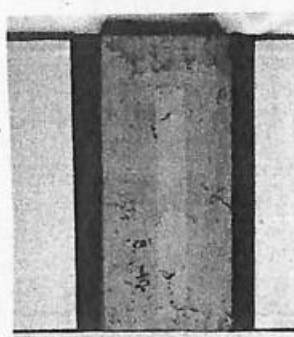


4-10 「快元信親」
（『新書類聚』）

資料は、第1次国府台合戦の経緯を説明する際に必ず言及される同合戦の根本資料といえるものである。合戦前の小弓公方・北条氏両軍の動き、足利義明をはじめとする小弓公方軍の首領部の構成、両軍の動向、合戦の経過、義明討死の状況、戦死者と戦場を離脱する義明の家臣たちなど。資料には、同時代を生きた快元による第1次国府台合戦の経緯が詳しく記されている。※資料上部の書き込みは後世のもの。



「我、関東の將軍にならん」テーマになった「寄進経典」



- ⑤碑は大正8年、相模台戦跡地に創設された陸軍工兵学校が、昭和5年に建立したもので、底部横巾80cm、頭部横巾25cm、厚さ42cm、高さ180cm、白みかげ石を2段の薄いコンクリート台石にのせた変形角錐柱石で、表面に「相模台戦跡」、裏面は漢字カナ、楷書500字ほどの本文を綴っている。「北総の西角、江戸川の清流に臨む」当地は天文年間の第一回国府台の戦いの主戦場で、足利義明、長子義純以下1千余騎が戦死したこと。当初は塚が存在したが工事で消滅したこと、当校調査の結果、義明の死処で、義純の墓と因縁浅からぬことがわかり復元したとし、また、傍らの松戸市指定「経世塚説明板」は「塚は昭和54年事情があって現在地に移動した」と記す。
- ⑥塚は直径245cm、高さ110cmの土饅頭円墳2基で頂部に中世板碑などを乗せている。
- ⑦大学によって花が供えられ、毎年命日には本土寺住職による供養が行われている。
- ⑧『小弓公方足利義明』（千野原靖方）によれば「もとは同大北東方の校舎南側に石碑と塚一基があったがその後、現在地へ移されている。かつて塚から中世の板碑片や埴輪、土器片が出土したというので、元来は相模台古墳群の一つであったものと推定される」
- ⑨合戦で討死した義明の首級は後北条氏から兄高基の許に送られたという。「寛政譜」は十五沢村葬とする。宮原御所の祖となる次兄晴直が遺骸を市原に引取ったか。経世塚には義純の跡を訪ねた乳母が一夜泣き明かし、尼となって菩提を弔ったとする伝承がある。
- ⑩これまで碑銘の解説資料はなく、義明伝承の具体的資料の一つとして直読および写真、乾拓によって解説した。
協力＝八幡史学館チーム（鷲津寛子、柴田正子、堆美登里、岡本弘子、若菜幾世）
市原の古文書研究会（高澤恒子、上田洋子、佐野 彪、奥田宏之）



聖徳大学と経世塚解説



国府台の戦い戦場となった相模台公園

松戸市指定史跡 昭和四十四年四月一日
経世塚 けいせいづか
天文七年（一五三八）十月七日、この相模台上において千葉生実の小弓公方足利義明と小田原の北条氏綱との合戦があった。結局戦は氏綱の勝利となり、公方義明（古河公方晴氏の叔父）と御曹司義純らはこの地に憤死する。
小金本土寺過去帳によると、「千余人戦死」とある。経世塚はこれらの戦死者を葬った跡と伝えられている。
なおこの塚は事情があつて昭和五十四年に現在地に移動したものである。



主要参考文献＝飯香岡八幡宮文書。市原の古文書研究、八幡史学館DATEFILE①②③、寛政重修諸家譜（国会図書館蔵書データベース）、新訂寛政重修諸家譜、東京市史稿、我関東の將軍にならん～生実公方足利義明と戦国期の千葉氏、小弓公方足利義明、国府台合戦を点検する、新編房総戦国史、千葉市の戦国時代城館跡、市原市史、松戸市史、宇都宮・横手・日光市観光資料、どうする徳川家康、図説徳川家康、詳説日本史図録、日本歴史展望、東京新聞、河北新報、八幡公民館だより
協力＝飯香岡八幡宮、聖徳大学、千葉県立図書館、市原歴史博物館、八幡公民館、八幡史学館チーム、市原の古文書研究会、ちば・生浜歴史調査会



相模台戦跡碑と義明以下を埋葬したと伝わる経世塚



相模台戦跡碑

(裏面)

相模台戦跡 記

北総ノ西角江戸川ノ清流ニ臨ミ形勝ヲ占ムルノ要地ニテリ南ヲ国府台ト曰ヒ北ヲ相模台ト曰フ共二史上ニ名アリ而シテ後者ハ実ニ往昔第一回国府台役ノ主戦場タリ今陸軍工兵学校所在地ニ属スル憶フ昔天文年間小弓御所足利義明長子義純以下北條勢ト善ク戦ヘルモ時利アラズ義明以下千余騎終ニ此ノ台上ノ露ト消ユル爾来歳月ノ久シキ古書ニ所謂御曹子ノ墓既ニ亡ビテ所在ヲ詳ニセス大正八年陸軍工兵学校ノ此ノ台上ニ創設セラレルヤ輕盛塚ト名ツクルモ今猶纔ニ存セシカ造営ノ間空シク心ナキ工人ニ壞タル会々本校旧跡ヲ踏査シ史実ヲ攻究タルノ挙アリ考証発明スル所少カラズ蓋シ此塚ノ由緒大ク深ク義明父子ノ死処義純ノ墓ト因縁浅カラサルモノノ如シ為ニ其湮滅ヲ慨キ重修ノ議ヲ定メ教導大隊ノ余力ヲ藉リルト曰フ功ヲ積ミ故地ニ就キテ墳ヲ築キ略々原形に復セシム亦以テ甲古ノ亡日憑拠タルヲ庶幾カラシム(石欠ケ)

昭和五年八月一日

陸軍工兵学校

現代訳文

相模台戦跡 記

北総の西角、江戸川の清流に臨み、形勝を占むるの要地にあり、南を国府台といい、北を相模台という。共に史上に名ありてして、後者は実に往昔第一回国府台役の主戦場たり。いま陸軍工兵学校所在地に属する。思う昔天文年間小弓御所足利義明、長子義純以下北條勢と善く戦えるも時利あらず、義明以下千余騎ついにこの台上の露と消ゆる。じ来歳月の久しき古書に、いわゆる御曹子の墓、すでにほろびて所在をつまびらかにせず、大正八年陸軍工兵学校のこの台上に創設せられるや輕盛塚と名づくるも、今なお纔(わず)かに存せしが、造営の間空しく、心なき工人に壞されたる。たまたま本校旧跡を踏査し史実を攻究たるの挙あり、考証発明する所少からず、けだしこの塚の由緒大く深く、義明父子の死処、義純の墓と因縁浅からざるものごとし。ために湮滅をなげき、重修の議を定め、教導大隊の余力をかりるといふ功を積み、故地につきて墳を築きほほ原形に復せしむ、またもつて甲古の亡日憑拠(ひょうきよ)たるの庶幾(しよき)からん(や)。

昭和五年八月一日

陸軍工兵学校

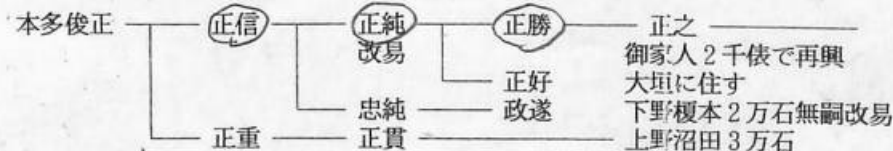
1 徳川家康関係年表

人質生活	1542	三河岡崎城で誕生(父は松平広忠)
	1547	織田信秀・今川義元の人質となる
	1560	桶狭間の戦い(今川義元の敗死後自立、岡崎城に帰る)
信長・秀吉に協力	1564	三河の一向一揆を平定(三河一国を支配)
	1570	姉川の戦い(浅井・朝倉の軍を破る)。浜松城築城
	1572	三方ヶ原の戦い(武田信玄に敗れる)
	1582	関ヶ原の戦い(武田勝頼を滅ぼす、駿河を領有)
	1584	小牧・長久手の戦い(豊臣秀吉と和睦)
天下人・幕府の基礎形成	1590	江戸入り(関東を領有、約250万石)
	1600	関ヶ原の戦い(天下人となる)
	1603	征夷大将軍に任じられ、江戸幕府を開設
	1605	將軍職を秀忠に譲る(將軍職の世襲)
	1607	駿府に隠居(大御所として政治に関与)
	1614	方広寺鐘銘事件→大坂冬の陣
	1615	大坂夏の陣(豊臣氏滅亡、元和偃武)
	1616	家康死去(75歳)

八幡の江戸最初の領主は本多正信、正純親子と永井直勝(尚政)の3給

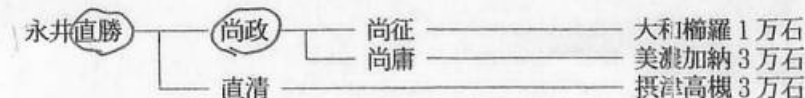
本多佐渡守正信、上野介正純

三河の国人武士団。江戸幕府創設期に正信、正純が参謀として活躍、宇都宮15万石に進むが人望がなく失脚、配流地で無念の生涯とげる



永井右近大夫直勝、信濃守尚政

直勝は徳川譜代、槍一筋の武断派武将。古河10万石初代藩主で老中格。嫡男尚政も秀忠老中で澗井戸2万石から父の古河12万石を領有した。



「佐渡殿、鷹殿、お六殿」徳川家康の三大好物、 「君臣水魚の交わり」家康寵臣だが同僚は煙たい 本多正信は「大河ドラマ」の嫌われ者

1) 徳川家康の三大好物「佐渡殿、鷹殿、お六殿」

- ①佐渡殿=江戸幕府老中・本多佐渡守正信。徳川家康にとって、愛してやまない鷹狩りや側室・お六の方に匹敵するほど大切な存在だった。
- ②鷹狩り=鷹を使って獲物を捕らえる狩りの一種。軍事訓練、領内視察、外交手段として重視された。家康は大の鷹好き、駿府大御所時代も毎年50回、元和2年趣味の鷹狩り後、鯛の天ぷらを食べ過ぎて体調を崩したのが最後となった。75歳。天皇から「東照大権現」とおくりなされて神さまになった。
- ③お六の方=家康後の側室三人衆の一人。美貌で器用、歌道に通じた。家康晩年の寵愛を一身に受けた。家康没後尼となるが還俗、喜連川家に再嫁するが、東照宮参詣の折神前で頓死した。29歳。日光山養源院に埋葬された。

2) 君臣の間、相遇うこと「水魚の交わり」(寛政譜)

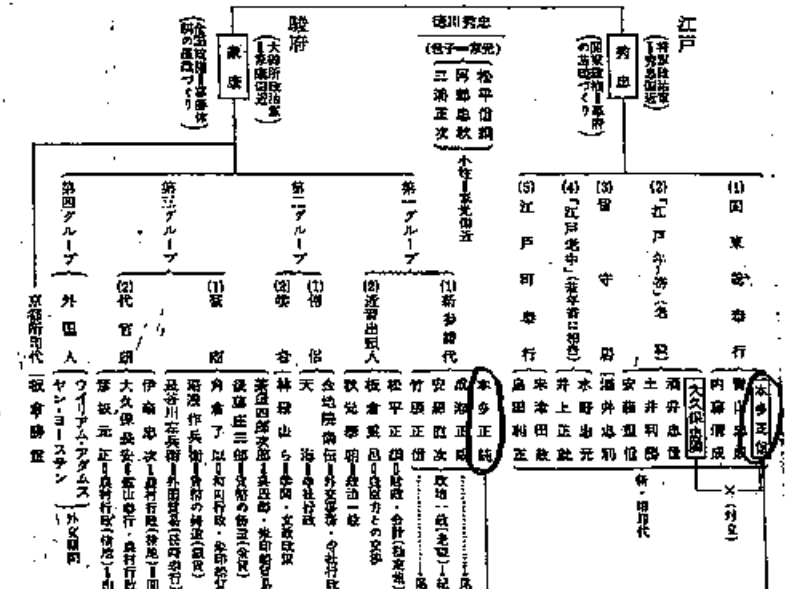
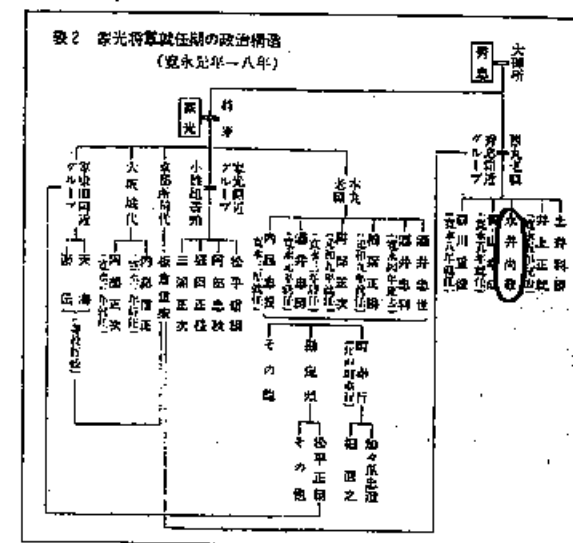
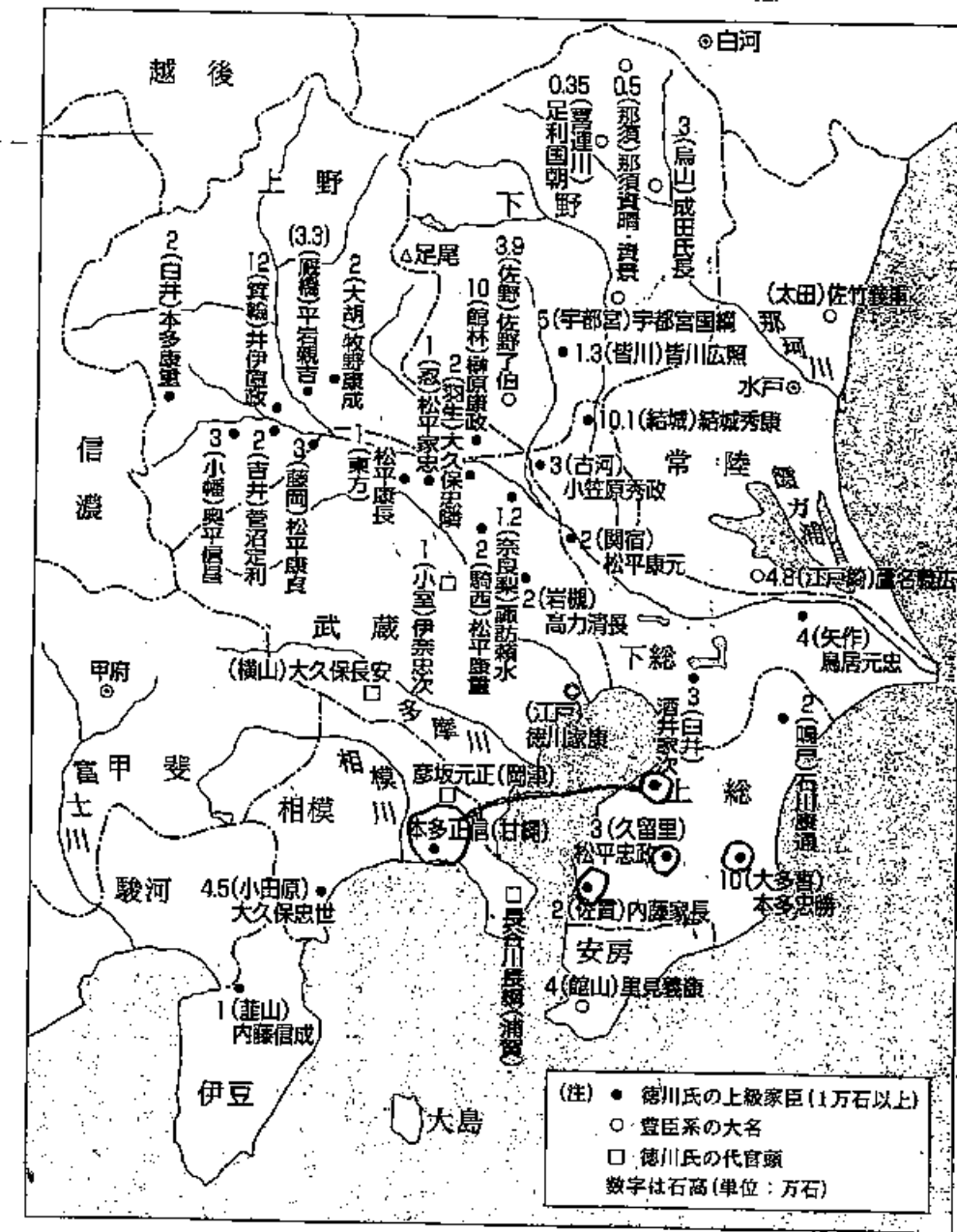
- ①四字熟語「水魚之交」=魚は水があってこそ生きていける。欠くべからざる友の存在、主従や夫婦仲の良いことに用いる。

3) 本多氏=三河松平家につかえた戦国武士団、家康の幕府創設に貢献、多くの譜代大名を輩出した

- ①元は豊後本多の出で、本多忠勝などと同族。戦国時代三河の国人領主一族として徳川の前身・松平家に仕えた。徳川幕府創設に貢献、江戸時代に一族から多くの譜代大名が生まれた。当家は正明から弥八郎を名乗った鷹匠の家柄、正信が家康の寵臣、正純も家康、秀忠老中、宇都宮15万石に栄進したが、人望がなく失脚、配流の地横手で無念の生涯を遂げた。

②寛政重修諸家譜=藤原氏・兼通流 本多

- ①定吉 本多定正男。分家して一家を起す
- ②正明 弥八郎
- ③忠正 弥八郎 松平清康に仕える。織田信秀三河安城攻めで討死
- ④俊正 弥八郎 佐渡守、清康、広忠に仕える
- ⑤正信 天文7年生まれ。初め正保、正行、弥八郎、佐渡守、従五位下。家康老中江戸定府、2万2千石。江戸始め八幡村など5千石か領主。元和2年逝去。79歳。
- ⑥正純 永禄8年生まれ。初め千穂、正綱、弥八郎、上野介、従五位下。家康、秀忠老中。始め八幡村などを所領、八幡宮に家康銘太刀寄進使者。宇都宮15万石。元和8年秀忠の勘気で改易、寛永14年配流の横手で死す。73歳。横手市正平寺葬、墓建立認められず
- ⑦正勝 慶長元年生まれ。出羽守、従五位下。父とともに流され、父に先立つ
- ⑧正之 寛文4年將軍家綱により赦免。旗本2千俵となる
- ⑨正芳 元禄元年安房国長狭郡の内など加増、3千石となる



⑩正庸、⑪正安、⑫正命、⑬正峯、⑭正牧… 明治維新におよぶ
平成19年横手市での「正純親子を偲ぶ会」に、14代宗主木村日出明氏が出席。

4) 本多正信の所領は八幡、潤井戸など市原郡5千石、合わせて1万石

①家康より4才年上。幼少から家康に仕えたが、三河一向一揆のとき、門徒として一揆方に加わったため追放され、大久保忠世のとりなしで帰参、元亀元年以前とされる。天正10年、織田信長と連合した家康は甲斐武田勝頼を滅亡させて相模を獲得、信長が横死した本能寺の変では伊賀越えの危機を克服した。正信は姉川の戦い、武田攻めなどで軍功を立て、生来の智謀が家康に認められてぐんぐん頭角をあらわした。甲斐経営を奉行、家康の重臣に加えられる。『徳川家康文書の研究』によれば甲斐の家康朱印「本領安堵状」「所領宛行状」などに「本多弥八郎正信」を連署した家康文書数十点が掲載されている。

②天正14年従五位下佐渡守叙任

③天正18年家康の関東入府で、関東総奉行となる。市原の所領は八幡村、潤井戸村など周辺一帯で5千石とみられる。「市原市史」の「所領変遷」は八幡周辺の江戸初期領主は空欄で、氏名が未解明であることを指している。寛政譜や飯香岡八幡宮文書などの文書解明で、本多佐渡守などが空欄部分を埋めることになる。

④寛政重修諸家譜第六百九十三 本多正信

(慶長)十八年関東に移らせたまうのとき一万石をたまう。按ずるに天正分限帳上野国(誤記か)八幡において一万石領せしよし見えたり。しかれどもある書に上総国八幡にして五千石を領すとありてその余の地名を記さず。またある書には下総佐倉といい、官庫の記録には相模国甘縄を記す。いずれか詳ならず

*市原市史資料集近世「潤井戸村萬覚書帳

文禄年間から慶長まで 本田(多)佐渡守(正信)様領

*飯香岡八幡宮文書「飯香岡八幡宮御伝記」「上総惣社飯香岡八幡宮由緒本記」「蔵屋敷貸地証文」(慶長19年)

八幡宮境内の内御三侯へ御蔵造立につき蔵屋敷に貸し地の分、間地堅九十間横十九間 本多佐渡守殿、本多上野介殿、永井信濃守殿 三給地頭方へ貸し地なり(後出参照)

*甘縄城は戦国時代小田原北条氏の一族・北条氏勝居城。家康の関東入府にともない、本多正信を相模甘縄藩1万石が通説だが実態はなかった。水野忠守らによる番城で、寛永2年松平正綱が相模など2万余石を与えられて甘縄藩が成立した。もっとも八幡領にしても家康の参謀として活躍する正信は常に側近くにあつて居住する城は必要ではない。家臣団も多くはない。年貢徴収や現地を統制する役人の陣屋程度のものが置かれたのではないか。

⑤慶長5年関ヶ原の戦いは秀忠に付属し、東山道を進んで上田城にこもる真田昌幸、幸村父子を攻めたが9月15日の関ヶ原の合戦に遅れた。

⑥慶長8年徳川幕府が成立すると、家康の側近として幕政を主導、秀忠の側近大久保忠隣を失脚させて大きな権力を手中に収める。同10年家康が退いて大御所時代が始まると、正純を駿府の家康のもとに、自ら江戸の將軍秀忠の老中として、家康の政策を実行した。

⑦(元和元年ころ)加恩ありて2万2千石を領し、両御所に奉仕して、乱には軍謀にあずかり、治には国政を司どり、君臣の間相遇うこと水魚のごとし(寛政譜)と謳われた。

⑧元和2年2月家康逝去、6月その家康の跡を追うように正信もなくなる。79歳。京都本願寺葬、墓碑は非公開

八幡村領主の変遷

☆ 永井直勝	天正18年 ～慶長ころ	☆ 本多正信	天正18年 ～元和2年	☆ 本多正純	天正ころ ～元和はじめ	飯香岡八幡宮	天正19年 ～明治維新 150石
☆ 永井尚政	慶長ころ ～寛永10年	永井直貞	寛永3年 ～明治維新 182石	永井直重	寛永3年 ～天和2年		
☆ 堀直之	寛永10年 ～元禄11年	" 直孟					
" 直景		" 直澄					
" 直良		" 直朝					
" 直宥		" 直賢					
		" 直富					
		" 直観					
		" 某					
		" 某					
幕府直轄	元禄11年 ～宝永4年	" 直景					
佐野政国	宝永4年 ～明治維新 226石	村上正春	宝永4年 ～明治維新 178石	河野通護	宝永4年 ～明治維新 95石	水野忠頭	宝永4年 ～明治維新 89石
" 政長		" 正清		" 通長		" 忠富	
" 政信		" 正親		" 通孝		" 忠英	
" 政房		" 某		" 通成		" 政勝	
" 某		" 某		" 通開		" 貞利	
" 某		" 某		" 通訓		" 貞篤	
" 某				" 通和		" 貞尚	

酒井忠吉	寛永10年 ～元禄?	松本秀持	安永8年カ ～明治維新 166石	☆ 松平朝矩	寛延2年 ～明和7年		
" 忠経		" 式毅		幕府直轄	明和7年 ～文化8年	岩本正利	天明7年 ～明治維新 205石
☆ 大久保忠高	貞享元年 ～元禄10年	" 毅実		☆ 阿部正簡	文化8年 ～天保3年	" 正倫	
		" 某		" 正あき		" 正脩	
幕府直轄	元禄10年 ～延享3年					" 正遠	
☆ 酒井親恭	延享3年 ～寛延2年			幕府直轄	天保3年 ～天保5年	" 某	
				☆ 林忠英	天保5年 ～天保12年		
				幕府直轄	天保12年 ～明治維新 108石		

明治維新後＝房総知藩事柴山支配地、
菊間水野藩領をへて廢藩置県

☆印＝大名所領、無印＝旗本知行地または幕府直轄領

「家康に密着しすぎた男」 本多正純の栄光と転落

14

家康寄進大太刀を使者として奉納 年貢米輸送の八幡湊南町みお開削 など 八幡領主本多正純にかかわるこれだけの地方文書

1) 朝鮮出陣で武運長久を祈願した大太刀

①天下統一をはたした豊臣秀吉の夢は大陸に向けられた。「民」の従属国だった朝鮮に服属をもとめ、拒否を待って出兵を取行する。天正20年西国大名を中心に、16万の大軍を編成、釜山を経由して朝鮮半島に攻め入った。家康は秀吉の朝鮮出陣に参会するため2月江戸を出立、正純も家康にしたがった。出陣にあたり飯香岡八幡宮に武運長久を祈願し、8月に凱陣して大太刀一振りを寄進した。寄進先がなぜ飯香岡八幡宮なのか、正純にとって単なる小姓の職務にすぎないのか、八幡村領主との関係などは資料がなく不明。

②飯香岡八幡宮所蔵市原市指定文化財大太刀 一振り

*飯香岡八幡宮文書「飯香岡八幡宮御伝記」、「上総惣社飯香岡八幡宮由緒本記」

徳川様当社御祈願あらせられ、これより御太刀一振り御寄進、すなわち御太刀御銘左に大納言源家康武運長久、持者今度唐入り、早速凱陣、丹誠之旨趣によりくだんのごとし上総国市原郡八幡宮寄進たてまつるものなり。

天正20年壬辰8月18日 使者 本多弥八郎正綱

右御太刀ならびに御内陣の御鍵 鍛冶工 平井和泉守打つものなり

*本書は『徳川家康書状の研究』にはないが、奉納大太刀は八幡宮に現存して市の指定文化財に登録されている。

*正純は当時弥八郎を称し、正綱を名乗っている。

2) 飯香岡八幡宮から本多上野介役所にあてた境内検地書上げ

*飯香岡八幡宮文書「飯香岡八幡宮御伝記」、「上総惣社飯香岡八幡宮由緒本記」

慶長18年丑8月本多上野介殿へ当境内間数書の趣、その文左に

八幡宮境内宗間地(総検地)書上げのこと

一、西の方海表通り、南より北の構え堀之内まで百九十七間、ただし堀中二間外土揚げ場一間余りこれあり(中略=別掲)

一、当社前通り、海面中二百間戌の方見通し汐干し權立て除地 各一間六尺五寸間なり右のとおり先規あり来りにござ候。以上

慶長十八年丑年八月 上総国市原庄八幡郷 御朱印地八幡宮 神主菅田大内蔵亮判

本多上野介様 御役人中

*八幡宮が幕府寺社方(金地院崇伝支配)か関係領主に差し出したとみられる検地帳

3) 飯香岡八幡宮境内、除地に3給領主の年貢米蔵とみおを開削

*飯香岡八幡宮文書「飯香岡八幡宮御伝記」、「上総惣社飯香岡八幡宮由緒本記」、「証文」

八幡宮境内の内御三侯へ御蔵造立につき蔵屋敷に貸し地の分、間地堅九十間横十九間

本多佐渡守殿、本多上野介殿、永井信濃守殿 三給地頭方へ貸し地なり

慶長十九甲寅年五月

八幡宮境内宗間地書上げ之事

一西の方海表通り、南より北の構え堀之内まで百九十四間但堀中二間外土揚げ場一間有之

一東表通り、南より北の構え堀之内まで百八十間

一北の方表通り、南より西海邊まで七十六間

一南の方表通り、南より西海邊まで五十五間

一御本社中通東より西鳥居迄九十五間

一當社前海面中二百間戌の方見通し權立て除地

各一間六尺五寸間也

右と通り規あり来り御役人中

慶長十八年八月

上総国市原庄八幡郷 御朱印地八幡宮 神主菅田大内蔵亮

本多上野介様 御役人中

本多上野介様

御役人中

右書面本多候に差上申候

境内坪数九一万三千三百五十一坪余

本多上総介役人中に差し出された「境内宗間地書上げ」

八幡宮境内を内地頭方江御蔵造立付蔵屋敷敷地、地之分間地 堅九十間横十九間

本多佐渡守 三給地頭方江貸地也

永井信濃守

慶長十九甲寅年五月

右三給地頭方御蔵造立付御蔵米運送新規渡堀割地所當表海面御除地之内別紙証文通貸地敷為其加金一兩宛年々上納致有也其文左示

并借地証文差上帳

八幡宮 見通 四百八拾間

御蔵地

上中口

地底尻

山岸南北

同東西

拾八間

三拾間

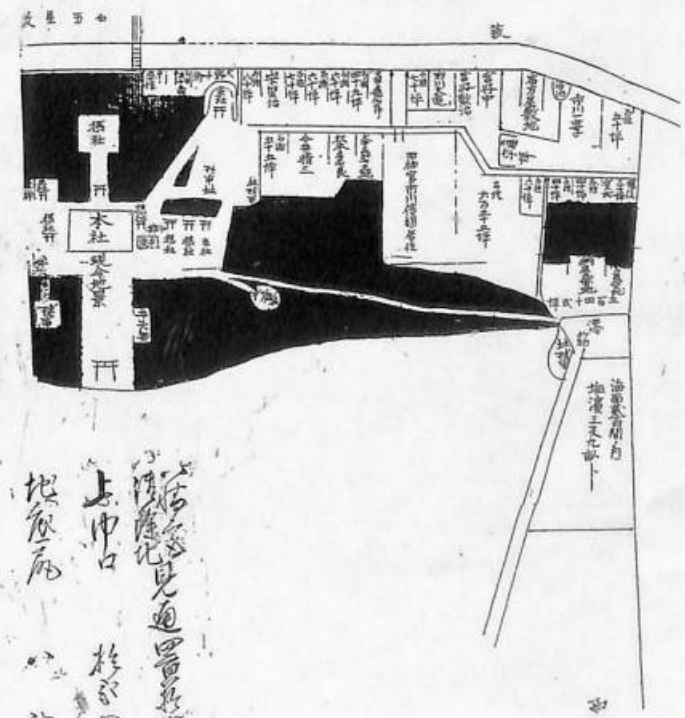
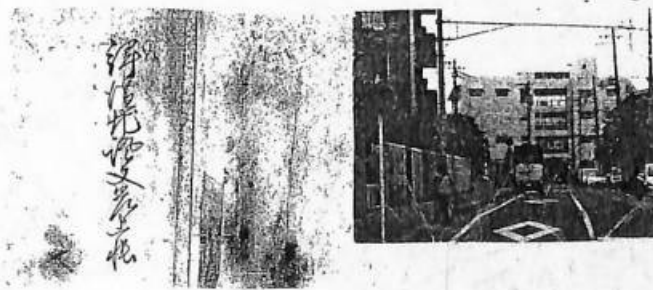
八間

拾八間

此度御運送渡堀割地書面を通拜借申度事也其加金一兩宛年々相納可申候右為向後証文差上申候以上 慶長十九甲寅年五月

村役人代 善六 同 羽右衛門 同 利兵衛 同 善左衛門 同 運送蔵地手

慶長19年の3給地頭名を記す
八幡港みお筋と蔵地借用証文



右三給地頭方御蔵造立付御蔵米運送新規渡堀割地所當表海面御除地之内別紙証文通貸地敷為其加金一兩宛年々上納致有也其文左示

一、右三給地頭方御蔵地造立につき御蔵米運送新規みお堀割り地所当社表海御除地の内紙証文の通り取り極めその文に 拝借地証文差上げ帳 (中略=別掲) このたび御運送みお地書面の通り拝借申すところ実正なり。右冥加金として一兩ずつ年々相納め申すべく候、右向後のため証文差上げ申し候。以上

慶長十九甲寅年五月 村役人惣代 善六印、同利兵衛印、同羽右衛門印、運送蔵地守 善左衛門印 八幡宮御役所 右証文取り置き貸地致し候こと

*江戸に送る年貢米輸送のための港と引込みみお筋、蔵地の借用証文。当時の3給地頭を本多佐渡守(正信)、本多上野介(正純)、永井信濃守(尚政)の3侯とする。初期の八幡村領主変遷上の決定的史料として貴重だ。

*八幡港南町みおは現在の市原支所前信号周辺におかれた年貢米積出し港で、江戸中期以降は民間の五大力船港、大正以降海苔取り船漁港で、昭和30年代海岸埋立てで消滅した。

*八幡港は慶長19年大坂冬の陣での功績が認められて特権をえたとされる「木更津船」より早く築港された 歴史ある港といえる。

関連、参考資料=永井直勝、飯香岡八幡宮社殿造営料蔵米200俵を寄進

*飯香岡八幡宮文書「飯香岡八幡宮御伝記」、「上総惣社飯香岡八幡宮由緒本記」

文禄3年甲丑年、永井右近太夫殿、当社御信仰あらせられ、これにより御造営料として御蔵米200俵御寄進あらせられ、この時御本社幣殿、拝殿宗修復、その外摂社等これあり、すなわち棟札左に記す。(以下省略)

方広寺鐘銘事件を画策して冬の陣をひらき 大坂城内堀を埋め立ててまる裸に

本多正純のすご腕、豊臣家を滅亡させる

1) 関ヶ原の合戦は家康旗本としてしたがう

①「露と落ち、露と消えにし、わが身かな、浪速のことは夢のまた夢」秀吉の辞世句
慶長3年秀吉が没したが後継者の秀頼はまだ6歳に過ぎない。秀吉はその死にあたって、家康以下の五大老と石田三成ら五奉行に繰り返し後事を頼んだ。

三成は豊臣政権がすでにできあがっているとして豊臣家の世襲性を信じたが、家康の考えは違った。「天下は力のあるものの回り持ち、秀吉は自分より力があつたが、秀頼より自分が上」、秀吉が死ぬと家康は豹変、次々と秀吉との約束を破った。家康の狙いは豊臣政権の武断派と文治派を分裂させて、その混乱に乗じて天下を取ることであった。

②慶長5年家康はかけに出る。会津の上杉景勝が謀反を企んでいるとして大軍を率いて大坂を離れると予測どおり石田三成が挙兵する。小山での一報に「歓喜した」。家康にとって最後にめぐった文字通りのワンチャンスだった。

③家康は江戸から東海道を進軍、正純もその旗本に従ったが、中仙道を進んだ秀忠の徳川本隊は真田幸村の奇策に翻弄されて本戦に遅れた。その中に父正信もあった。。

④8月15日朝もやをついて、両軍は関ヶ原で激突。戦いは午前中互角、正午ころ小早川秀秋の寝返りで西軍は総崩れとなる。石田三成は生け捕りされ、家康から預けられた正純が市

3 関ヶ原の戦い(*は関ヶ原の戦いの現場にいなかった者)

西軍(約8万2000人)

五大老
毛利輝元*
宇喜多秀家

五奉行
石田三成
増田長盛*

諸大名
小西行長
真田昌幸
大谷吉継
長宗我部盛親ら



▲石田三成
(1560~1600)

近江国佐和山城主で、五奉行の一人。1600年、関ヶ原の戦いに敗れ、処刑された。



▲徳川家康
(1542~1616)

幼名竹千代。江戸幕府を創設し、駿府に引退後も大御所として実権を掌握。

東軍(約7万5000人)

五大老
徳川家康
浅野長政*

五奉行
池田輝政
黒田長政
藤堂高虎
細川忠興

諸大名
加藤清正
伊達政宗
福島正則
山内一豊

関ヶ原の合戦勝利で家康念天下人となる

4 大坂の役



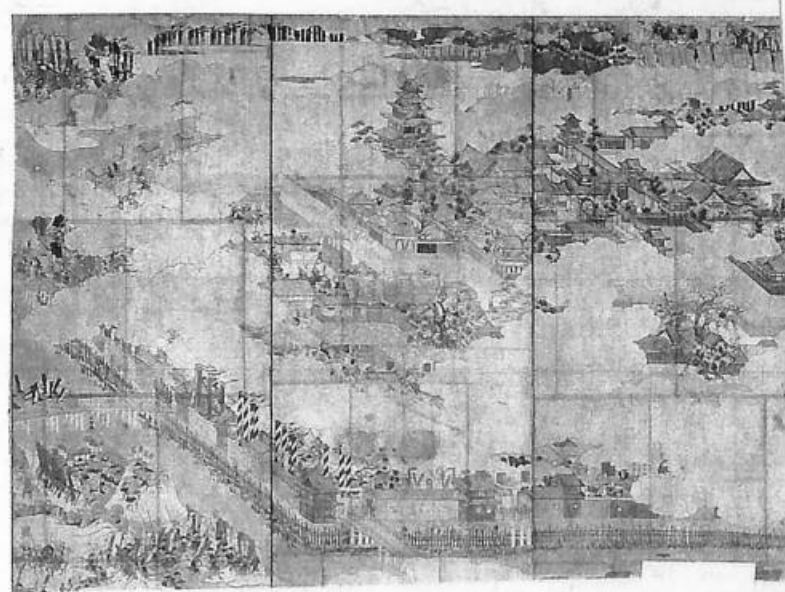
○豊臣秀頼 (1593~1615)
豊臣秀吉の第2子。大坂の役

方広寺大仏殿の鐘と鐘銘 豊臣秀頼が復興した方広寺大仏殿の鐘(高さ3.2m)には、「国家安康」「君臣豊楽」という銘文があった。家康はこれをもとに紛争(方広寺大仏殿鐘銘事件)を起こし、それは大坂冬の陣の原因となった。

4-① 大坂 冬の陣(1614年)



4-② 大坂 夏の陣(1615年)



大坂冬の陣で豊臣氏を滅亡

中引き回しのうえ六条河原で斬首した。

- ⑤家康は本戦に遅れた秀忠との対面を拒んだが、正純が「遅参は参謀役の父正信が至らなかったため」ととりなし、ようやく親子対面が実現した。
- ⑥関ヶ原の合戦で取りつぶされた西軍大名は 87 家、114 万石が没収され、それらは戦功のあった東軍将士を中心に分配された。正純は下野小山および近江国の内 3 万 3 千石に増された。

2) 家康、江戸幕府を開き、将軍職を秀忠に譲って大御所政治を展開

- ①関ヶ原の合戦は徳川方の大勝利で終わったが、豊臣幕府の家老としての立場は変わらなかった。豊臣政権奪取のために家康が次に打った手は、朝廷工作による征夷大將軍就任と、秀忠への譲位であった。
- ②慶長 8 年、後陽成天皇から征夷大將軍に補された家康は江戸に幕府を開く。ときに 62 歳、夢は実現したが老い先は短い。同 10 年、家康が将軍職を辞任し、秀忠が 2 代将軍となる。これは「天下が徳川氏の世襲」であることを世間に知らせたものであった。
- ③家康は将軍職こそ譲ったが、その後も実権を掌握、新たな居城として駿府城を築き移住した。以後、将軍秀忠と大御所家康の二元政治が展開していくことになった。
- ④正純は父正信とともに家康側近として幕府政治を取り仕切り、権勢をほしいままにした。そして豊臣家打倒にむけて牙をむいた。

3) 難攻不落の大坂城が炎上、淀君、秀頼母子が自害して豊臣家が滅亡

- ①そのころ豊臣家では幼い秀頼に代わって生母・淀君が女城主として実権を握っていた。将軍となった家康は秀頼に臣下としての上洛を促し、豊臣家の 1 大名への国替え、淀君の人質を求めたが拒否、徳川・豊臣両家は一触即発の危機となった。
- ②たまたま豊臣家では秀吉の遺志を継いだ方広寺再建を進めた。豊臣家は大仏建立など莫大な私財を投入したが、梵鐘の鐘文へのいいがかりを考えたのが金地院崇伝と正純だった。
- ③鐘文の問題箇所は 3 か所 ①「国家安康」=家康の名前を引き裂き呪詛、②「君臣豊楽」=豊臣家だけの繁栄、③「右僕射源朝臣家康公」家康を射る
豊臣方へのゆさぶり工作であったが淀君らが反応、大坂の陣を決定付ける「方広寺鐘銘事件」へと発展していく。家康は慶長 19 年冬、大坂騒擾を理由に諸大名に出陣を命令。20 万が包囲、大坂方も 12 万を寄せ集めて籠城へ。
- ④徳川方は真田幸村の抵抗など予想以上に苦戦した。大坂城は秀吉が築いた難攻不落の名城。力づくで落とすのは難しいとみた家康は、いったん和議を結ぶ作戦に切り替える。
- ⑤講和条件を無視して強引に戦端を開かせてのも正純だった。外堀埋立ての総責任者となった正純は、条約条約にない設備や堀を次々と取り壊した。連日の抗議も病気を称して取り合わず、さしもの堅城もあったという間にまる裸になった。淀君の怒りはおさまらない。
- ⑥翌元和元年 5 月、夏の陣再発。秀頼、淀君は紅蓮の炎の中自害して豊臣家が滅亡した。

4) 家康はライバル豊臣家を倒し、300 年の泰平の世を築く

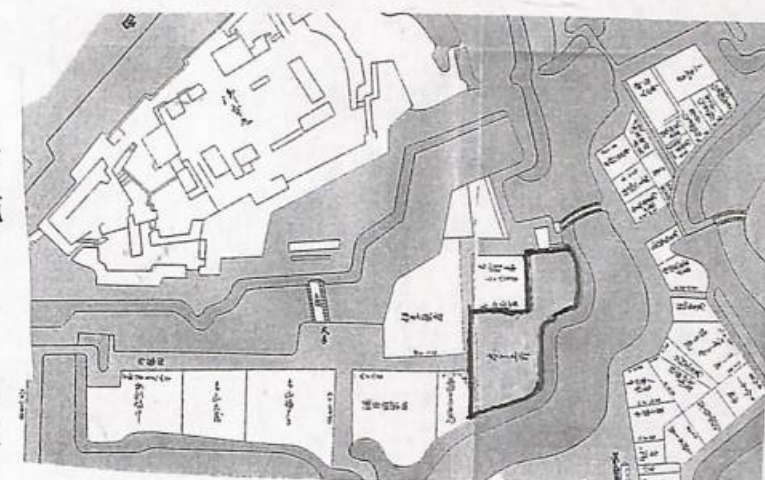
- ①家康は宿敵豊臣家の最後を見届けると、翌元和 2 年 4 月駿府城で死去した。おくりなの神号「東照大権現」は天海僧正が起案し、後陽成天皇が贈った。「日本列島の東から全国を照らし、日本を守護する」という意味。遺言により、遺骨はいったん静岡の久能山東照宮に納め、のち日光東照宮廟に移葬、3 代将軍家光が現在の東照宮を建てた。

慶長江戸図に見る 本多正信の江戸屋敷

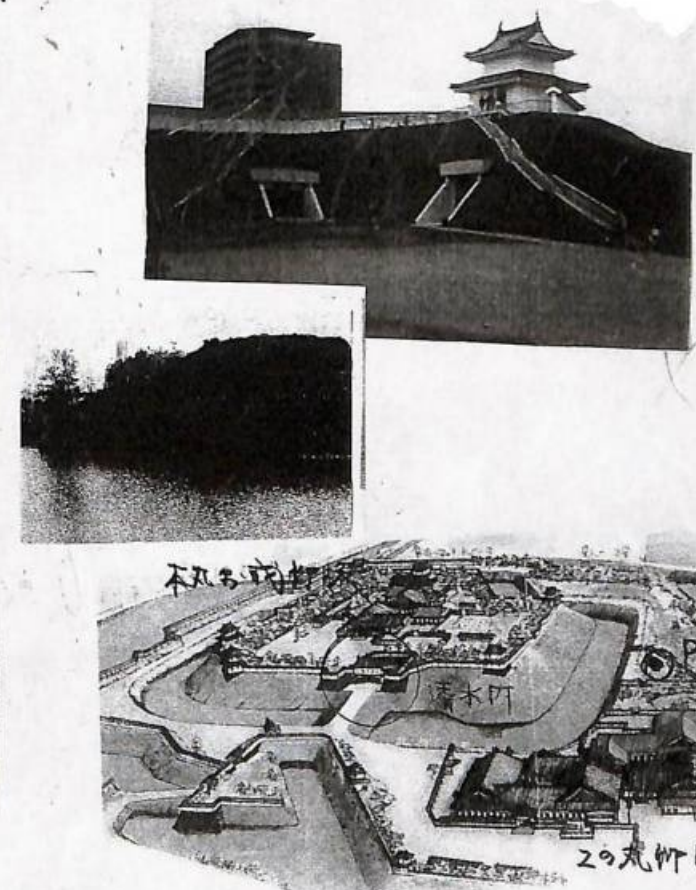
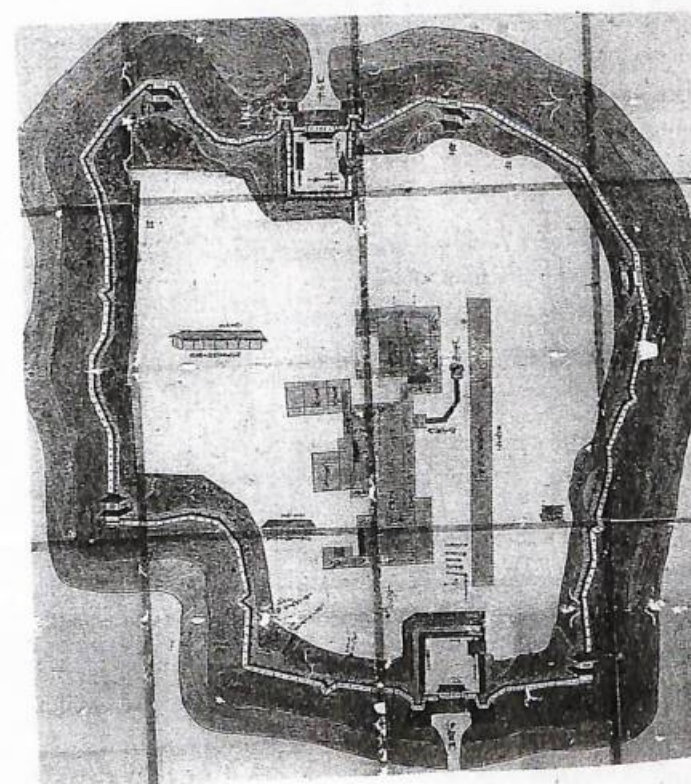
慶長始め 江戸城西の丸下
慶長 12 年～元和 2 年 江戸城吹上御苑

本多正純の江戸屋敷

慶長 12 年～元和 10 年 江戸城 3 の丸



正純が大整備した宇都宮城とその城下



家康が神として祀られた日光東照宮



「日だまりを恋しと思う梅もどき、日陰の赤を見る人もなく」、無念の失脚と憤死

家康側近筆頭・本多正純、出処進退を誤る

1) 家康と正信の死去で、宇都宮 15 万石、秀忠政権の首席老中となる

①元和 2 年、家康と父正信が相次いで死ぬと正純は江戸で秀忠政権の首席老中となる。

元和 5 年、下野国河内、足利郡、近江国において 15 万 5 千石を領し宇都宮城主となる。

正純の宇都宮城主時代はわずか 3 年間、この間次々と重要な事業をなしとげた。

② 2 代將軍秀忠による日光山家康廟建設を奉行、東北道の付け替え、日光街道の新設、宇都宮城の大修築、城下の整備などが家康の 7 回忌にあわせてすすんだ。

③ 秀忠最初の日光社参は元和 8 年に行われた。しかし当の秀忠は往路こそ宇都宮城に宿泊したものの帰りは予定を変え、宇都宮を避けて江戸に帰ってしまう。そして同年 10 月、改易となった最上義俊の城を受け取りに山形への出張中「正純の改易と出羽由利 5 万石への配流」が伝えられた。正純は納得せず新知を固辞したため、寛永元年罪人として佐竹義宣に預けられた。

2) 尾ひれがついた「吊天井事件」と「加納御前女の恨み」

① 忠純の正式な改易理由は「奉公ぶり不足、宇都宮城普請のこと」など、いずれも正純が常用したこじつけだった。実態は新將軍秀忠とあわず、幕閣内に正純の一方的な手法に反対者が多かったこと、秀忠の腹臣であったライバル大久保忠隣を大久保長安事件に関与したとして追い落としたこと、福島正則を騙して改易したことなど、かれの政治姿勢に対する反対派が將軍秀忠を巻き込んだ陰謀であったといえる。

② この事件はのち、正純が將軍暗殺のため吊天井を仕掛けたとする筋書きで喧伝された。かつて「宇都宮と言えば吊天井」とうたわれたが、いまは「餃子」の方が有名になった。また、秀忠の妹加納御前による奥平家「女の恨み」、秀忠將軍の「お江恐妻伝説」などが物語に加えられた。

3) 明治に立てられた「父子終焉の地碑」ひっそりと

① 正純の最後の地は雪深い出羽横手城裏山の蟄居先。寛永 14 年 2 月病死。73 歳。秀忠は死後も許さず、葬地は横手正平寺だが墓はなく、明治 42 年に現在の記念碑が建立された。「本多上野介正純終焉の地」を刻む。かたわらの「梅もどき」に一首が添えられた。「日だまりを恋しとおもう梅もどき 日陰の赤を見る人もなく」。徳川幕府功臣のあまりにもさびしい最後であった。

② 嫡男正勝も父とともに配流したが、父に先だつ寛永 7 年没 35 歳。配所での嫡孫正之は 4 代將軍家綱の代に赦免、旗本家として再興、子孫が明治維新におよんだ。

③ 出処進退を誤ったかれの生涯を振り返るとき、その引き際は家康と父正信の死んだ、元和 2 年に求めることができる。かぞえ 51 歳、小山 3 万 3 千石であった。

以上

碑は語る 秋田県南の地誌

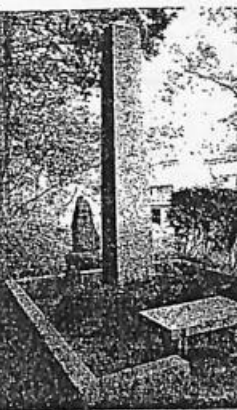
「本多上野介正純父子終焉の地」碑

(横手市)

七世だ、事件の真相は定かでないが、かねて正純に不信をもち、いかに不正を働いたかは、いまだに議論の余地がある。正純は、横手市街から北へ、秋田地蔵堂支那にある「終焉の地」に、寛永 14 年(1637)に、この地に、父子の墓を建てた。その墓のそばに、この碑が建てられた。碑の正面には、正純の墓と、その奥に、父正信の墓とある。碑の裏面には、正純の墓と、その奥に、父正信の墓とある。碑の裏面には、正純の墓と、その奥に、父正信の墓とある。

無念の思い胸に没す

「終焉の地」碑(高さ 4 尺、幅 60 寸、厚さ 55 寸)と、その奥に立つ基礎(高さ 145 寸、幅 1 尺、厚さ 60 寸)



「終焉の地」碑(高さ 4 尺、幅 60 寸、厚さ 55 寸)と、その奥に立つ基礎(高さ 145 寸、幅 1 尺、厚さ 60 寸)



「終焉の地」碑(高さ 4 尺、幅 60 寸、厚さ 55 寸)と、その奥に立つ基礎(高さ 145 寸、幅 1 尺、厚さ 60 寸)

正純父子が城裏山にひっそりと眠る



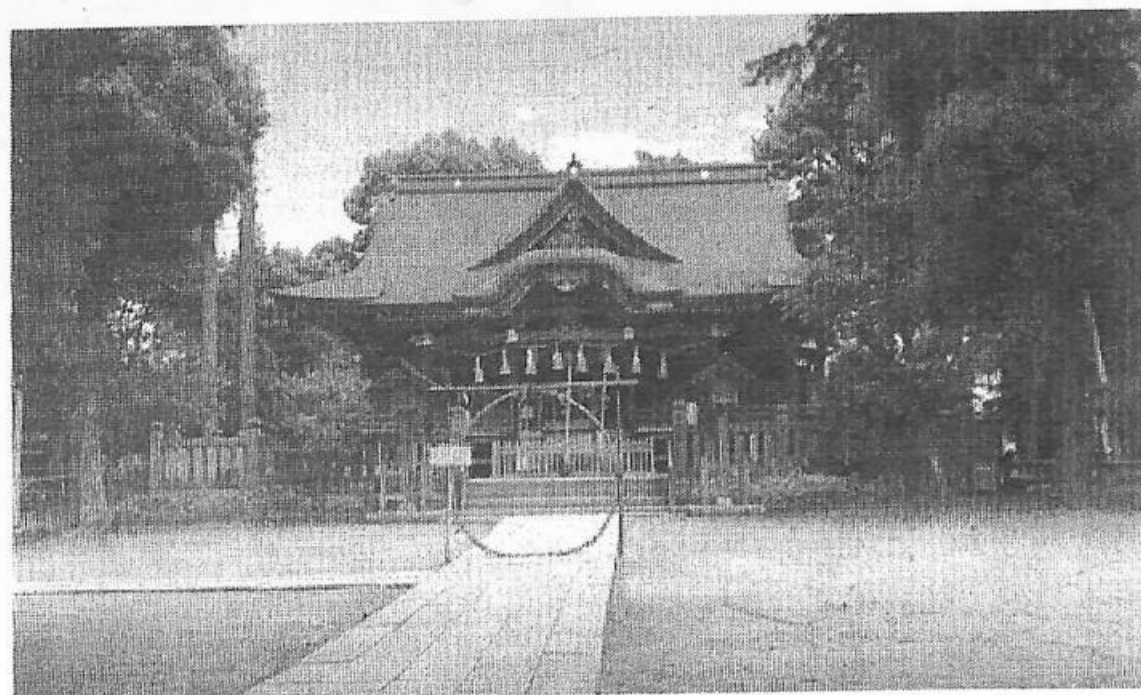
古城の面影を伝える横手城



令和五年度 八幡公民館 主催事業『八幡史学館』第二回 資料

万延元年

森川出羽守の飯香岡八幡宮社参記録を読む



講師

飯香岡八幡宮 宮司

平澤 牧人氏

令和五年 七月十一日(火)
午前九時三十分から十一時三十分

平澤

万延元年（1860） 飯香岡八幡宮文書30
生実藩森川出羽守社参

万延元庚年
下総国千葉郡生実陣主
森川出羽守様当社へ御参詣につき
当家へ御休み巨細（こさい）書の控え
申十月三有日

帳 縦

とくに万延元申年十月三日朝四つ時、佐野九右衛門殿
名主、当所片町清五郎孫徳太郎（当家へ一人にて罷（まかり）出、
ただいま下総国生実村の領主森川出羽守様義（儀）、当鎮守
八幡宮へ心願これあるにつき、ただいま御参詣これある由にて
御沙汰これあり
候間、御神前御開き成しください候ようお願い上げ、ついでには右
御参詣相済み

11代 佐野九右衛門殿

生実神社 北小弓城大手口跡
生実池 重慶院

121

候上にて、御当家へ中飯かたがた初めてのことにゆえ立ち寄り申
したき趣
右出羽守様より御役人をもって御頼みにつき御聞き済み願ひ奉
り候趣、同人申し来たり
候につき、早刻使者をもって御宮番、社人隼人呼び寄せ、前次
第申し聞け、次に拙者
出勤申すべきはずのところ、当家へすなわち御立ち寄りにつき
そこもとにて先例これなく
候えども取り斗（計）いこれあるべき趣、厳しく申し付け神前
をも取り開かせ
候趣申し聞け同人へ御鍵申し渡し、その内右名主徳太郎は当家
庭
そのほか掃除致しおりその内すぐさま出羽守様御役人兩人なら
びに草り（ぞうり）
取り、御茶道具へ御ぼうず付き添い拙家へまかり出、右両御役
人申すよう
今日私ども主人出羽守儀、八幡宮へ心願につき御参詣
これより致され、ついでには御当家御座敷御拝借願いたき趣、出
羽守

122

御頼みにつき、われら下足先掛け相越し候えども、かねて御当
所名主

徳太郎をもって申し上げ候儀、御聞き済みこれあるべき趣、拙
者へ右兩人申すにつきすなわち

答え誠に御心願につき御参詣の上拙宅へ御立ち寄りとは如何

(いかが)に承知

仕り、これにてよろしく候わば御勝手次第御心置きなく御休息
なされべく、ついては

●敷の儀、はなはだ見悪しくこれあり候間、奥殿トコツキへ御
通せ

申すべきはずのところ、これは御朱印座敷同様のことゆえ、諸
警物、道

具そのほか数多これあり候間、御差し合いござ候てはよろしか
らず候間、

失敬ながら御席へ御通せ申すべき候間、さよう御承知下さるべ
く候、もともと精(性)急にも

これなく候えば座敷その外、その趣をもって手当て仕るべく候
えども精急ゆえ万

●御無礼勝ちの段、よろしきよう御取り計らい下さるべく候わ
ば御勝手次第御

休息下さるべき趣御役人へ挨拶いたし候ところ、いづれにても
よろしく御当家にこれあり

候えは差し合いこれなく主人願いどおりゆえその趣申し聞けべ
き次第をもって兩人とも

まかり帰り、右御茶坊主御茶支度などそれぞれ致しおり、下供
五、六人台所に立ちおり

当家にてはすでに掃除等致し、その内百姓時習欠(駆)付けそ
れぞれ伊勢松、

伊之助、徳蔵、能吉、しめ百姓の内四人ほど呼び寄せ社人は
当主のもの

1 2 3

150721

どもこれあり候間、雅楽ならびに采女当家へ参り、外に承仕三
人、文治郎、

惣兵衛、彦兵衛三人呼び寄せ、所々掃除致させ、右雅楽、采女
儀は

当家門前掃除、右徳太郎も同様掃除のこと、それより四時半時
右御役人兩人まかり出、ただいまわれら主人出羽守右御聞き済
みの趣申し聞け

候ところ大慶に存じ候、それよりただいま当御神前へ御参詣こ
れあり候間

ほどなく此方(こなた)へ御出これあるべき趣御役人これあり、
それより神前太鼓を打ち

もともと前々隼人、本願要蔵呼び寄せ、神前使向きその外致さ
せ、御宮前へ御

神水手桶二つ置き、掃除の上隼人控えおり候ところ御出これあ
り、もともと御馬

にこれあり候えども、片町石橋前にて下馬御出これあり、すぐ
さま神前の

幣殿、拙者御被い席の二重台手前にて一拝の上心願遊ばされ、
それより

また一拝の上拝殿北の方へ座し候間、隼人まかり出、御神酒三
方(宝)へ

乗(載)せ御神酒差し上げ申すべしと前へ差し上げ候ところ、
御側京僧岩作殿申すよう

御酒ゆえ頂戴致すべき趣御挨拶あり、すぐさま戴きそれぞれ銘
々御側ならびに

御近所衆御役人方銘々頂戴いたし、かつ隼人儀は指貫(さしぬ
き)羽織着

用いたしおり候こと、それよりすぐさま御帰りがけ神主様へ御
立ち寄り

1 2 4

これある趣、御近所より隼人へ御挨拶これあり、その内当家より承仕

彦兵衛、羽織袴着用致させ、神前まで道案内かたがた出迎えの趣

拙者申し付け遣わし候ところ、ほどなく同彦兵衛、名主徳太郎道案内にて御出

これあり、もつとも当家玄関前ならびに門前へ森(盛り)砂致しおき、すぐさま出羽守様

●これぞ御供久部相添え御玄関より下げ刀にて割羽織、太刀附(付)着

のまま座敷へまかり通り、もつとも門前まで鎗(やり)三本ばかり持たせ候、かつ、この時御出

これあり候、重役ならびに供廻り人数、左に、

御家老 御側役 御近所御つぎ役兼

氏家三之丞殿 石橋財治郎殿 大橋又兵衛殿

同役御側兼 同 御用人兼 御近所

京僧岩作殿 日向銀四郎殿 梅岡政之進殿

御側 同 供頭兼

大野於兎吉殿 小此木宗助殿

外に御茶防(坊)主一人、殿様付き侍四人

下供鎗(やり)持ちとも十三人、御馬五匹

右御着九つ時、それより大橋又兵衛殿申すよう御当主へ御意を得たき趣

徳太郎へ申し遣わし候間、拙者上下(かみしも)、脇差しを帯び大橋殿と対面のこと

それより申すよう、出羽守心願につき御初穂として軽少ながら遣わされ候間、よろしく

と申すにつき拙者慥(たしか)に神納申し候趣、挨拶申し候て引き取り申し候、その趣左に。

三つ折り、三つ折り、中奉書二つ横折り

御初穂 金百疋

森川出羽守

奉書横折りにて三つ折りなり

この紙拙家に所持これあり候、この台帰(返)し申し候

かくのごとくに致し、大橋又兵衛殿より当中の口にて差し出して則請(受)け取る

右のとおりに致し請け取り申し候、それより社人大炊参り候、

大野千郷

すぐさま殿様へお茶

こし高茶台にてお茶差し上げる。これは承仕彦兵衛羽織袴なり。それより銘々

ただ茶台にて差し出し、それより御菓子として上ようかん高付きへ乗せ同人差し出し、外御役人衆へは菓子脇へ乗せ差し上げ

る。外に下供まで

下組へ銘々差し出す。それより拙者上下にて座敷へまかり出はじめて出羽守様へ

対顔致し候ところ、御手厚の御礼御口上をもって申し聞かされ候こと

同席にて銘々御側衆へも同対面致し候ところ、同様の挨拶致し出羽守

様は花御座の上毛氈(もうせん)をしき、外御役人衆はただただ花ござばかり

なり、右相済み候上座敷をも拙者引き取り、中の口にて御近所衆ならびに□(陣か)代

大橋殿へ同対面のこと、それより殿様はじめ下々まで銘々持参の中喰(ちゅうじき)致し候、同相済みの上御武運長久の大御

札一つ差し上げる。

左に。

上下長さ一尺六寸なり 板の厚さ三分なり

勅願所

三元三行

神主

飯ヶ(香) 岡八幡宮 武運長久守護所 市川伊賀亮藤原信明

御祈願所

三妙加持

上の巾四寸なり

下の巾三寸五分

ただしもみの木まさ目板なり、この札古来百々(もも)代建具や林蔵へ払う

ただし上封包紙の上、糊入紙に致し候、水引きは赤(紅)白三尺水引き二把、赤ばかりにてむすび申し候こと

右のとおりに致し出羽守様へ三方へ乗せ拙者より差し上げ申し候ところ早速拝致し、

それより御側石橋財治郎殿へ相渡し、右の三方拙者へ返却にいて

座敷引き取り申し候、同九つ半時出羽守様拙者召し出し候につきまかり出候ところ御自身、当日精急混雑致され候につき、御手当てとして目録頂戴のこと、左に。

赤白水引き一把、糊入り紙、金百疋

かくのごとくに致し頂戴につき仰せに任せすぐさま礼儀申し述べの上、請け取り申し候、じたい(辞退)にてはかえって失敬につき戴き申し候

右目録拙者へ相渡し候上、同九つ八分時それぞれ支度致し御玄関より

出羽守様、羽織、太刀付きにて帰り、それより拙者上下にて草り取り伊勢松召し

連れ門まで見送り候ところ門内にて出羽守様、たつて御引き取り下さるべき旨

申され候につき同様に礼義申し合わせ、それより銘々御役人衆へ同様礼儀申し述べ引き取り申し候、かつ配家大炊ならびに承仕文治郎、彦兵衛、三人拙家門前

127

笠木まで見送り出羽守様は門前より馬乗り、御家来衆は同笠木のところにて馬乗り、ただし殿様とも五人馬乗りのこと、それより隣村五所まで出羽守様御出これあり、すぐさま引き取り申し候、かつ下供

侍ども御坊主四人拙宅に待居、門前笠木まで御馬にて御帰り候より出立、生実へ総御帰りのこと。かつ神前へ百姓

の者遣わし宮番隼人、采女、雅楽三人をも呼び寄せ一同め

でたく相済み候につき御神酒頂戴致させ申し候、それより御初穂それぞれ拙者より

配分致させ申し候左に。御初穂御手当て金とも二分のところ入用引き、一人前二百六十文ずつ、拙者ははかに御札料二百文請け取り申し候、外に百姓どもへ夕刻御神酒、手当て二百四十八文請け取る。

この時入用左に

銭四百四十八文菓子代、百姓長吉へ払う

四百四十八文炭一俵薪代、炭屋へ払う

二百文上茶、仲町茂兵衛へ払う

三百文御酒一升御宮へ上る代、三太夫へ払う

三十二文半紙一状、百姓元治郎へ払う

二十四文糊入代、同人へ払う

ノ(締め)

二百四十八文酒一升三太夫へ払う

三十六文豆腐三つ豆腐やへ払い代

128

右二た品の儀は百姓ども骨折り、御神酒、手当て入用なり。

かつ神前にて手桶一つならびに盥(たらい)小物一つ、元次郎
ところにて取り置き候えどもこれは

御修復料より出る。右のとおり百姓伊勢松をもって諸々に払い
方致し

●こと、それより夕刻拙宅にて百姓ども呼び寄せ、人数左に。

要蔵、伊勢松、徳蔵、熊五郎倅(せがれ)常吉、時習しめ五人

かつ日中まかり出候百姓どもの内ならびに承仕どもへ骨折り

御酒戴かせべきの

趣をもつてそれぞれ迎いに遣わし候えどもそれぞれ浜商売致し
候者どもにて

まかり出申さず候、それより夕六つ時拙者羽織袴にて草り取り

要蔵召し連れ

生実陣屋へまかり出候ところ、夜中につき御家老京僧岩作

殿へまかり出候ところ、御出これあり候につき今日精急出羽守

●御参来候ところ

存外無礼仕り候趣をもつて銀六匁上菓子折一つ、御殿へ差し上
げる

銀二匁に同菓子折一つ、京僧岩作殿へ遣わし候ところ早刻 御

殿その外御手厚の御口上これあり候につき拙者まかり帰る。そ

れより翌日

四日夕、御使いをもつて御上茶折一つ台付きにて遣わされ候こ

と左に、ただし草り

取り一人召し連れ、御使者まかり出申し候こと。

上桐の木、大奉書、白熨斗(のし)、正喜撰、この紙大高、
この縦長さ八寸五分、横長さ一尺二寸五分、足高さ五寸四分、
縦長さ九寸七分、横長さ一尺四寸一分、深さ九分
足高さ四寸九分、かくのごとく使者をもつて遣わされ候こと

御書状の趣、左に

裏に森川出羽守内

八幡郷

石橋財治郎

上封

市川伊賀亮様

京僧岩作

かくのごとくにござ候

小此木宗助

右中の文言左に

手紙をもつて啓上いたし候、追って寒冷にまかり成り候えども

いよいよ御堅固に成られ

御神務珍重に存ぜられ候、しからば昨日は主人参詣致され候節

は

かれこれ御世話に預かりかたじけなき次第致され候、かつまた

昨夜はわざわざ御来臨

ことに一種御意をかけられ仰せおかれ候趣、委細申し候ところ

段々

御念を入れられ候儀、かたじけなく存ぜられ候、これにより御

挨拶として粗末の一種御贈り

入れ申され候、かつ甚(はなは)だもって申し進じかね候儀に
はござ候えども、以後主人

参詣致され候迎(とて)も御送(贈り)物ならびに御入参の儀
は少々差し支え

の儀もこれあり、かえって当惑致され候場合もござ候間、御氣
の毒ながらこの儀御断り申し上げたく、御意を得候よう申し付
けられ候、まずは

●昨夜の御挨拶かたがたのごとくにござ候。以上

十月四日

二白(はく)、時下折角御愛身成され候よう存じ候、さて本文
御断りに及ばれ候儀、悪しからず御免恵なくだされべく候よ
う申しつけられ候。以上

右のとおり御使者御書面の趣かくのごとなり。
右返翰の趣左に。

森川出羽守様御内

石橋財治郎様

八幡郷

上封

京僧岩作様

市川伊賀亮

かくのごとく大美濃

●小此木宗助様

貴酬

にて包み遣わし候

尊書成し下されありがたく拝見仕り候、貴愈(ゆ)のごとく追

って向寒相催し候ところ

いよいよ貴家様方お揃い益々(ますます)御勇健に遊ばされ候
条、恐悦に存じ奉り候

しからは昨日は御殿様初めて御光臨遊ばされ、御座「」

かれこれ仕り、万事御無礼がち何とも申し上げようもこれ無き
次第

思し召しをもって貴所様方において段々御執り成し成し下され
候条、千万ありがたき次第

1 3 1

に存じ奉り候、はたまた今刻は御殿様より高茶一種御使者をも
って

御意仰せ下げられ候段、ことに貴所様方より御細翰相添え

送らせられ御同恐仰せにしたがい、いくひさしくありがたく頂
戴仕り、何とぞ恐れながらこの段幾重にもよろしきよう御執り
成しの御許容

願い上げ奉り候、右御趣まで書外貴顔の節を期し候。恐々頓首

十月四日夕

市川伊賀亮拝

石橋財治郎様

京僧岩作様

●小此木宗助様 貴酬

尚々お礼として貴所様方へ次日参会申すべく候、かつ本文御役
向へ失

敬ながら、よろしきよう御執り成しのほど希いねがい奉り候、
かつ季候折角御慈愛專一に存じ奉り候。以上

右のとおりに致し御使者へすぐさま返翰申し候こと

それより翌五日拙家使者をもって生実まで差し向け申し候こと、
左に。

この上へ糊入れ二枚包み、赤白水引きを掛け鶏卵と印し差し
出し候、かつ御役人御書面の御名あて三人に遣わし候。

●鶏卵、この木もみなり、玉子三十七入り

かつ台の儀は先方にて借用差し出し候こと、図のごとなり

1 3 2

当家使者は百姓富永時習なり、同日七つ時より差し出す。

森川出羽守様御内

石橋財治郎様

京僧岩作様

小此木宗助様

八幡郷

市川伊賀亮

大美濃にて上包み致し遣わし候

中の紙糊入りにて二つ折りに致し候

裏白なり、左に、ただし状箱に入れ封印付き

糊入り二つ折り、右中の文言左に

愚札をもって貴意を得候、追って寒冷相成り候ところ、尊前様

方ますます

御勇健御揃いござ入らせられ候条恐悦に存じ奉り候、しからば昨

夜御殿様より御使者等格別の御高恩を以って結構なる御茶

一種拝領の仰せ下げられ、千万ありがたく重畳仕合（幸せ）に

存じ奉り候。

右御札として早刻参上仕るべく候ところ、右刻御貴翰かたがた、

いかかに存じ奉り候につき恐れながら書中をもって申し上げ、

何とぞ失敬ながら尊前様方より

翌六日使者をもって右書状箱相返しにまかり出られ候、書状の

次第左に

八幡郷

森川出羽守内

市川伊賀亮様

石橋財治郎

小此木宗助

昨五日、時習をもって差し遣わし候状箱、今日使者をもって

わざわざ御札返書差し送りかたがた持参のこと

右開封、書状の次第左に

1 3 3

森川出羽守内

石橋財治郎

京僧岩作

小此木宗助

封印付き

八幡郷

市川伊賀亮様

御請

上封美濃紙にてかくのごとくにござ候

右中の文言左に、ただし半切紙なり

昨夕は御紙面下され拝見いたし候、仰せのごとく追日寒冷まか

り成り候えども

右の段幾重にもよろしきよう御執り成しの程願い上げ奉りたく

愚札を捧げ候。猶（なお）委細面拝の節を期し候。恐惶（きょ

うこう）謹言

申十月五日

市川伊賀亮

石橋財治郎様

京僧岩作様

小此木宗助様 尊下

なおこの品をもって甚だ麗（粗）末ながら尊前様方へお目につけ

存じ候につき

よろしく御請納成し下されべく候、なお季候折角お厭（いと）

遊ばされ候よう

願ひ奉り候。以上

右のとおり時習をもって生実御陣屋まで差し遣わし申し候こと
かつ同人儀夕六つ時帰宅候。ただし状箱の儀、京僧様来る明六
日まで慥（たしか）にお預かり申したき旨御同人申され候こと。

1 3 4

いよいよ御勇健ござ成られ珍重の御儀に存じ奉り候、将又（は
たまた）その節は

みごとの御一折御意浅からずかけられかたじけなき次第に存じ奉
り候、さて

過日かねて主人より鳥渡（ちょっと）お断り申し入れ候とお
り拙者どもにおいても同様の儀にござ候えども、折角の思し召し
のことゆえ、このたびのところ仰せに任せ頂戴致し候、以後ご
心配の儀はお断り申し上げたく、まずは昨日の
御精御礼かたがた、かくのごとくにござ候。以上

十月六日 石橋財治郎

京僧岩作

小此木宗助

市川伊賀亮様 御請

なおもって次第寒冷相増し候間、折角御自愛專要に存じ奉り候。
以上

右のとおり差し送られ候こと、かつ拙者より請書の趣左に。

森川出羽守様御内

八幡郷

石橋財治郎様

市川伊賀亮

京僧岩作様

小此木宗助様 御請

かくのごとく大美濃に上封致し中半切に相認め申し候こと

中の文言左のとおり。

1 3 5

御請

御封状 一通

右たしかに落請仕り、追って委細面拝の節を期し候。以上

十月六日 市川伊賀亮印

石橋財治郎様

京僧岩作様

小此木宗助様

右のとおりに致し遣わし申し候こと

一金一步（分）なり

同十月八日九つ二分時

生実大蔵寺、当社へ参詣まかりあり候

かつ出勤拙者、番隼人、大炊、采女 締め

拙者儀羽織乗さしぬきにて対面候。

ただし入用三百文

御神酒一升代、三太夫へ払う

外四人にて配分候

御初穂

金一分銀 百疋

生実 大蔵寺

これ糊入れ横二つ折り

かくのごとくに致し当家へ当所無量寺まかり出
御神前お開き願いたき趣、大蔵寺口上をもって

申し出られ候につき、すぐさま宮番隼人へ申し付け相

開く、それより拙者出勤候こと

かつ大蔵寺拙者御被席の手前にて

一拝候、かつ役僧二人、外に二人同道のこと

右当家に所持まかりあり候、当神領笠木より下乗候こと。

1 3 6

明治四年解職前飯香岡八幡宮の神職の職制

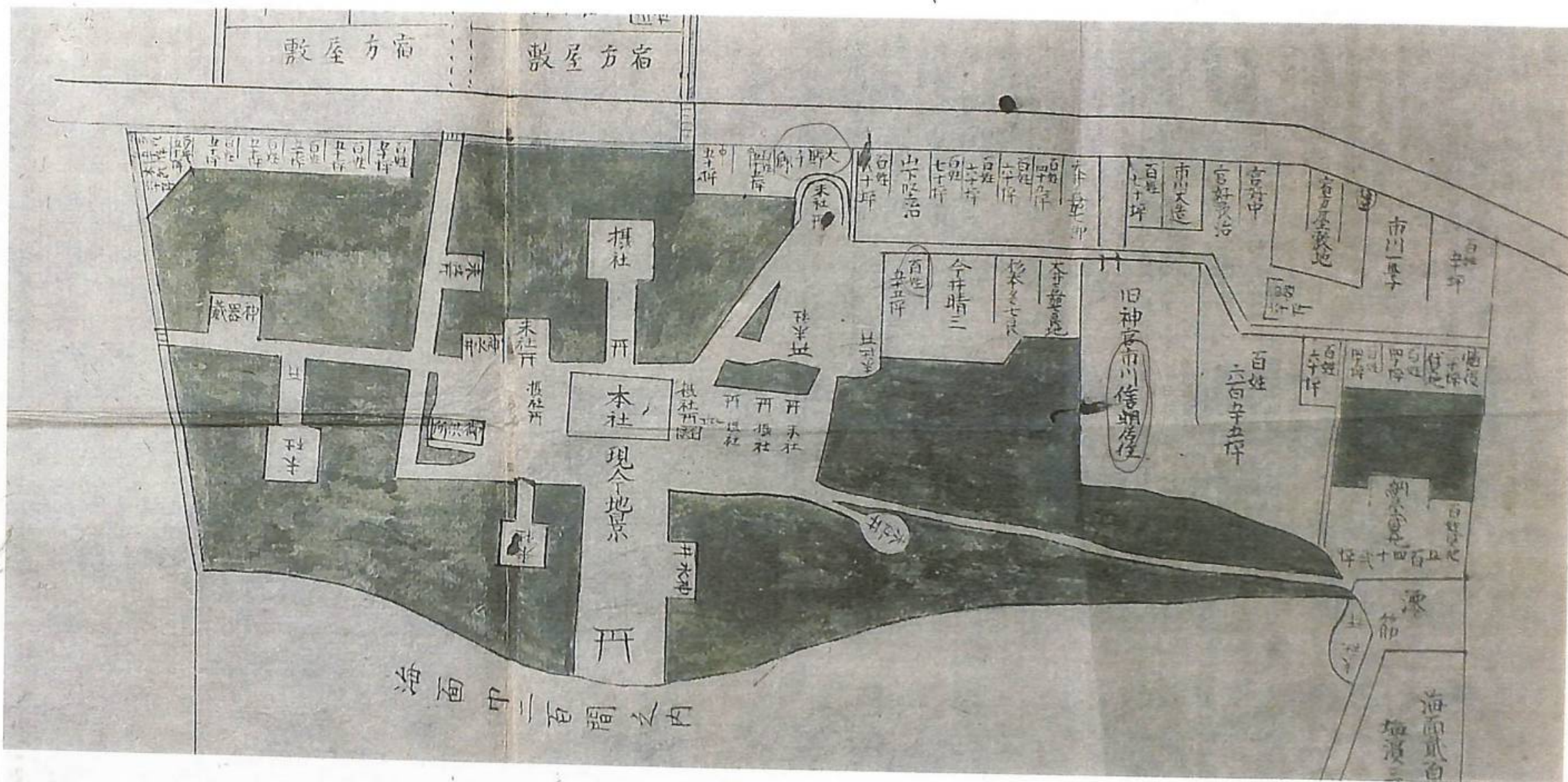
職名	定数	区分	職掌	明治三年十二月の在職者名
神主	一名	司社	神社一切の庶務及び神領一般の政事を掌る	市川 信明
一ノ禰宜	一名	司社		大野 千郷
二ノ禰宜	一名	司社		市川 一学
三ノ禰宜	一名	司社		今井 晴三
奉行	一名	司社		市川 大造
代官	一名	司社		杉本 多七郎
大史	一名	司社	神社の庶務及び会計、大小祭祀に従事す。 奉行代官大史の三職は政事に参与す。	宮 吉雅次
祝部	三名	司社	元禄年中に奉行・代官を行司と改め、社家より才智ある者を任命す。	山下 堅治
旗役	二名	司社		大井 嘉七
		司社		九 鉄五郎
		司社		九 与七
承仕	四名	社人	雑務に従事す。 (手務員)	青木 吉次
		社人		小倉 文治郎
		社人		加藤 惣次郎
本願	一名	社人	祭祀に奉仕せず、掃除及び使夫を勤む。 (同務員)	保坂 要蔵

合計十七名

氏名と役職が一致する人物
氏名は判明するも、役職については不明。明治四年に菊間藩提出の文書の署名の順序を役職に当てはめて推測した。

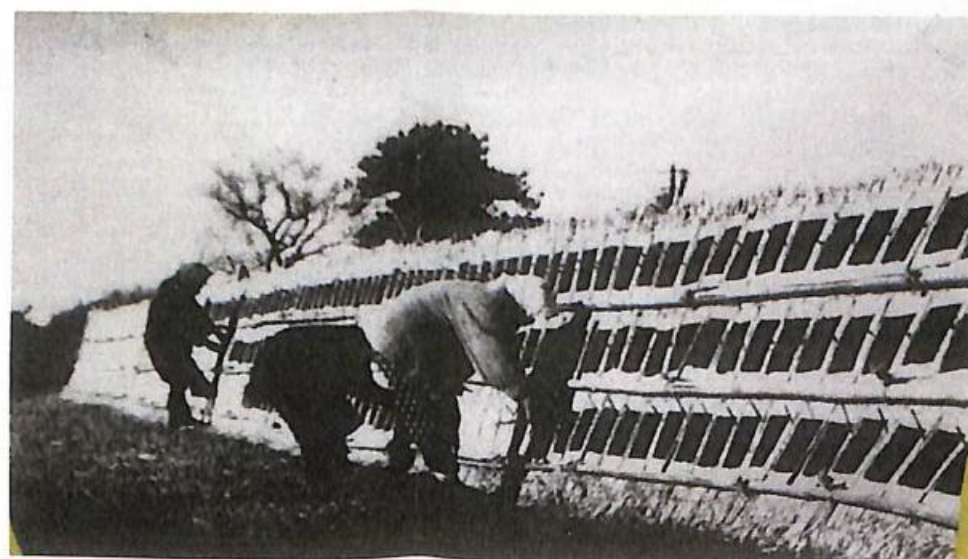
社家

明治初め



令和5年度 八幡公民館 主催事業『八幡史学館』第3回 資料

海苔養殖でにぎわう八幡五所の人びと



令和5年 8月8日(火)

午前9時30分から11時30分

講師

八幡公民館運営員会副会長

時田 光夫氏



かつての海苔養殖の手順

- ① 海苔とビロの乾づけ(8月) 糸奈竹とマテバシの枝の両方を使用し、竹の枝は主に深い場所、マテバシは主に浅い場所で使用した。
- ② 乾立って作業(9月) 海中に枝を立てる作業でかなりの重労働であり、深い場所では高下駄を履いていた。
- ③ 乾付け(9月末) 海苔とビロの下の砂地に、海苔の胞子を入れたカキ殻を引く。海苔綱を使うようになってからは、網のカキ殻を吊るした。
- ④ 乾燥苔の収穫(11月から3月) 伝馬船に乗って手作業で海苔を採取し、海苔ザリに入れた。
- ⑤ 不純物除去(11月から3月) コミヤ青のりをピンセットで選別し取り除く作業。青のりはすすり、苔石とも呼ばれ、もみりのなかに利用された。
- ⑥ 乾燥すすき(11月から3月) 海苔を四角い舟に入れて延ばす作業で、和船の帆すすきと同じ要領です。
- ⑦ 天日干し(11月から3月) 藁蓋の上に海苔を被せて約一週間天日干しをする。

上記のように、全てが手作業であったころの一軒当たりの海苔の収穫枚数は1日平均1,000枚程度であった。

海苔ができるまで

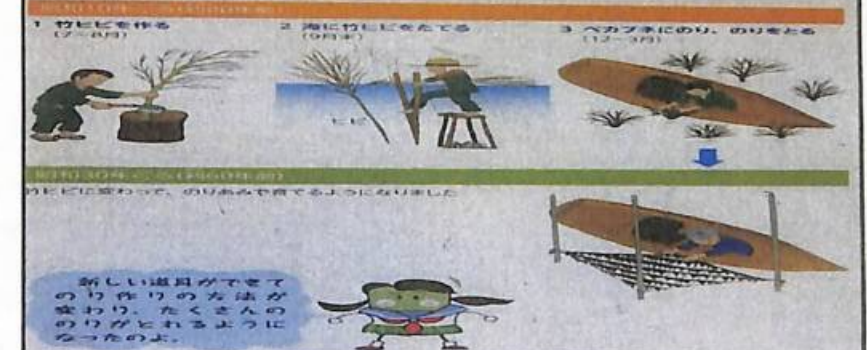
海苔作りはタネをつけるところから始まります。
そのタネを網で回収かけ、茹で煮て収穫します。



金沢新聞

のり作りの一年

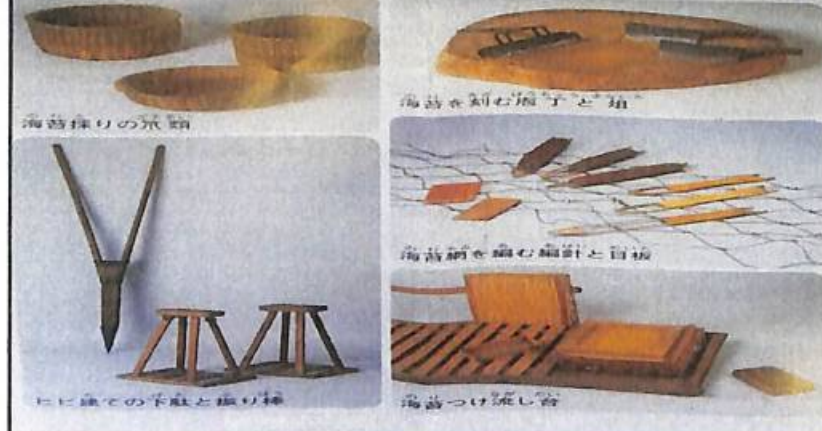
のりは、冬になり寒くなるとよく固めます。冷たい北風がふく中、型の中に手を入れてのりきとるので、とても大変な仕事でした。



のり作りの一瞥



「武蔵国浅草海苔製園」大日本物産図説明治10(1877)年 三代敷川広重



コシの下見 (右肩下向)

の生きた状態に育つことが、この時期の重要なポイントです。この時期は、魚の成長が最も速い時期であり、適切な管理とケアが必要です。特に、水質の管理と餌の与え方に注意を払うことが重要です。

●**コシノリ（7月中旬）**

この時期は、魚の成長が最も速い時期であり、適切な管理とケアが必要です。特に、水質の管理と餌の与え方に注意を払うことが重要です。

●**コシノリ（7月上旬）**

この時期は、魚の成長が最も速い時期であり、適切な管理とケアが必要です。特に、水質の管理と餌の与え方に注意を払うことが重要です。

●**草摘み（8月中旬）**

この時期は、魚の成長が最も速い時期であり、適切な管理とケアが必要です。特に、水質の管理と餌の与え方に注意を払うことが重要です。

●**製材（コシノリと同じ日）**

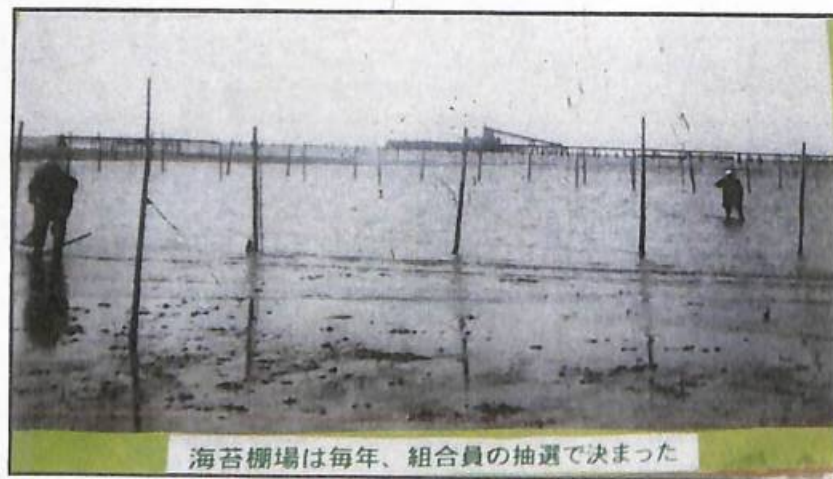
この時期は、魚の成長が最も速い時期であり、適切な管理とケアが必要です。特に、水質の管理と餌の与え方に注意を払うことが重要です。

●**高き観測（8月下旬）**

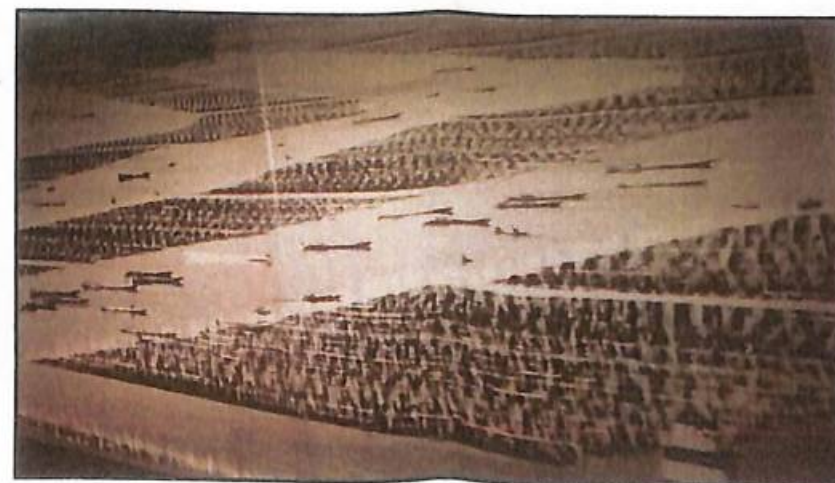
この時期は、魚の成長が最も速い時期であり、適切な管理とケアが必要です。特に、水質の管理と餌の与え方に注意を払うことが重要です。

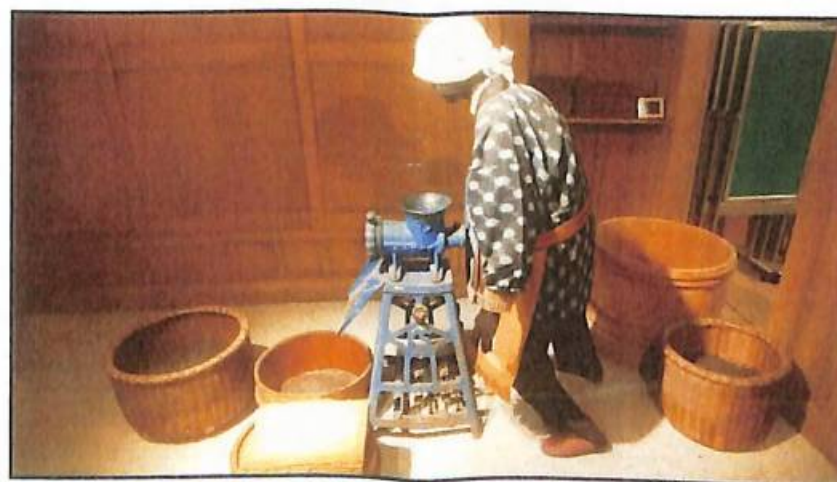
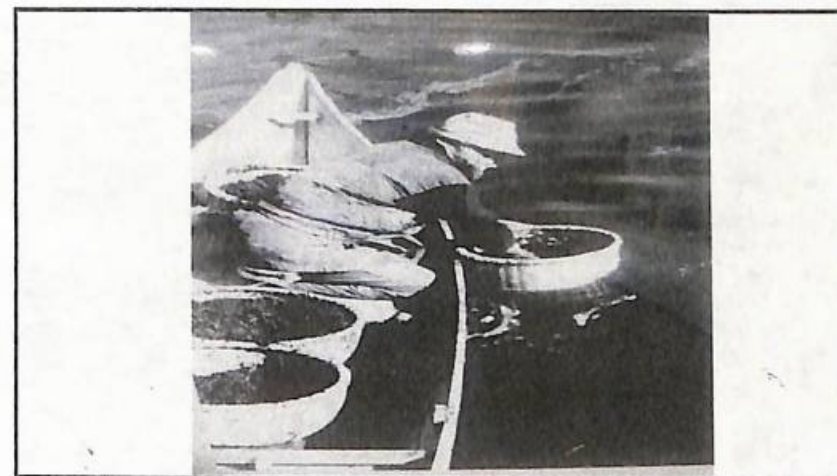
海苔づくりの1年と道具

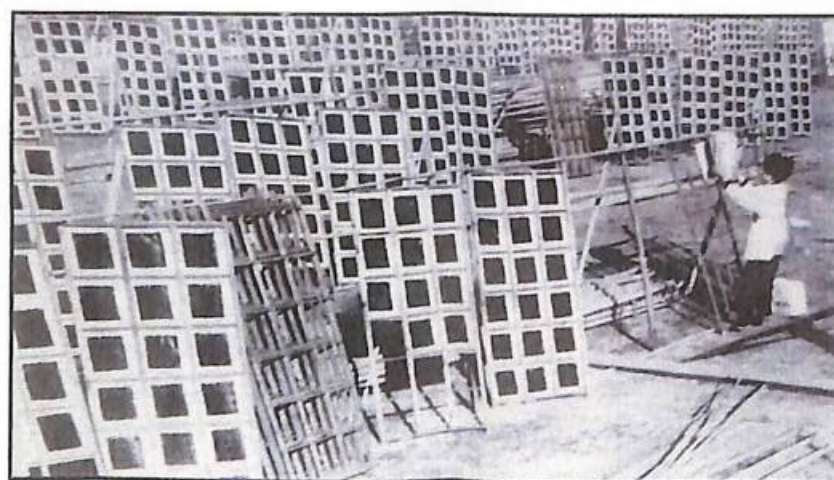
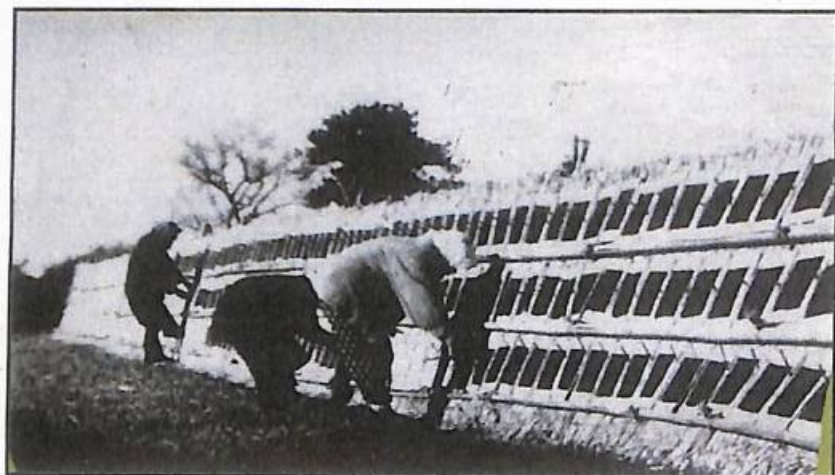




海苔棚場は毎年、組合員の抽選で決まった



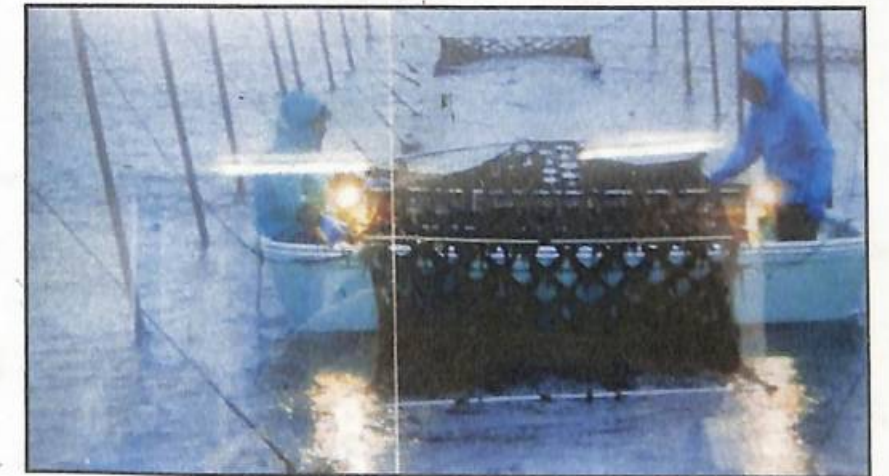
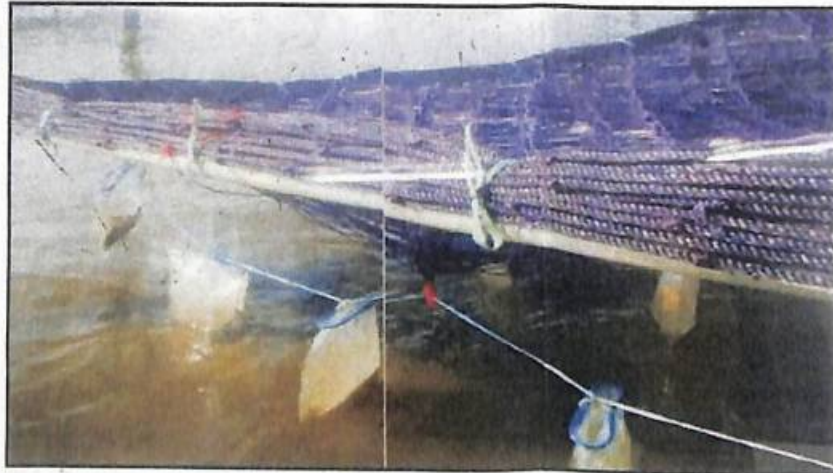






機械化された近年の海苔養殖方法を 見てみよう

現在は海苔じきを使わずに、海面の低い範囲に網を張り、海苔採取船(通称:潜水艇)を網の
下部に潜らせ、海苔を刃で切り落として収穫する、「ふた渡し」と言う方式が採用されている。こ
の「ふた渡し」の方法は、昭和25年(1950)頃からすでに実験的に行われていたが、下田海岸
(富津市明海町)においてである。なお現在では、海苔の地付け、莪断、乾燥などの一連の作業も
全て機械化されている。一軒当たりの海苔の収穫枚数は、最盛期には1日1万5,000~2万枚
に上がっている。



令和5年度 八幡公民館 主催事業『八幡史学館』第4回 資料

八幡の地理学



令和5年 9月12日(火)

午前9時30分から11時30分

講師

清和大学 特任教授

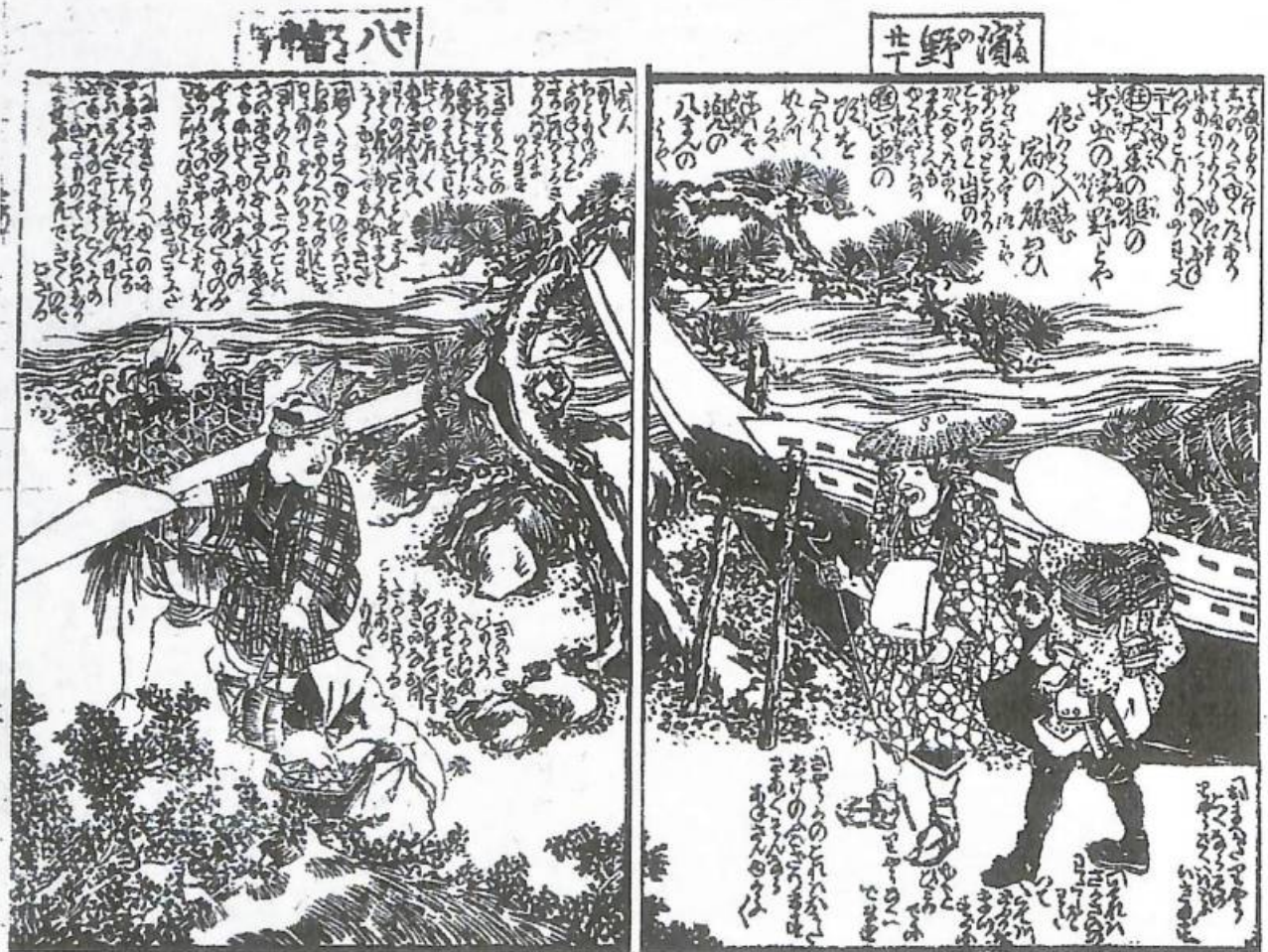
小関 勇次氏

地理 - 地圖

集落 - 可能
機能

八幡の地理学

清和大学 特任教授 小関 勇次



十返舎一九 『方言修行金草鞋』(むだしゆぎょうかねのわらじ) 通称『小湊参詣道順略記』(1827年) 絵: 歌川国兼
大きな船は五大力船。旅人が描かれているが、八幡宿は小湊参詣で多くの旅人が訪れる観光地でもあった。

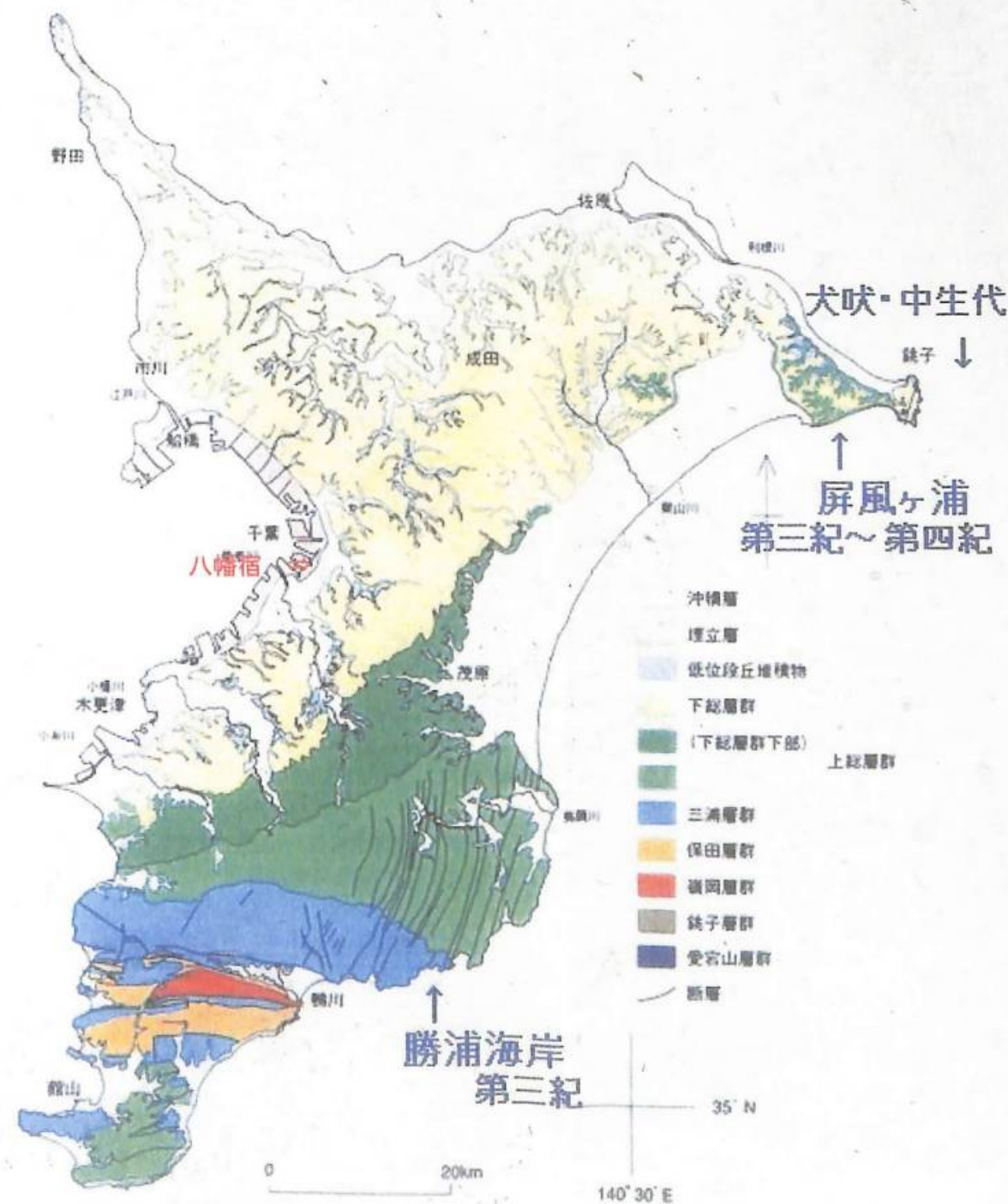
はじめに

八幡宿は『房総道中記』の挿絵にもありますように、また、地名の通り房総往還の宿場町から発展した町です。飯香岡八幡宮もありますが、伊勢や琴平のような宗教都市としての全国的なビッグネームがありません。集落の機能から見ると宿場を中心とした商業的機能と観光的功能をもった町といえます。江戸時代、八幡宿は宿場(現在の商店街)以外の生業はまず農業、副業は浜に出てあさりや蛤を採って商い、と定められていました。ですから養老川右岸の浜では外房のような量的な漁獲(イワシ漁など)は成立しません。ところが、養老川左岸の浜(出津・松ヶ島・青柳・今津など)ではカニ・エビ・シャコ・アサリ・アオヤギ・ハマグリなどの付加価値の高い魚貝類採取が盛んで「海にお金が落ちている地域」です。そこで八幡宿では商業的機能をいかして五大力船や押送船(おしょくりぶね)で海産物を江戸前に輸送する海運業が発展しました。

ところが時代は大きく変わり、1950年代以降は首都圏整備計画の一環として、東京湾岸の埋め立て事業に協力することとなり、美しい八幡の浜は姿を消し、石油化学コンビナートを中心とする京葉臨海工業地帯が造成されたのは周知のとおりです。八幡の生活環境は大きく変わりました。今回の講演会のテーマは「八幡の地理学」です。私たちの郷土八幡について生活に焦点をあてて、暮らしの変化を学ぶ機会としたいと思います。

1 地質・地形環境から見た八幡宿

下の地図は千葉県地質構造を表しています。八幡宿は東京湾岸がピンク色ですから埋め立て地(人工造成地)をしめしていますが、沿岸付近は白ですから沖積地となります。ですから八幡宿は沖積地という低地に位置しています。沖積地というのは流水の作用で形成された低地ですが、縄文海進といって6000年~7000年かけて干上がっていった低地です。海岸部には砂堆(砂丘までいかない風成砂の堆積による微高地)が海岸に面して列状に形成され、この砂堆の上に八幡宿・五井・姉ヶ崎があります。内房線もこの砂堆上を通過しています。千葉県全体で見ると東京湾に向かって盆地状の傾きをしていることがわかります。ですから、養老川・小櫃川・小糸川などの河川はすべて東京湾に流れ込んでいます。



調は→防一林のこ

2 地図でたどる八幡宿



街村と堀村





図1 1/5万地形図 千葉 (1951年応修) 姉崎 (1952年応修)

養老川三角州 JR内房線五井駅を中心とする地域は、今日の市原市の中核をなす地域であり、過去40年間で最も大きく変容した地域である。地形的には、養老川の下流部にあたり、市原台地と袖ヶ浦台地、その間の養老川低地、八幡や姉崎の砂州と海岸平野などからなっている。そのうち本来の養老川低地は、その河口を頂点として東京湾に突出した三角州低地であり、海岸線には干潟が広がっていた。この三角州低地の自然の姿は図1に描かれており、この地形図に示されている自然と人文の

諸現象が、昭和20年代までのこの地域の原風景であった。
市原の原風景 その風景を一言で言えば、水田の広がる農村であり、海岸地帯は半農半漁の村々であった。台地では薪炭・竹・豆類・麦などが生産され、低地の主要部は米、自然堤防や砂州の微高地では桑やタバコやナシなどが栽培されていた。海岸地帯では貝・ノリの養殖が盛んであり、特に青柳産のバカ貝は「アオヤギ」の美称で通るほどよく知られていた。明治期には、河口近くの干潟に塩田が開かれていた。国分寺台(市原台地)には、

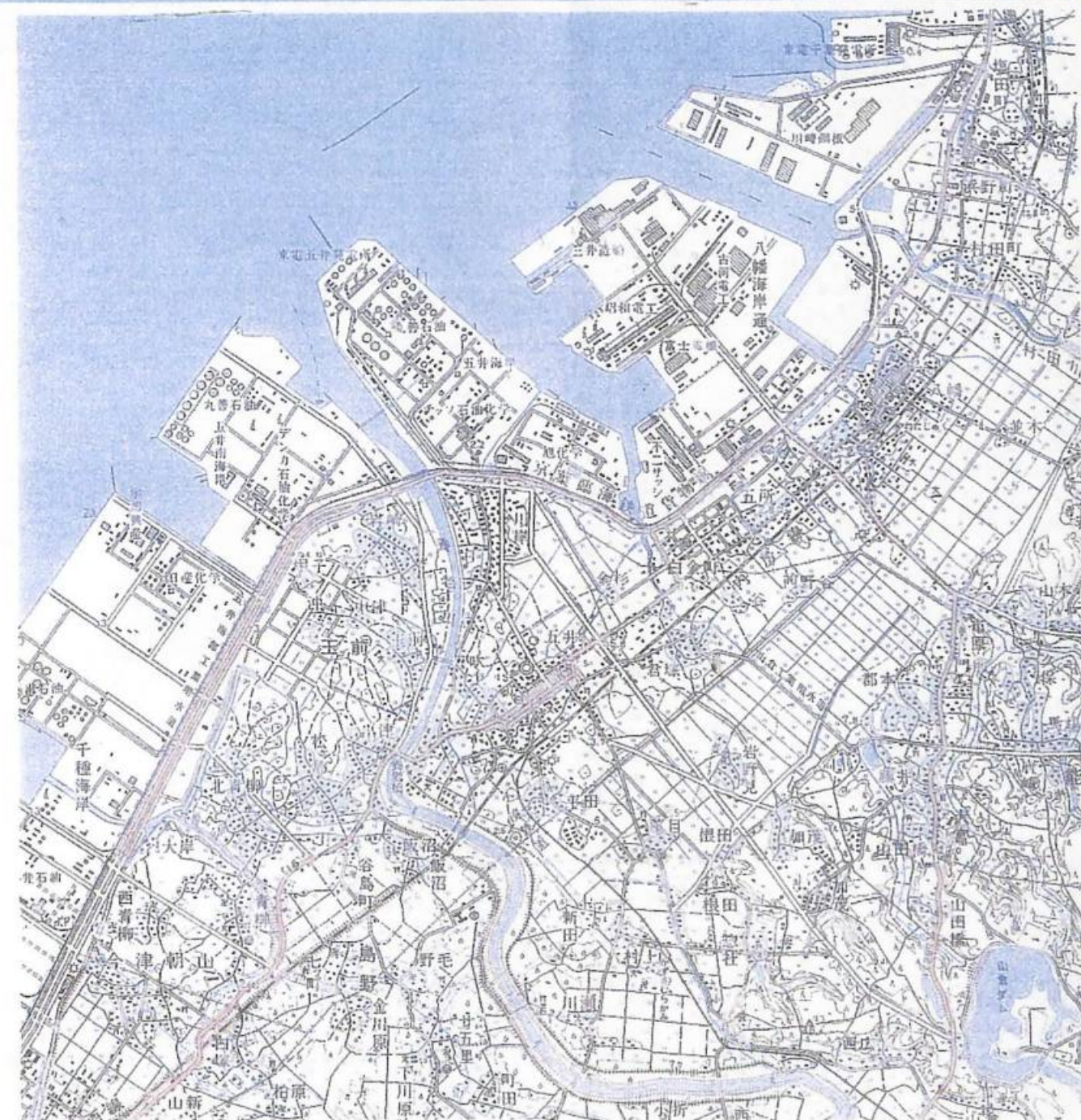


図2 1/5万地形図 千葉 (1972年修正) 姉崎 (1971年編集)

上総国分寺の存在は知られてはいたが、まとまった集落はなく、畑と林地の広がる土地であり、姉崎方面も同様であった。千葉街道に沿って八幡宿・五井などの集落があり、これらは砂州の上に位置している。鉄道は1912(明治45)年に現在のJR内房線が、これらの集落を連ねて木更津まで開通した。1925(大正14)年には小湊鉄道の五井～里見間が開通し、養老川流域の人や物資の移動に大きな役割を果たした。五井はその拠点となっていたが、駅前集落の域を出るものではなかった。

臨海工業地帯の形成 京葉臨海工業地帯の形成により、この地域は工業化と都市化の波に洗われることになり、著しい地域変容を遂げることになった。千葉県は1958(昭和33)年に京葉工業地帯造成計画を立案し、本格的に東京湾岸の開発を進めることになった。1963年に市原・五井・姉崎・市津・三和の5町が合併し、市原市となって市制を施行した。さらに、1967年には南総町・加茂村を合併して県下最大の広域市となり、行政の体制を整えた。当初の造成計画では、浦安地区から五井・市



原地区までを対象としていた。しかし、翌年の京葉臨海工業地帯造成計画では範囲が拡大され、五井・姉崎地区もこれに組み込まれている。

五井・市原地区 (1957～68年) では714haが造成され、そのうち今日の八幡海岸通りには、三井造船・昭和電工・古河電工・富士電機などの多種類の工場が進出した。また、五井海岸には丸善石油 (現コスモ石油) 関連の工場群などが立地し、東京電力五井火力発電所も進出した。1962～73年にかけて、五井・姉崎地区では1468ha

の干潟埋立工事が進められ、海岸線は2kmも遠くなり、工業用地は直線で区切られた専用の泊地を持った筒形状のものに変わった。ここには、出光興産と出光石油化学など4つの石油化学コンビナートが造られ、姉崎の巨大火力発電所 (360万kW) も立地して、京葉臨海工業地帯の中核を形成した。これら工場群へは京葉臨海鉄道貨物線が引き込まれ、工業用水道も造られている。従来の千葉街道に平行して高規格の国道16号が整備された。

3 姉ヶ崎・五井・八幡宿の違い

内房線には八幡宿・五井・姉ヶ崎と東京湾岸に三つ並んでいます。すべて東京湾岸にあって埋め立て事業により京葉工業地域が形成されました。他県の人から見たらこの街も同じでしょう。ところが市原市民はすべての街は同じとは思いませんね。その違いを見つけてみましょう。このような街の機能や形態の違いを見いだすこと＝「地域性」が地理学ではとても重要な研究の一つです。

(1) 小湊参詣で賑わった宿場町八幡

表紙の小湊参詣道順略記の表紙絵には五大力船が描かれ、水運で栄えた八幡宿の様子がわかります。ですから水運業で栄えた港町としての機能も持っています。また、古くから飯香岡八幡宮は市原郡の総社にあたり参詣客も多いために房総往還沿いには旅籠 (宿泊施設を持った宿) がたくさんありました。地名の八幡宿の「宿」は宿場を意味します。全国的に見ても～宿は宿場町なのです。ですから表紙絵の旅人が往来しているのは、江戸時代から宿泊施設や商業施設が連なる街として発展していたからです。

すると八幡宿は漁業や農業よりも商業的機能が中心であったこともわかります。ただ、宿場町は房総往還に面した旧16号沿いに限ります。海辺では宿泊客に提供する鮮度の高い魚介類が中心となり、穴子・ギンボ・シャコ・ハマグリ・海苔といった付加価値の高い漁業に特色がありました。九十九里のように網でイワシを大量に捕獲するような漁業ではありません。また、五所海岸から養老川右岸にかけては塩田も盛んに行われました。この塩田は姉ヶ崎で行われたいたような揚げ浜式塩田ではなく、入浜式塩田といわれます。当時では大規模で近代的な製塩方法でした。

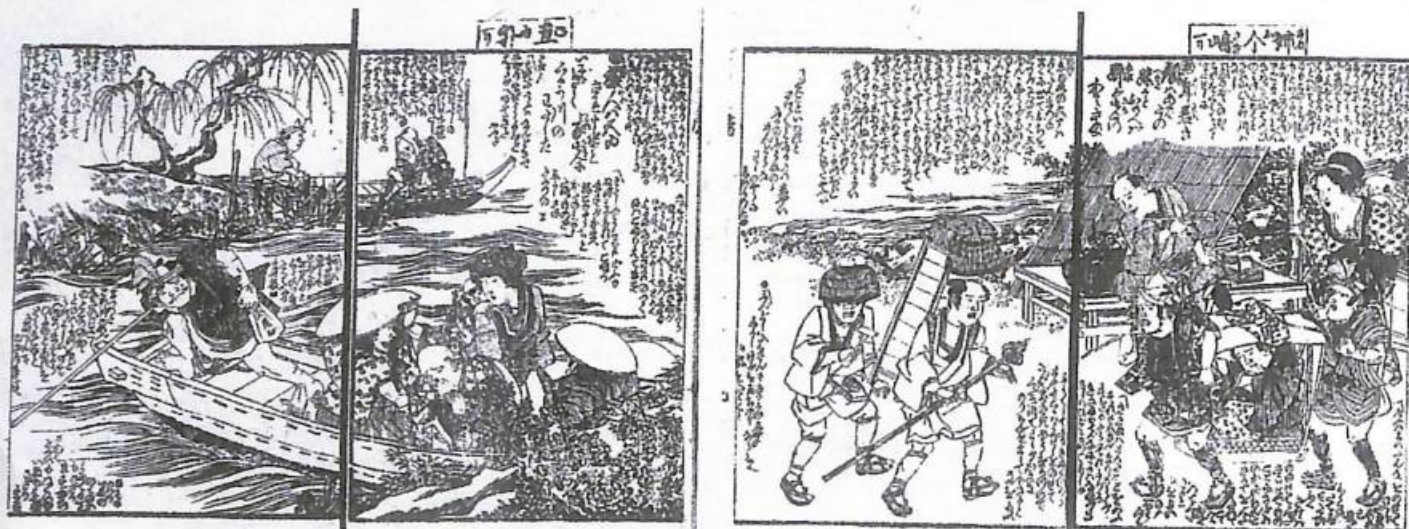
八幡宿はこれらの海産物を五大力船や押送船で江戸に運びました。また、内陸部や房総海岸から運ばれてくる年貢米の中継基地となり、江戸まで9里、年貢米を運びました。浜本地区では五大力船の船問屋の拠点で年貢米を納める蔵が立ち並んでいました。しかし、幕府の街道保護政策で一般の人たちは八幡と江戸の海路による直接往復は認められなかったため、徒歩で江戸を往復しました。このため八幡宿は宿場で潮干狩りなどを楽しむ観光地として知られるようにもなりました。

(2) 河岸場として発展した五井

五井の歴史では「河岸」というのは河川交通の港を指します。これに対して、海運の港は「津」といいます。五井にも五井河岸という地名がありますが、養老川が東京湾に注ぐ場所として河川交通ではターミナルにあたる重要な場所です。五井河岸に石材店 (中西石材店や高石石材店) や材木商 (司木材や佐川材木店) が集まるのは河岸場の特色です。五井は水陸交通の要に位置しており、古くから商業が栄えました。また、房総往還や久留里街道にも通じる交通のターミナルとしての機能がありました。養老川は今のよう橋など架かっておりません。房総往還 (江戸路) に飯沼の渡しがあったのみでした。

五井は現在でも「西の市」が開催されますが、一昔前の「西の市」は市原郡のみならず、遠方からも大勢の買い物客が訪れる名所として有名でした。年末に開催されたこの「西の市」で道具類を買いそろえて新しい年の準備をするのが慣わしでした。当然、交通機関がなかった時代ですから八幡宿と同じように宿泊施設を持った旅籠もありました。五井宿という地名はその名残です。

時を経て、五井更級地区は市原市出最大規模の商業施設の集積地です。今も昔も商業の中心地であることは偶然ではありません。



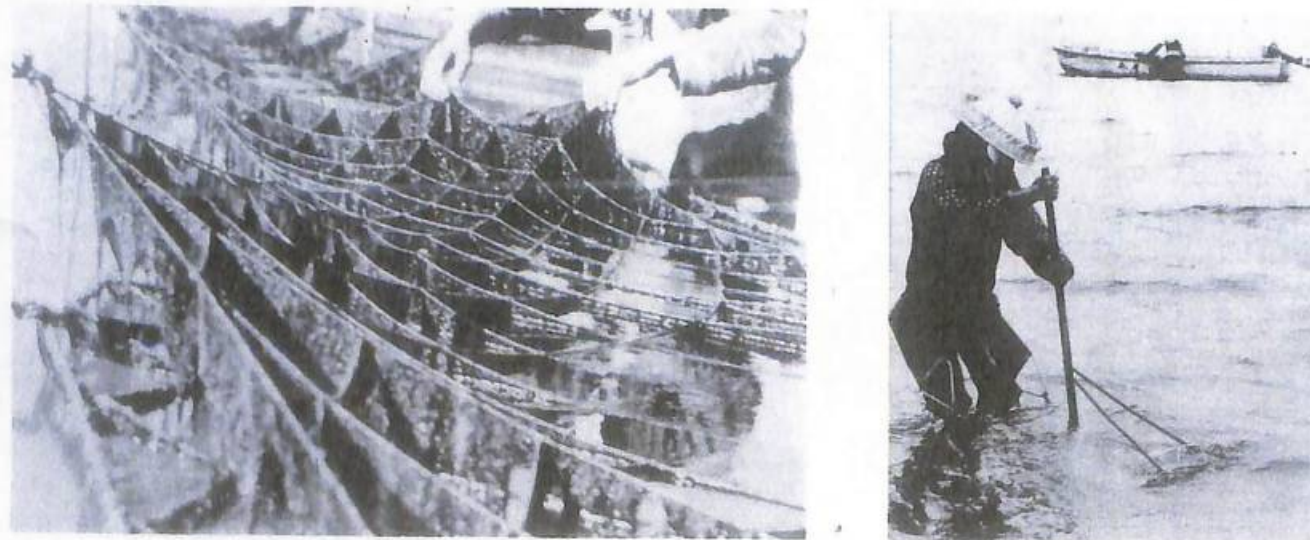
江戸時代の五井 (左) と姉ヶ崎 (右) 十返舎一九『小湊参詣道順略記』

(3) 漁業に特化した姉ヶ崎

姉ヶ崎は半農半漁の第一次産業が中心の街です。それでも中世には椎津城が築かれ、近世にも鶴牧藩が置かれたりしたのは、久留里街道と房総往還が交わる交通の要であり、軍事上の要に位置していたからです。また、姉崎神社は延喜式(天皇の勅願するお宮)で格の高い上総五社の一つで、頼朝が武運長久を祈願した神社としても有名でした。

ところが一般の人々の暮らしは漁業が主、農業が従の半農半漁の寒村といってよい状況でした。しかし、採取漁業であった海の暮らしが一変したのは海苔の養殖が始まってからです。海苔養殖は付加価値が最も高い漁業であることは間違いありません。それは第一に換金率(利益)が最も高いことがあげられます。現代でも贈答品として需要が高いですが、当時は信州や上州の旅館で必需品でしたから女達は行商に出向いておりました。背負籠一杯くらいの海苔は初日で完売するため、旅館に滞在して海苔を送ってもらい行商を続けるのだそうです。旅館を泊まり歩いて一年分の稼ぎは十分にあったようです。第二には保存性が高く魚のように腐ることがありません。海苔箱に収納すれば半年はもちました。第三に天候に左右されることもなく安定生産ができました。

姉ヶ崎の人たちの豪快な気質は「海にお金落ちていた時代」のたまものと思われます。



写真左 厳冬期、素手の海苔採り 舟板で手を叩いて暖をとる 右 マキ 貝類を捕る道具 (今津)

3 海辺と山辺の二つの気質

次に、八幡の「海辺と山辺」の暮らしの違いを見ていきましょう。海辺については八幡市街地から海側の地域で、山辺という地域は条里の水田が発掘された市原台地の裾野とイメージしてください。

海辺の漁師

漁村の暮らし(漁労・縄文人的)
 気が短い・待てない
 声が大きく短い・粗雑・乱暴
 体格がよい・頑健
 見てくれ悪いが、気持ちはよい
 小事にこだわらない
 金遣いが荒く気前が良い、
 無計画・勘だより
 モノあげる喜び(大漁)

山辺の百姓

農村の暮らし(百姓・弥生人的)
 気が長い・辛抱強い
 声が小さい・上品・丁寧
 華奢・貧相
 見かけよいが、意地が悪い
 慎重で思慮深い
 ケチで節約・助け合い
 石橋をたたいて渡る
 モノをもらう幸福(豊作)

いかがでしょうか。かならずしもこうではないかも知れませんが、うなずけるところあるかも知れませんね。これらの気質の違いは、海辺＝漁業、山辺＝農業といった生業からくるものと考えられませんか。

4 八幡の方言 通訳できますか?

A: オメー バンカタカイ ドヘイクダァ。

(あなたは夕方からどこに行くのですか?)

B: オラアヨ ヤワタン マチニ ヨバレテイグダヨ。ニシコソ ドヘイクダァ?

(私は八幡のお祭りに招かれて行くところです。あなたこそどこに行くのですか?)

A: オラホワヨ イネコキガオワツタカン マチン イクーダヨ。

(私どもも脱穀が終わりましたので、やはりお祭り行くところです)

B: オッ ソッカ。オラガホモ コナイダ ヤッタバッカイダエ。

(あーそうでしたか。私どももこの前に終わりました)

A: コトシャ ドーダッタエ?

(今年の米の収穫はどうでしたか?)

B: ナギデヨ。イッペトレタエ。

(天気に恵まれて、たくさん収穫できましたよ)

A: ソラァ イカッタデンヨ。

(それはよかったですね)

B: オーヨ。ダカイヨ コンヤノ マチハ ニギヤカスダッペヨ。

(はい。ですから、今夜のお祭りは賑やかになることでしょう)

五井の段



大津 飯沼に渡り



井野の濱



ストリートビュー

八幡の段



「八幡史学館」第18回シリーズ5回目

市立八幡公民館主催 会場 八幡公民館

日時 令和5年10月10日 午前9時30分～11時30分

八幡の小字名と千葉県の難読地名

郷土史研究家

八幡百選の会会員

佐倉東雄

はじめに

現在、千葉県には県庁所在地千葉市を入れて54の市町村がある。そしてそれぞれの市町村には大字なる行政地名がある。たとえば市原市にあっては八幡・五井・姉崎・五所・菊間・牛久・番場・平田のように。

ところで、定期的に無料のちいき新聞なるものが入る。その新聞に難読地名が載った。私はぐに関心をもった。それならば一気に千葉県下五十四市町村の大字のみを対象に私自身が難読読と思われ地名を取り上げてみようと言ってみれば大げさなものではない。

ちいき新聞と同じ地名が載ることは当然である。これは断わりなしの引用ではない。私の用いた物は『千葉県下・道路地図』（昭文社・発行・2018年5版）である。千葉県下54市町村の大字のみの地名がそれぞれ載っているのがよかった。一つ一つ地名に何回も目を通し、難読地名として取り上げてみた。あくまでも私の任意であるから、難読でも何でもないと人々がいてよい。また少々迷った地名も幾つかある。

難読地名をただ探してみてもつまらないので由来なども若干加えた。その資料としたのは『千葉県地名大事典』（角川書店・平成3年9刊）である。地名辞典といっても、その地名の歴史に重きを置き、地名の由来はわずかしかなかった。他の資料も使った。

八幡公民館主催の「八幡史学館」専任講師である先輩から、「八幡史学館」で話すのだから八幡そのものの地名を取り上げないことには意味がない、と指摘された。そして小字地名を入れたいという有り難い助言をいただいた。

先の角川の地名大辞典を見たら八幡の小字が幸いに載っていたのでよかった。八幡は難読でも何でもなし。また、小字を入れたにしても十分もすれば話は終ってしまう。そこで当市原市から千葉県内へと広げた次第。

責任逃れをする訳ではないが、地名の専門家でもなんでもないので調査研究もしていない。私自身の難読地名を探ただけである。それを皆さんに話す単純なものである。しかし、どうしてどうして千葉県内にも結構難読地名があるものだ。自身の勉強にもなった。

※市原市はかつて上総国に所属していたが、上総をカズサとは読めない。これは分三ツフサの転である。転の意は「音が脱落するか、別の音に変わって、語形が変化する」と。総を麻のと同じに捉える人が多いが、総には幾つもの意味があり、その一つにフサがある。フサの意味は「多くの糸を集めくくった首飾り」とある。※上総に振仮名を付けたとき、上にカと振り、総にズサと振るのかも難しい。朝廷（都）から上総国、下総国と付けられた。これは朝廷から距離が近い順からきている。大正時代の教科書に地図が載っており、上（か）、総（フサ）と、振られている。逸れるが、常陸国（ヒタチノクニ）は読めない。現在の茨城県。

〔朝生原〕あそうばら

一 生をソウと読ませるの、やや難しい説明。養老川の上流に位置し、小湊線の養老

〔天羽田〕あもうだ

一 羽をモウと読ませる。もとは市原市椎津と姉崎の一部で大正時代から開墾がなされ、

〔姉崎〕あねさき

一 難読として取り上げたのではない。姉崎にJR内房線の駅があるが、この駅名は姉ヶ崎駅である。面白い。

姉崎も姉ヶ崎も地名は同じで由来がある。あくまでも伝承である。「志那戸弁命（姉崎神社の御祭神）と志那都比古命（島穴神社の御祭神）姉弟神（一説に夫婦神）」とがあり、姉崎が先に当地に来て弟神を待たしたので姉ヶ崎と呼んだという。

〔新生〕あらおい

一 養老川下流左岸に位置する。新たに開発された意か。難読に入らないかも知れない。私たちは「生い立ち」と日常使っているのだ。

〔飯給〕いたぶ

一 難読地名そのものである。地名の由来は、市原郡誌（発行者・千葉県市原郡役所・大正5年7月20日発行）の里見村を見ると、里伝に伝ふ「白鳳年中、弘文天皇此地を過ぐるとき午食を捧げ玉ひしより名く」と。しかしこの由来だけでは、飯をイタと給をブとなぜ読ませるのか、その説明がない。「広辞苑」では弘文天皇を載せていない。大友皇子を見よと書いてある。「天智天皇の第1皇子。名は伊賀とも。671年天皇没後、近江朝廷の中心となったが、翌壬申の乱に敗れて自刃、1870年（明治3年）に弘文天皇と追諡（ついし）した。『懐風藻』所収の作品は堂々としていて、日本における漢詩の起こりとされる。（在位671～672）（648～672）」とある。他の天皇の専門書も見たが大友皇子（弘文天皇）が当千葉県に何ゆえに立ち寄ったのだろうか。まず来たそのこと事態が考えられない。逃れて来たのであるのか。どうしてこのような里伝が生まれるのか不思議だ。『日本書紀』に壬申の乱で自刃したことになる。さらに弘文天皇の伝承が当千葉県大多喜町筒森にもある。壬申

の乱に敗れ逃れて来たのである（老川村郷土史）。江戸時代に灌漑用水路として造られた川回しを弘文洞と名付けたのである。昭和54年5月突然崩落し、今は跡形もない。実際に弘文洞跡を見に行ったが、何もないので想像すら難しかった。

しかし弘文天皇とお后、家来などの史跡は残っている。白山神社もある。ここでも少し触れるが、弘文天皇は父親である天智（テンジ）天皇から即位をされ、弘文天皇になられたのか、即位をされたなら大友王子と言う必要は全くない。千葉県教育学部の井上孝夫氏が「房総・弘文天皇伝説の研究」を発表されている。私など素人には難しい。『古事記』・『日本書紀』を完全に通読し理解する必要がある。

君津市にも弘文天皇が皇后と家来ともども生涯を送ったという実に驚くべき細かな口承と伝承がある（『君津郡誌上編・他』）。昭和47年6月7日刊「何れにしても、弘文天皇が1250余年前に上総の国に逃れてきたと言ふことはありえない。弘文天皇でなく大友皇子ならいざ知らず、先ほども書いたが、明治になって大友皇子に対して弘文天皇と追諡したのである。歴史上、多くの問題を含んでいるが、

佐久間市長のとき、平成24年5月であるが飯食駅前（芸術的施設としてトイレも設置。観光振興課が関わった。設計は日本はもとより世界的な建築家藤本壮介氏のによるものであった。当初は観光バスも寄ったが、実際には使用されず今に至っている。あくまでも観光的施設としての目的であった。現在は、観光国際文化交流課が所管している。テレビ、雑誌掲載への取材が時々ある位だと云う。

※追諡（ツイシ）死後にその人の徳をたたえて贈る称号。

〔不入斗〕いりやまず

一 不入統とも書く。東京湾に注ぐ養老川左岸の沖積平野西端に位置する。地名の由来は、不輪の地で米を斗（量ら）ずともよかったことからと伝えられているが、入山瀬の転で谷の入口の意とも考えられるという。不輪とは不輪租税のことであり律令制で田租を国家に納めていない田地とある。荘園が特権として租税を免除されていた。荘園とは、平安時代から室町時代にかけての貴族・寺社の私的な領有地。

〔江子田〕えごた

一 エコダとは読まない。コがゴとにころのである。昭和38年通称ひょうたん塚（前方墳）が発掘調査され、後円部から耳環・勾玉（まがたま）・管玉・ガラス玉・馬具などが出土した。牛久と鶴舞の間に位置する。

〔大厩〕おおまや

一 オオウマヤとは読まない。村田川の下流に位置する。地名は古代の駅（うまや）、または馬牧の関連が考えられるというが、はっきりとは分からない。

〔小田部〕おだべ

一 まるで田舎弁のようである。オダベと読んでしまいそうだが、老川と村田川支流の間

竹生島
桐生島
比叡島
羽生島
地蔵堂
稲佐

に位置する。古くは、小田辺と書き、田の辺りに集落が所在したことに由来する地名という。

〔吉沢〕きちさわ　ヨシザワ、キチザワとは読まない。養老川水系小草畑流域に位置する。私の友人にヨシザワと言う姓の人のがいる。

〔国本〕こくもと　難読ではないが、クニモトと読んでも差し支えない地名だ。難読地名そのもの。廿は二十と同じ数字を表わす。養老川下流の沖積平野に位置する。戦国期には津比地（つひじ）と見え、江戸期には津以比地（ついでひじ）、二十

五里とも見え、また露乾地（つゆひじ）とも書いたと伝えられる。地名の起こりは鎌倉から25里の里程にあったことに拠るといふ伝承があるが未詳である。廿五里と書いてどうしてツイヘイジと読ませるのが知りたいのである。市原市文化財課でも分からないという。どのよう距離の測ったのであろうか。関心がもたれる。何れにしても頼朝が鎌倉に幕府を置いたことによって、計算された距離だと思ふ。

梨の栽培は少しづつ減ってきているが、江戸時代の後期から栽培が始まった、と言ふことである。（市原市市立農業センタ―職員の話）

現在ではイチゴの栽培をしている農家もある。隣の町田も梨を栽培している。千葉市にも小字だが、市原市と同じ廿五里が二箇所ある。千葉市若葉区源町の小字は二十五里（ツウヘイジ）と書く。もう一箇所は同区東寺山町に二十五里（ツウヘイジ）。すぐ近くであるが、双方の二十五里に貝塚がある。東寺山町の方を二十五里南貝塚と言ひ、原町にある貝塚を二十五里北貝塚と言ふ。千葉市の場合、小字であるから日常生活には使っていない。廿五里と二十五里をいっしょくたにしてゐる人がほとんどであると聞く。

千葉市の二カ所の二十五里は小字とはいえず市原市廿五里のように鎌倉と距離的に関係があることから付けられたかどうかは、解からない。

〔榎挟〕　ひつば　※余談だが、千葉市には加曾利貝塚をはじめ、沢山の貝塚がある。それも奥の方にありやや難しい地名だろう。挟（キョウ）はハサむ、ハサまるなどの意があるが、バと読まれることはない。養老川中流右岸東方に連なる丘陵部に位置する。

〔奉免〕　ほうめ　「ホウメン」と読まない。免をメに読ませただけ。転訛であろうか。

〔山小川〕　やまこがわ　「小川」と書いて通常オガワと読む。ここではコガワと読ませる。養老川支流平蔵川に小草畑川が流入する付近に位置する。地名は地形に由来するとも。

〔八幡〕　やわた　「村田川（境川とも言い、上総国と下総国の分かつ川）下流南岸平野に位置する。古

くは現在地の当方に位置し石塚村と称したが、移転して旧知を古屋敷と称したと伝えられる。地名は飯香岡八幡宮に由来される。

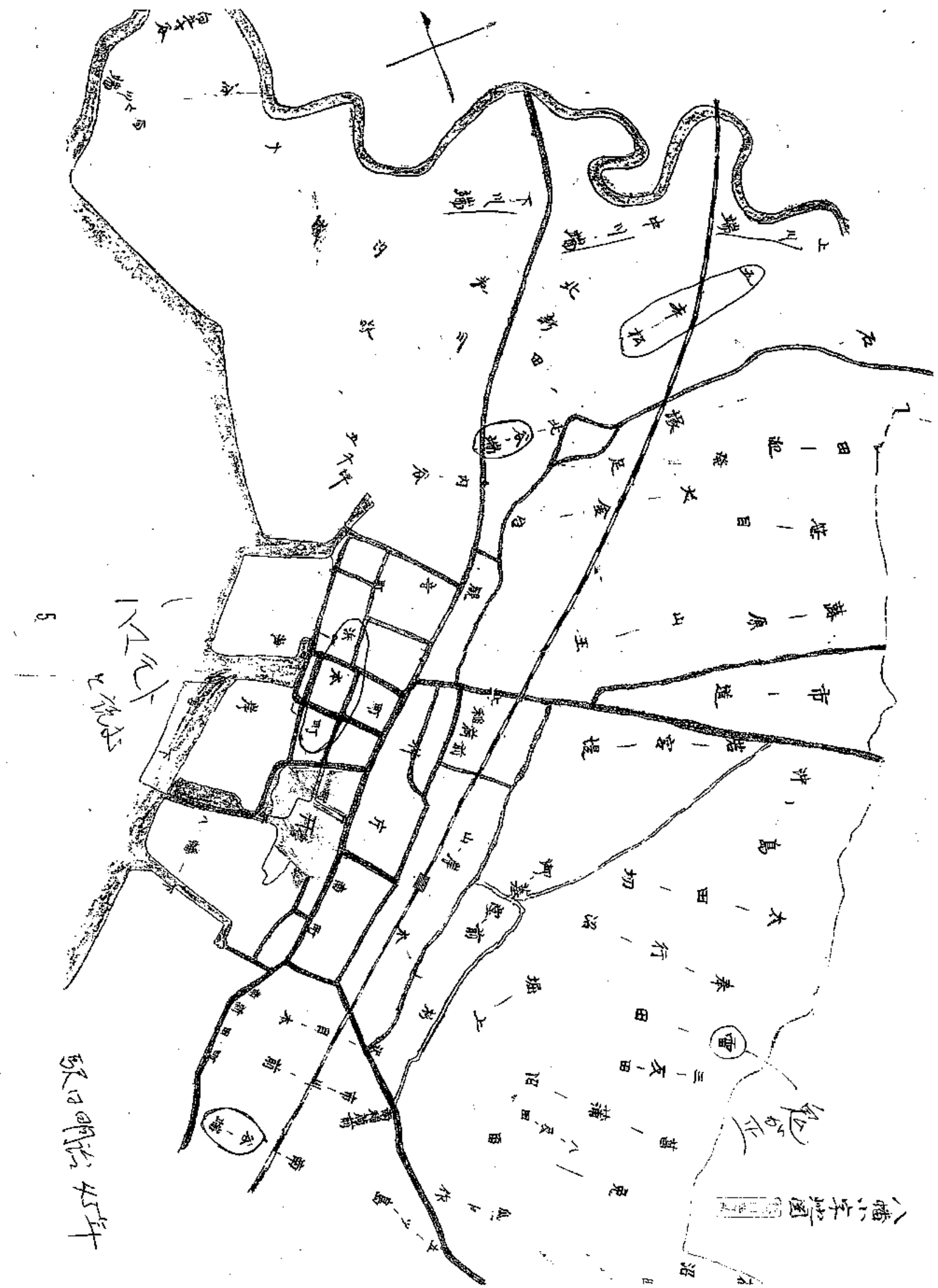
しかし飯香岡八幡宮は、幡を「マン」と読む。

なぜ、幡（ハタ）をワタと読ませるのか分らない。漢和辞典で幡を引くには巾（きんべん）で探す。巾そのものの字義は、てふき・おおう・おおい。お膳などのおい・頭巾（ずきん）・えりかけ・ひれ・きれ・布・織物・はば・幅などところある。解字として、布きれにひもをつけて、帯にさしこむ形にかたどり、布きれの意味を表わす、とある。幡を見てみよう。漢でハン、呉でホン、字義は、のぼり・はた・ひるがえす・ひるがえる・ふきん、とある。こうして漢和辞典を見ても幡をワタと読ませ、或いは関係を持たせる箇所は一つもない。幾つもの漢和辞典を見てもまた、幡をマンと読ませる飯香岡八幡宮（ハチマンダウ）のように。マンという読み方は、漢和辞典にはない。しつこくなるが、漢読みでハン、呉読みでホンである。マンと読むのはあくまで慣習からきているとある。

※なお、八幡には小字の地名が五十一ある。次のとおりである。

南新田（みなみしんでん）・南谷端（みなみやばた）・市川前（いちかわまえ）・沢目木（さわめぎ）・南稻荷前（みなみのりまへ）・五ツ島（いつつしま）・砂田（すなだ）・笹沼（ささぬま）・瓜作（うりさく）・鬼田（おにだ）・八反田（はったんだ）・太田切（おおたぎり）・沖の島（おきのしま）・若宮堤（わかみやづみ）・北稻荷前（きたいのりまへ）・稲荷前（いなりまえ）・山岸（やまぎし）・御墓堂前（みはかどうまえ）・杉ノ木（すぎのき）・南町（みなみまち）・八幡下（やわたした）・飯ゲ岡（いいがおか）・片町（かたまち）・（国本）（はもと）・仲町（なかつちやう）・観音町（かんのんちやう）・内谷（うちや）・五千坪（ごせんぼ）・大金台（おおおかんだ）・山王（さんのおう）・市道（うちみち）・踏原（おちばら）・笹目（ささめ）・発足（はつそく）・石塚（いしづか）・上川端（かみかわばた）・五本松（ごほんまつ）・北八端（きたやばた）・北新田（きたしんでん）・下川端（しもかわばた）・中川端（ななかかわばた）・大五十谷（おおごじやうや）・老川（おいかわ）・汐吹（しおふき）・向五十谷（むかいごじやうや）・五十谷（ごじやうや）・向上川端（むかいがみかわばた）・川岸（かわぎし）・五千坪（ごせんぼ）・海岸（かいがし）・宮ノ下（みやのした）と、51の小字から成り立っている。小字名の載っている図を添付する。

※八幡の小字を右に上げたが、現在八幡から独立して、八幡石塚一丁目・同二丁目・八幡北町一丁目・同町二丁目・八幡浦一丁目・同二丁目がそれぞれに大字になっている。



八幡は明治二十二年、現在の大字名。はじめ八幡町、昭和三十年市原町、同三十八年からは市原市の大字となる。

市原市役所に行き、現在の八幡町の字名地図を貰いに行ったが、全く拉致があかず、空戻りになった始末。千葉市で発行している字名地図を参考に持っていたが、市原市ではこのような形での字名地図は作成していないとのことで、少しやりやってきました。従って右の五十一の小字は独立した町々も含まれていることを承知していただきたい。

幸いにして飯香岡八幡宮所蔵の古文書の中に八幡の小字地図があったので、それをコピーし、資料として使わせていただいた。八幡宿駅が載っているから明治四十五年以降に作成された八幡小字図である。行政で作成したものか分からない。市原市役所に行き、このような八幡小字地図があるか調べもらったところ、無いといふことであつた。

※内房線の姉ヶ先駅でも触れたが、八幡に駅が開設されたのは、明治四十五年三月である。駅名は八幡宿とした。八幡宿は明治七年、二十二年の宿名で同年二十二年、昭和三十年八幡宿・五所金杉村・山木村の三宿村が合併して成立した。駅名は八幡宿として現在に至っている。一時、市原駅にする運動が起こったが、自然に消えた。

※余計なことになるが、八幡を漢和辞典のとおり、ヤハタと読ませる市がある。銚子市八幡町はヤハタチヨウである。富津市八幡もヤハタと読む。香取市の虫幡はムシワタでなく、ムシハタと読む。

※八幡製鉄所の八幡はヤハタと読む。軍需産業の中心として日本鉄鋼鉄業の発達を主導した国営製鉄所。その後、色々の移り変わりを経て現在は新日本製鉄となつてゐる。

〔分目〕 わんめ

千葉市

※千葉市はその昔、下総国であつた。国府は現市川市国府台に在ったという。この下総であるが、シモフサと読む人がいるがシモウサが正しい。フサはフサの古語の読みかた。総をどうしてウサと読むのか書いてある辞典はなかった。

〔五十土町〕いかづちちようー若葉区にあ。難読地名なり。都川上流の台地に置する。地名は、雷神を

〔生実町〕おゆみちようー中央区にあり。生をオユと読む。初めて余所から来た方には読みづらい地名。しかし『広辞苑』に「生ふ」という語が載っている。オホ（大）を活用させた語。

（植物などが大きく育つ意）はえのびる。成長するとある。活用させた語とあるが、私は文法については全く分からない。
※横道に入る。私は千葉市の職員として定年退職まで勤務した。十以上の職場の移動辞令を受けたが、その一つに生浜町役場がある。五年ほどである。生浜町がすぐ飲み込めなかった。

〔山生町〕さんのうちようー稲毛区・生をノウと読む。なぜ読ませるのは分からない。
〔園生町〕そのうちようー稲毛区・ソノはソノの転訛であろうか。ノウは右と同じで何故そのように読ませるかは分からない。

※寄り道をする。鳥取県の日本海側に面して皆生温泉がある。隣は島根県で案来市である。この皆生温泉であるが、カイケと読む。生をケと読むのである。
※寄り道をする。植生の宿（文部省唱歌か童謡か忘れた）という歌があった。年配の人なら口ずさんだだろう。ここで使っている生であるが、「ユウ」と読む。手元の漢和辞典で触れているものは無かった。

※寄り道をする。弥生時代という時代がある。縄文時代と古墳時代の間の時期である。弥生の生を「ヨイ」と読む。当たり前に読んだり書いたりしているが、よく考えてみれば、生をどうして「ヨイ」と読むのかと思う。弥生の名の起こりは、明治17年東京、本郷弥生町の貝塚で土器から名付けられた。現在は文京区弥生二となっている。「弥生式土器発掘ゆかりの地」の碑が建っている。
〔千種町〕ちぐさちようー花見川区にあり。難読でも何でも無いが取り上げてみた。種は漢読み呉読み共にシュ・シュウと読む。漢字の意味として、タネ・シュルイ・タグイ・ウエル・シク（布）とある。クサと読むことは載っていない。ただ、人名としてオサ・カズ・クサ・グサ・シゲ・タネ・フサとあった。チグサチヨウと当たり前のように読んでいるが、実は難しいのである。由来は分からない。

※『広辞苑』を引くと、千種とある。そのまま写す。「（チクサとも）種類の多いこと。種々様々。いろいろ。くさぐさ。古今和歌集（恋）「秋の野に乱れて咲ける花の色千種に物を思ふころかな」がある。千種は早くからある言葉である。
〔南生実町〕みなみおゆみちようー中央区・生実町と同じ解釈ができよう。

〔小食土町〕やさしどちようー緑区・難しい地名である。村田川上流と鹿島川上流に挟まれた台地に位置する。江戸期から明治22年までの村名。それ以前は矢指渡村・矢指戸村・矢指土村などと古文書に書かれているという。由来は分からない。

旭市
〔行内〕ぎょうじ
ーこれも難読。行は行司（行事）の行で普段使ったり読んだりしている。相模の行司役である。内をジと読むのは困難だ。九十九里浜最東端の海岸部に位置する。内をジと読むについては分からなかった。

〔三川〕さんかわ
〔仁玉〕にたま
ー難読ではないが、ミカワと読んでも差し支えないようなので取り上げた。
ー仁をニと読むについては由来も伝承もなかった。九十九里浜北部の平坦地、新川下流東部に位置する。

〔猪野〕むじなの
ー難読でも何でも無いが、猪は穴熊の異称でよく聞くが読めない人も多いようだ。擬音取り上げてみた。

我孫子市
〔我孫子〕あびこ
ー難読であるが、今や難読でもなんでもない。当たり前の地名になっている。安孫子・案飛子・阿孫子・吾孫子とも書いた。手賀沼の北、下総台地上に位置する。地名の由来は、古代にアビコ（吾彦・我孫・阿比古・綱引などと書いた）姓の持つ氏族が、畿内から当地に移住して来たことによる由来するという説や、綱曳く即ち漁業に起因するという説がある。

何と言ってもアビコを有名にしたのは、大正年間、白樺派を大表する志賀直哉・武者小路実篤・柳宗悦（思想家・民芸運動創始者）が、大正末期からわが国ジャーナリズムの先駆者、杉村楚人等が住んでいた。文化の町であったのだ。
白樺派とは、明治末から大正にかけて近代文学の一派。雑誌「白樺」による。
これは難読だ。都をイチとよませるのだから。一部、市部と書いた時代もあったようだ。手賀沼の北に位置する。

〔岡発戸〕おかほつとー難読ではないだろう。しかし取り上げてみた。オカハツトと読んでも笑われないだろう。岡保戸と書いた時期もあった。手賀沼の北に位置する。地名は、地形がほと（人体の陰部）に似ていることに由来するという説やほど（火処）すなわち溶鉱炉に由来し、古代の製鉄関連地名とする説がある。

〔日秀〕ひびり
ーこれは難読だ。秀をビと読ませるのは何故だろう。地名の由来は分からない。北は

利根川、南は手賀沼に臨む。

いすみ市

※いすみ市は平成17年12月5日市に移行したが、合併する市であるため、事前に合併協議会を発足させた。そして色々な意見を募った。その一つとして市の名前についても住民の意見を募った。市の表示も住民から募った。幾つか並べたようだが、ひらがなで「いすみ」とする意見が一番多かった。公平である。

しかしあまりにも無味乾燥である。他市のことについて、どうこういう筋合いはないが、**夷隅**における漢字表記に夷隅の歴史の意味が存在するのである。簡単だからいと言ふ分けにはいかない。

※いすみ市が文献に現れるのは古事記に「伊自牟」(イジム)とある記載で、その後日本書紀に「伊基」(イジミ)と、宝龜5年(774)の平城京出土木簡には「伊郡」と記載されている。「夷隅」の文字が使われ始めるのは鎌倉時代と考えられる。(いすみ市文化財MAP)より。

〔小池〕おいけ
〔行川〕なめがね

「コイケ」と読んでしまうかも。塩田川最上流流域の山地とその谷間の低地上に位置する。なかなか読めない地名だ。夷隅川中流左岸に位置する。ナメガワと読ませる由来は分からなかった。将来平仮名でなめがねとはなるまい。

〔能実〕のうじつ

ところどころいすみは夷隅と書いた。それをいとも簡単にひらがなにしてしまった。漢字表記の地名を大切にしていなかった証である。市民も議員も市長も。行政の責任ではない。結局は住民の無責任にある。夷隅町が市になる話を持ち上がった時、隣同士になっっている町村との合併し市政を敷く話が出た。合併協議会を設け納得に至るまで話し合いを進めた。その中に市の名をどうすべきか、大きな検討課題であった。結局今はやりの平仮名に落ち着いた。私がどうのこうのと言う筋合いではないが、漢字がよかった。歴史が読み取れるからである。

〔日在〕ひあり

「ノウミ」と読んでしまいうである。夷隅川左岸に広がる平野の北部に位置する。地名の由来は、「よく実る土地」の意である。特に難読でもないが、すぐ読めると言う地名でもない。夷隅川と塩田川河口に挟まれた海岸平野に位置する。地名の由来がある。紀伊国日高の字体がくずれて、紀伊・和泉などの上方漁民の移住を裏づけるものとの説がある。室町期の日在城跡がある。日在ばかりではない。南房総市から勝浦市そして九十九里の太平洋岸に紀伊半島のの中の紀州(現・和歌山県)黒潮の流れを利用し、魚を追ってきた来たのである。少しは口にもいれたかも知れないが、田の肥やし(干鰯・ほしか)にする為である。

市川市

〔香取〕かんどり

「面白くものである。香取市はカトリと読み、市川市ではカンドリと読む。何故そうなったのであろうか。由来は分からない。

〔稲荷木〕とうがぎ
〔北方〕ぼっけ

「ちよつと読みづらい。江戸川下流、旧江戸川が分流する左岸に位置する。新しい人には読めない地名だ。地名の由来は分からない。大柏川中流左岸に位置する。

一宮町

〔東浪見〕とらみ

「東をト、浪をラ、と読ませるのであろう。虎見とも書いた。九十九里浜平野の南端に位置し、東は太平洋に面する。地名は沖合に砂泥が堆積し、泥海の名が生じ、これが転訛したものという。上総国誌に書かれているというが、転訛の拠所が私には分からない。転化には多分に素人には分からない国語文化がある。
※大字の地名だけで10しかない。1021年東京オリリンピックの競技サーフィンの会場で一躍有名になった。実際の場所は同町釣ヶ崎海岸である。

印西市

〔案食卜杭〕あじきぼっけ

「面白い地名もあるものだ。由来は分からない。印旛沼北部、将監川・長門川流域低地に位置する。江戸時代から湿地を埋め立てて農業に適した土地づくりをした。案食については省いた。

〔大廻〕おおほ

「「おおはさま」ともい、大迫とも書く。印旛沼の北方、江戸川の右岸の台地に位置する。地名の由来は分からない。

〔酒直卜杭〕さかなおぼっけ

「地名の由来は分からない。印旛沼北部、長門川西部の低地に位置する。天保郷帳には安食卜杭の地名も見えという。

〔将監〕しょうげん

「監は監督の監(カン)である。それをゲンと読ませるのである。前は本埜村の大字。印旛沼北部、枝利根川(現将監川)右岸の低平野地に位置する。地名は新田開発の請負人名によるものか、とある。

〔草深〕そうふけ

「忽深とも書く。印旛沼と手賀沼に挟まれた台地上に位置する。思うにこの辺一帯は新田の開発がかなり早くから行なわれていた。草などが深かったので、草深とし、次第次第に転訛しソウフケとなったのではないか。

〔立埜原〕たてやわら

「埜は通常ノと読む。ここではヤと読ませている。何か意味があるのか。印西市には、

萩塋（ハギノ）・本塋小林（モトノコバヤシ）があるが、立塋原は塋をヤと読ませる。
 ※特に難読に値する地名はないようだが、海を放棄し、埋立てをなしてから忽ちにかつては海苔の養殖と漁業の町であったが、海を放棄し、埋立てをなしてから忽ちにして、人家及びマンション、企業等のビルが建ち、東京都民の市と言われている。
 ※わが八幡が海の埋立てをする前は浦安から浅瀬の買船が来ていた。また、八幡の人は浦安の境川付近に海苔の簀を刈りに行っていた。

「砂田」いさごだ 一砂は極めて細かく岩粒の意。サ・シャ・スナと読む。イサゴと読むのは難しい。
 「下ヶ傍示」さげほうじ 難読に値しないかも知れないが、面白そうな地名なので抜き出してみた。南白亀（ナバキ）川中流左岸に位置する。地名は、境界を示す傍示が所在したことによるか、とある。

※大網白里市に私達にとって歴史的に關りのあ地名がある。大字でないから小字辞典を見ないと探せない。小字で東宮谷・西宮谷がある。しかし千葉県の歴史書の何れを見てもただ宮谷となっている。

柴山典は久留米藩主であるが、色々な政治的動静の中で八幡から書き始める。慶応四年五月大総府より軍監（軍事の監察監）命じられる。庁舎は旧幕軍追討のため、最初市原郡八幡町に役所置く。次に埴生郡長南宿（長生郡長南町）の浄徳寺、同年山辺郡宮谷（山武郡大網白里町）の本国寺を借り受け転陣した。
 明治二年二月、管轄地の安房・上総・下総・常陸の一部も含む地域が宮谷県となり、知事はそのまま柴山典がなる。同四年七月職をとかれ、変わって岩鼻県（上野国・現群馬県）大参事の柴原和（のちの初代千葉県令）が同県知事に就任。
 ※上野国はコウズケノクニと読む。隣の下野国（現栃木県）はシモツケノクニと読む。野をズケと読み、ツケと読ませる。

ここで取り上げたいのは山辺郡宮谷である。宮谷は小字地名である。難し小字である。しかし千葉県の歴史を一通り承知している人であれば、「ミヤザク」と読むだろう。千葉県の郷土史には単に宮谷としか書いていない。実は東宮谷と西宮谷と二つの小字地名がある。千葉県の基となる仮庁舎の置かれた本国寺は西宮谷である。

千葉県の誕生は、明治六年。千葉県権令は柴原和。

「面白」おもじろ 一白をジロと読ませるところが面白い。養老川上流に位置する。

「新丁」しんまち 一丁はテイ・チヨウと読みヒノト（十千の四番目・シモベ・壮年の男子の意があり、国字の読みとしてチヨウ（マチ）の略字。辞書を引けば難しくはない。

「百鉢」もふく 一鉢（ボウ）をフクと読ませる。鉢は、矛（ホコ）。刀のきっさき。まったくフクと読ませる糸口がない。西畑川と平沢川の合流付近に位置する。

※御宿そのものの大字はない。
 「御宿台」おんじょくたい 一御宿そのものの大字としての地名はない。ここでは御宿台（オンジョクダイ）を抜いてみる。台はともかく、御宿であるが、難しい地名ではない。しかし御宿町役場に訊いてみたら、県内はもとより県外の人から、そちらの町の名は何と読むんですか。「オンヤド・ミヤド・ミシユク」などと電話が掛かって来るとのこと。御宿海岸には月の沙漠記念像が建立されている。童謡の「月の沙漠」の歌は皆さん口ずさんだことでしょう。

さて、地名の由来であるが、昔、鎌倉の北条時頼が諸国行脚の途次、この地にオヤド（御宿）をとられたことに由来するするという。そのとき詠んだ歌がある。（御宿せし その時よりと 人間はば あじろの浪に 夕かげの松）『房総の伝説』（平野 馨 編著）より。

夷隅郡御宿町であるが、町の地積は狭い。御宿台であるが、御宿西部グリーンタウンとも称されている。大手の業者によって、開発されたのである。

※メキシコ塔もあるが、江戸時代の話になり、歴史になるので省く。
 「七本」ななもと 一さして難しい地名ではないが、由来が面白いので抜いてみた。上落合川上流部に位置する。地名の由来は当村から下る道が7箇所に通じていたことによると伝えられている。

〔篠籠田〕しこだー下総台地北西部、大堀川右岸に位置する。平安期は志子田、室町期は色陀、江戸期に入

って篠籠田になったようだ。初めての人はシコダと読むのは難儀である。

〔常磐台〕ときわだいー常磐は辞典で直ぐ見つかる。難読でも何でもないので、読めないのが恥ずかしい位。

〔十余二〕とよふたー下総台地北西部、大堀川北に位置する。トヨフタと読む。地名の由来は、明治2年小

金牧・佐倉牧に東京府下から移民が入植し開墾をした際の移住の順序が12番目にあ

ったことによる。新十余二・中十余二の地名もある。飯香岡八幡宮の八幡と同じ読み。漢和辞典にマンの

読み方には触れていない。

勝浦市

〔墨名〕とな

―難しい地名だ。勝浦湾に南面する丘陵上に位置する。地名は、黒土名が転訛したもの

もしい、黒土の浦がつづまったものともいう。

〔芳賀〕はが

―難しい。夷隅川上流右岸に位置する。漢和辞典でも難読としている。

〔浜行川〕はまなめがわー古くは、滑川（ナメガワ）と称した。なぜ滑川が行川に替わり、読みもはそのま

まナメガワとしたのか分からない。いすみ市にも行川（ナメガワ）がある。

〔部原〕へばら

―バラと読まず、ヘバラと読ませる。勝浦湾東の半島北東部に位置する。地名は、海辺

の原がつづまって辺原となり、のちに部原となったともいい、日本武尊の東征時に当地

で悪蛇退治をし、蛇原と称したのがのち部原に転じたとも言われる。

〔法花〕ほうげ

―夷隅川上流左岸に位置する。古くは法華と書いた。地名の由来は、「生（は）う華」又

は雑草蔓延の意の「生うけ」と伝えられている。

香取市

〔大角〕おおとがり

―下総台地当部の丘陵上に位置する。地名の由来は分からない。角は先がとがっている

からトガリと読んだのかも知れない。

〔返田〕かやだ

―返をカヤと読むのは難儀である。下総台地北部の丘陵上に位置し、北部を利根川支流小

野川が西流する。

〔観音〕かんのうー音をノウと読む。小野川支流の谷地に臨む下総台地北部縁辺に位置する。地名は聖観世

音を本尊とする真言宗観音院（廃寺）の所在によるものか。南北朝期に見える村名。

〔弁島〕こうがいじまー利根川下流の大三角州の西部、利根川左岸で、通称大曲の屈曲部内側の自然堤防の

上に位置する。地名は地形の形状によるものか、という。弁はケイと読み意味はこ

うがいで、束ねた髪に使うもの。女子の成人式。

〔鳥羽〕とっぱ

―難読ではないが、ややなんと読むのかなと立ち止まってしまふ。鳥をトッと読み、羽を

パと読ませる。やはり難しいかな。下総台地北部の丘陵地上に位置し、西方を利根川支

流大須賀川北流する。京都の戊申戦争、鳥羽・伏見の戦いは、トバと読む。

〔新里〕にっさと

―新をニッと読むのは難儀である。下総台地東部に位置する。

〔新部〕にっべ

―右と同じで新をニッと読む。シンベと読んでしまふそうである。鎌倉時代から見える

村名。新辺とも書く。下総台地北部の丘陵地縁辺に位置し、南西部を利根川支流小野

川が西流する。

〔丁子〕ようご

―難しい地名だ。丁はテイ・チョウと読む。参考までだが、字義はひのと（十干の四番

目）五行では火にあて、方位は南にあてて、つよい。さかん。壮年の男性。しもべ。

〔分郷〕わかれごう

―ブンゴウと読んでしまふような地名である。下総台地北端に位置し、北方を利根川が

東流する。南西部の通称城山は戦国期栗飯原の居城址と伝えられて、また古墳群が残

る。地名は下小堀からの分村によるものか、という。

※難しい地名はないようだ。軽井沢の地名があるのには驚いた。

鴨川市

〔太田学〕おだがく

―房総半島南部、加茂川支流銘川の左岸に位置する。

〔貝渚〕かいすか

―渚をスカと読むのは難しい。房総半島南部、加茂川支流の右岸に位置する。同市には、

横渚（ヨコスカ）の大字地名もある。

〔金東〕こう

―難読地名だ。昔は金塚とも書いたという。加茂川上流の山間部に位置する。

〔主基西〕すきにし

―主をスとは読めない。難しい地名だ。地名辞典にも由来は載っていないかった。

〔滑谷〕ぬめりや

―滑はカツ・コツと読み、なめらか、すべる、ぬかるなど訓にしても使う。由来は分か

らないが、滑がぬかるみの意味もあるので又方に転訛して行ったのではないか。

〔横渚〕よこすか

―渚をスカと読むのは難しい。房総半島南部、待崎川と加茂川に挟まれた海岸付近の平

野に位置する。

木更津市

〔上望田〕かみもうだ

―小櫃川下流右岸に位置する。江戸期から明治の中頃までの村名。

〔請西〕じょうさい

―戦国時代に見える地名。城在または城砦（じょうさい）が転じたものと伝える。

〔蒼生〕そうじょう

―生をゴウと読ませると蒼が難しい。小櫃川下流左岸に位置する。鎌倉期から見える。

「百目木」どうめき

「難しい地名ではないが、抜いてみた。百は、もも、十の十倍。百たび。また、百た
びする。もろもろ。あらゆる。多い。さまざま。難読として、百機(ドウツキ)・
百石(モモイシ)・百千万億(ツモル)・百道(モモジ)・百百(キキ・ドウドウ)
などがあつた。

※大友王子(弘文天皇)の伝承口承が多い。

※特に難しい地名はないようだ、「十余三」があるが、他で類似しているので省く。

多古町

館山市

「巴川上流域に位置する。私は、カナアマリが転訛してカナマリになったのではないか
と思う。

「布良」めら

「布をメと読む人はいないだう。房総半島最南端に位置し、西は太平洋に面する。地名
は海草(布)が繁茂する浦の意の「布浦(メウラ)」が転訛したという説がある。ま
た、紀伊国の目良(メラ)或いは伊豆国の妻良(メラ)の住人地にちなむともいう。
なお、天富命が阿波の忌部を率いて当地に上陸したことによるという伝承もある。
いずれにしてもややこしいばかりだ。

銚子市

※銚子そのものの大字の地名はない。銚子の由来は、利根川の河口が酒器の銚子にちな
むからと言われている。鳥嘴、天不志とも書いたとも。千葉市について県下で二番目
に市政を敷いた。紀国(現・和歌山県)の人々が江戸時代に移り住み、醤油醸造や江
戸への水運を盛んにした。紀国人(きこくじん)移住碑もある。

「愛宕」あたご

「難読でも無いが取りあげる。君津市も大字であつたが、銚子市にもあつたのでここ
取りあげる。ワイプロでもあたごと打ち変換すると愛宕と出でくる。
アタゴの由来は、京都市右京区嵯峨愛宕山の山頂に鎮座する愛宕神社からきている。
全国に愛宕神社は多くあり、銚子市にもある。その本山である。愛宕神社については、
話をすると長くなるのでここでは触れない。なお、君津市の愛宕にも愛宕神社がある。
愛をアと読み、宕をタゴと読ませる語源の説明についての手元の何冊かの漢和辞典に
はなかった。愛はアイだけである。字義として、いつくしむ、いとしむ、め
でる、おしむなどがある。難読として愛媛県があつた。宕はトウと読み、字義は広
い、大きい、気まま、おおまか、石の穴の住居とある。

「黒生町」くろはいち
「生をハイと読むのが余所の人には分からない。町名の由来は伝承もないようだ。

長生村

「水口」みよぐち
「ミズグチと読んでも差し支えない地名。九十九里浜平野南部に位置する。

長南町

「小生田」おぶた
「難読である。生をブと読む。一宮川支流埴生(ハブ)川の中流に位置し、昔、小田郷
があり、小田の転訛とも云われている。

「又富」またどみ
「富をドミとよむ。マタドミでは言いづらいので、自然にマタドミと訛つたのであろう。

東金市

「砂古瀬」いさごぜ
「サコゼではない。砂をイ読み、古をゴと読ませる。地名の由来は分からない。
「求名」ぐみょう
「求をグとなかなか読めない。室町時代からの地名らしいが、由来は分からない。

「丹尾」たんのう
「尾をノウと読む。九十九里浜平野奥部、両総台地東部に位置する。戦国時代の古文書

「大豆谷」まめざく
「大豆をマメと読み谷をザクと読む。地元の人でなければ読めない。九十九里浜平野最
奥部。江戸時代は大豆作と書いた。

東庄町

※トウショウマチでなく、東と庄の間にノとは書いていないが、ノを入れて読む。現在、
井上(イノウエ)という方が多くいるが、ノと読む字が入っていない。イウエさんで
は呼びづらいのそのままだ。今日に至つたのである。

物の本に拠れば、平安時代が終り、やがて戦国時代に突入するが、その頃からノが
なくなつた。例えば織田信長はオダノノブオガとは言わない。ノが取れている。それ
までは、万葉集の歌人山部赤人はヤマベノアカヒト。柿本人麻呂はカキノモトヒトマ
口と言うようにノの字が無くともノを入れて人名としていた。なぜノが取れたのかは、
民俗学者柳田国男に訊いてみれば分かるかも知れない。すでに故人ではあるが、
オオトモでなく、友をドモと読む。一般的には大友と読む地名だが、どうしてトモが
ドモになつたのであろうか。

「青馬」おおま
「由来は調べたが分からなかった。

富里市

「新橋」にっばし
「平安時代から見える地名。利根川支流高崎川上流域に位置する。普通に読めばシンバ

シ。汽笛一声新橋をという歌がある。

長柄町

〔刑部〕おさかべ

「まさか難読地名である。古代『大宝律令』が編まれたが、刑部親王と大友不比等が中心となって編纂された。律は刑法、令は行政法。」

〔国府里〕こうり

「読みづらい地名。古代郡役所のあった場所と推定されている。」

流山市

〔名都借〕なづかり

「名都狩とも書いた。室町時代から見える地名。一帯は中世城郭の跡である。流山の地名の起りであるが、平地に流山という小さな山がある。山と言えど、山と云うのは、いずれにしても木々に覆われ、お椀を伏せたような形をしている。その山に赤城神社がある。この赤城が群馬県にある赤城山と親戚でむかし群馬の赤城から流れ着いたので流山となったという。そして赤城神社を造営したという。由来と謂うものは、誰がいつ言い出したのか分からないが、不思議なことである。」

習志野市

※特に難しい地名はないようだ。

※習志野は海老川支流前原川の上流域に位置する。地名は明治六年大和田原で行なわれた近衛兵の演習に行幸した明治天皇が命名したことによる。成田市

成田市

〔飯岡〕いのおか

「イイオカと通常読んでしまいがち。旭市に飯岡（イイオカ）という大字の地名があるからだ。成田市では飯岡を（イノオカ）と読む。面白いことだ。」

〔臼作〕うすくり

「作（サク）をクリと読ませる。「ウスツクリ」ともいい、臼栗とも書いたという。利根川支流大須賀川上流左岸埜丘縁辺に位置する。」

※ここでは作をクリと読ませているが、美作という市がある。遠い他県の地名であるが、美をミマと読み、作をサカと読ませる。岡山県の中央部山間部に所在する市である。人名であるが、吉岡と書いてヨシオカと一般的には読む。昔、喜知岡と書いたと古文書にあるという。

〔吉岡〕きちおか

〔取香〕とっこう

「根本名川支流取香川上流に位置する。地名の由来は、古代東国の蝦夷を捕えてトリコ（俘囚の意）として収容した地であるからとも、鳥飼部が居住した地であることによるともいう。」

〔冬父〕とぶ

「下総台地北部の丘陵地に位置する。地名の由来或いは伝承もない。」

〔堀籠〕ほうめ

「利根川支流大須賀川中流右岸に位置する。地名の由来については分からない。」

野田市

〔次木〕なみき

「江戸川左岸に位置する。当地は日光東往還沿いにあり、地名は同往還にあった松並木に由来するという。」

富津市

〔不入斗〕いりやまず

「市原市でも難読地名として、取り上げた。県内には同様の地名が多々ある。岩井川河口左岸に位置する。地名は、神田で、貢税免除の地であったことに由来する。」

〔小志駒〕こじこま

「志（シ）をジと読ませる。昭和46年から富津市の大字となる。志を名前として、さね・し・じ・ふみ・むね・もと・もとむ・ゆき・よしと付けたという。ここにジがあるから面白い。」

船橋市

〔飯山満町〕はざまちよう

「難読地名そのものである。とても読める地名ではない。地名大辞典でも一切触れていない。船橋市役所担当課へ問い合わせをする。曰く、飯山満地区一帯は起伏に富んでおり、稲の収穫ができるような状態になかった。そこで稲作農家は少しでも平らにして稲作が出来るようにがんばった。そのあかつきには、米が満々と採れ、山のように食える時が来ることを信じ、狭間から飯山満に地名を変えたという。これも由来としては伝承の限りだが面白い。」

松戸市

〔幸田〕こうで

「田をデと読ませる。サッタと読んでしまいがちだ。」

〔新作〕しんざく

「作が濁る。難しい地名に入るだろう。ケをコと読ませ、月をゼと読ませる。難読である。「みかつき」・「みこつき」ともいう。下総台地西端部、江戸川左岸低地に位置する。千葉氏の紋所が地名になったと言われる。「本土寺過去帳」には「ミコツキ」と見えるという。」

〔三ヶ月〕みこぜ

「主水新田」もんとしんでん「主水をモントと読むのが難儀だ。江戸川左岸氾濫原低地に位置する。地名は、新田開発者の名前によるという。主水司（もんだのつかさ）と古事記に載っ

ているので、モンと読むのはそんなに難しくないのである。

南房総市

〔検儀谷〕けぎや

※当地は、千倉なになにという地名が17もある。また、富浦なになにという地名が12もある。更に和田町なになにと言う地名が19もある。何故こうなったのだろうか。市なる条件として、住民が元々の地名を残してくれと陳情したのだろう。特に難読地名と言うことはないかも知れない。由来は分からない。町の様子もあまり分からない。鋸南町に接している。

睦沢町

※特に難しい地名はないようだ。町は16の大字名で構成されている。

茂原市

〔国府関〕こうせき 一宮川支流の豊田川上流部、小丘陵地に位置する。地名の由来は、国府の置かれた所

との説もあるが、西接する国府里(コウリ)とともに国府との関係は詳やらかでなく、現在のところ遺跡・遺物の存在も認められていない。

〔道表〕どうびょう 表をビョウと読む。ドウヒョウと読みたところ。由来は分からない。地名の由来は、日

武尊が東征の途次に当地に来て路傍の清泉を掬飲し、「これ天の真井なり」と言ったことにちなむと伝えられている。ゴルフ場で真名カントリークラブがある。

〔鷺巣〕わしのす 一宮川中流右岸の平坦地に位置する。南北朝に見える地名。

八街市

〔文達〕ひじかい 高崎川上流の支谷西側の台地に位置する。地名は、天正11年小間子吉田の原の戦いに敗れた椎崎城主椎崎三郎が再起を計るべく先発隊を飯櫃(イビツ)村に派遣したが、その先発が間違えて飯櫃村に向かい、当地で誤りに気づき道を踏みまちがえた」という意味で「ふみちがえ」と抄し、その後転訛して「ヒジカイ」になったという。

〔八街い〕やちまたい 当市では八街そのものの大字の地名はない。八街のあとに、い・ろ・は・に・ほと付く地名がある。これは開墾当時の順番である。八街(ヤチマタ)が少々難しい。漢和辞典で街を見るとガイ・カイとあり、また、まちとある。字義には、まち・ちまた・まちなか(市街)・よつまた・十字路とある。したがって街をチマタと読むのは漢和辞典通りである。下総台地南部に位置する。明治2年から東京府下の下

級武士など多くの失業者の窮民対策として新政府は豪商に開墾会社を設立させ、広大な旧下総牧(小金牧・佐倉牧)の開墾を進めた。地名はその8番目に開墾されたことに由来する。落花生の産地として一躍有名になる。

八千代市

※八千代市は昭和三十年全国初の住宅団地が誕生。全国における団地建設の先駆けとなる。や千代台京成駅西口前に「住宅団地発祥の地」の碑がある。

〔神久保〕いものくぼ 難しい地名である。よくよく考えても読めない。古くは芋窪・神窪・伊毛窪と書いたようだ。印旛放水路(新川)右岸の丘陵地上に位置する。地名の由来は分からない。

〔桑納〕かんのう

一印旛放水路(新川)右岸に位置する。地名大辞典に載っているのはこれだけである。

横芝光町

〔上原〕かんばら

一ウエハラと読んでも何ら差し支えない。九十九里浜北部の海岸平野に位置する。東部に位置する原方が古来原を称していたことに対し上原を称するようになったという。なぜ上をカンと読ませるについては分からない。

〔小田部〕こたべ 難読として取り上げるのではなく、市原市は「オダッペ」という地名。同じ小田部と書いてもこのように読み方に違いがある。

〔鳥喰上〕とりはみかみ 喰は漢読みでサンと読み、食う、食べる、食らう、食むの意。地名の起こりは分からない。鳥喰下・鳥喰新田の地名もある。

〔傍示戸〕ほうじど 難読ではないかも知れないが、何と読むのかな、少し考えてしまう。傍は通常ボウと読む。この地名ではホウと読む。栗山川左岸に位置する。地名は上総・下総両

〔虫生〕むしょう 国の境界を示す傍示のあったことにちなむという。幾つかの城跡も残る。

四街道市

※特に難しい大字の地名はないようだ。四街道の地名の起こりは、大字四街道が鹿島川中流左岸に位置し、旧道交差点を四街道と俗称したことによる。昭和56年近隣の町村と合併し、四街道市となった。要は四つ地から発展したのである。

・飯香岡八幡宮の幡はマンと読む。辞書に慣習の読み方とある。慣習を更に辞書で調べると「慣れること。習慣となること。ある社会一般に行なわれていく習わし。ある一定の社会内部で、歴史的に成立、発達し、定着してきた常習的、伝統的な行動様式。しきたり。ならわし。……とある。」「手前をデメエと言うときがある。これを転訛という。語の本来の音がなまって変わることに。また、その語。」

最後に付け加える。最後の寄り道である。

市原市八幡の幡であるが、漢和辞典でわたを引いても出てこない。出雲国の神話に因幡の白兔がある。有名な神話である。おそらく知らない人はいないであろう。ここでは幡をバと読む。なぜバと読むのかから

ない。

やはり市原市のところで大厩をオオマイとして読み方を記した。この厩であるが津軽半島の先端は竜飛岬。竜飛岬のある所は三厩村である。三厩はミンマヤと読む。「津軽海峡冬景色」の流行歌でたちまち全国に地名の御当地ソングとして一躍有名にした。「津軽海峡冬景色」の石碑も建ち、歌詞も刻まれているようだ。私の短歌の先生の歌碑へ陸果つる海の光に草山は黄すげの花のかがやくあわれもあるが、訪ねる人もなく草ぼうぼうの話が届く。津軽半島は太宰治の生まれた土地。やはり小説家の葛西善蔵、「青い山脈」を書いた石坂洋次郎、横綱第五十九代隆の里、第六十三代旭富士、現在大相撲の解説をしている前の海も津軽鯨鮓ヶ沢の出身である。縄文時代からの歴史も豊富である。津軽について寄り道どころか少々書きすぎた。

「八幡史学館」第18シリーズ(第5回)

市原の富士講の歴史と民俗

鎌ヶ谷市郷土資料館

学芸員(再任用): 立野晃

1 講について

(1) 講とは

① 講会

② 近世～近代は民衆による講の時代

③ 現代化の中で消滅した講

経済更生運動／太平洋戦争前後／高度経済成長期／昭和末～平成初年

(2) 講の分類

① ムラの講…信仰対象がムラ(大字)内にあり、定期的に集まりを持つ。年齢階梯別・性別に集団を作っていることが多い。

→天神講、子安講、念仏講、題目講、庚申講、観音講、地藏講など

② 参拝の講…ムラ外にある著名な霊山・寺社などを参拝することを主目的として結成

○代参講: 籤や持ち回りで選ばれた少人数の者が1か所の遠隔地の霊地を参拝

○巡拝講: 多人数が比較的近隣の複数の霊地を参拝

・八十八か所札所巡拝(大師講)

・観音霊場三十三か所巡拝(西国・坂東・秩父など)

③ その他(職人の人たちの講、経済的な目的で結成された講)

太子講、無尽講(頼母子講)など

(3) 房総地方の代参講

出羽三山講(奥州講・八日講など)、富士講、大山講、三峰講、御岳講、武州(武蔵)御獄講、古峰講、板倉講、雷神講(金村講)、大杉講、身延講、戸隠講、榛名講、香取講、鹿島講、成田講、山倉講、手児奈講、鹿野山講、善光寺講、秋葉講、伊勢講、高野山講、金比羅講など

2 様々な富士信仰



写真1 鋸南町から見た富士山



写真2 鎌ヶ谷市から見た富士山

(1) 原初的な信仰

富士山自体を神もしくは富士山に神が鎮座しているという観念

→主として東京湾岸など富士山の見える地域

・伝説 ex 中の瀬のほら貝と印旛沼の主の争い(木更津市域) [資料1]

・俗信: あてや観天望気 [資料2]

(2) 浅間神社(近世には「仙元大菩薩」と表記されることが多い)の信仰

①本来は、富士山麓地方での祀られている里宮

・静岡県富士宮市・静岡市・裾野市、山梨県富士吉田市・河口湖町などに著名

な浅間神社が現存

・祭神は「木花咲邪姫命」(『古事記』)

・全国へ勧請(中心は現在の関東・東海地方)

②房総の浅間神社の分布

・全国で最も神社数が多い

(『浅間神社の歴史』[昭和3年(1928)発行]によると、全国1,327社(官幣大社

～境内社)中257社が千葉県に所在(都道府県別では第1位)

・県内では満遍なく(下総・上総・安房)分布

・勧請年がわかるものの多くが16世紀後半～17世紀後半の100年間

・立地: 台地上の見晴らしのよい小高い場所

cf 「センゲン」の小字地名は下総・上総に分布

・安産・子育ての神としての信仰

・センゲンマイリの民俗

※千葉市稲毛区稲毛所在の浅間神社への参拝するセンゲンサマの民俗(資料3)

※6月～7月の特定日に、両親もしくは祖父母に連れられた0～7歳の子どもが、地区内もしくは近隣の浅間神社へ参拝(資料4)

(3) 富士講→後述

(4) 富士講を母体として成立した教派神道(近代以降)

→丸山教・扶桑教(実野半によって明治6年創立: 富士講を糾合)・実行教など

3 富士講の展開—近世江戸での隆盛と近郊への伝播—

(1) 近世初期の行者角行(1541?～1646?)

・富士山で修行、加持祈祷を中心に活動

・後に「富士講の開祖」とされる

・死後、信奉する人たちによって組織化(村上派・身禄派など)

(2) 講の実質的創始者: 食行身禄

・寛文11年(1671)～享保18年(1733)

・伊勢国一志郡川上村(現三重県津市)の出身(本名: 伊藤与兵衛)

・江戸に出て、商売のかたわら、強い富士信仰を持つようになる

・富士山北口七合目五勺の烏帽子岩で入定

② 江戸での発展

・身禄の弟子たちによる精力的な布教

・「江戸八百八講」

・「八百八講曼荼羅」(天保13年(1842))…府内: 93講、府外: 15講

・「身禄同行」(弟子の高田文四郎)

③ 富士登山と富士塚

・夏期に富士山へ登山(複数の登山口)

※吉田口(現山梨県富士吉田市)が隆盛

・御師(宿坊を経営)と講員たちの師檀関係

・ミニチュア富士山を江戸各地に造立=富士塚「○○富士」

※安永8年(1779)に築かれた高田富士(『江戸名所図会』に掲載)が嚆矢

→都内のものは多くが失われたが、残されたものの中で近年国の重要有形民俗文化財や都・区の有形民俗文化財などに指定されるものあり(文献⑩では、
国: 3件、都: 1件、区: 35件)

※様々な呼称

富士(不二・藤)塚/浅間塚・浅間
(仙元)様・浅間山・浅間神社



写真3 長崎の富士塚(豊島区高松富士浅間神社、文久2年(1862)築造)[国重要有形民俗文化財]

〔参考〕

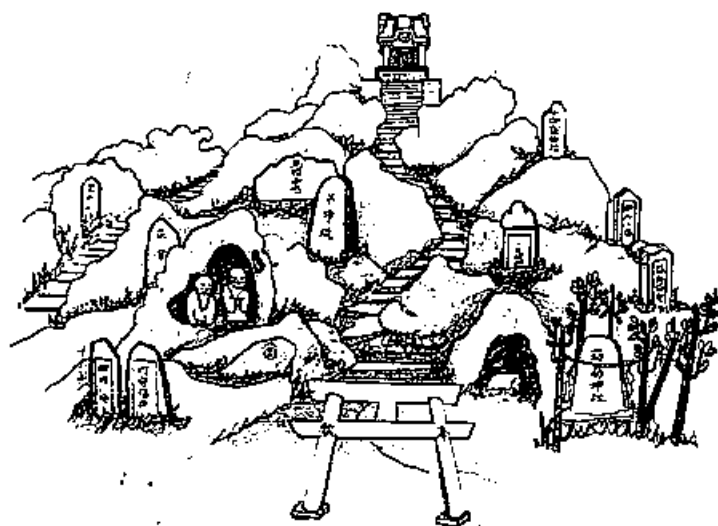


図1 船橋市飯山満町大宮神社境内の富士塚 (船橋市史資料(一)『船橋市の石造文化財』〔昭和59年〕)

④ 信仰の内容

- ・組織：講元と先達^{こうもと せんだち}が中心
- ・七富士巡りと法会^{ほうえ}
- ・加持祈禱^{かじきとう}を重視
- ・異形の出で立ち^{ぎようい ほうかん}：行衣・宝冠

⑤ 元講と枝講

⑥ 講印 (講紋・笠印)

- ・山吉、山万、山三、山水、山包^{やまよし やまん やまん やまみず やまづつみ}…
- ・丸参、丸藤、丸鳩、丸宝、丸瀧^{まるさん まるふじ まるはと まるたから まるたき}…

⑦ 江戸幕府の禁令と弾圧：身分を超えた結束と広域の結合

- ・安永4年(1775)、寛政7年(1795)、同9年(1797)、享和2年(1802)、文化2年(1805)、同11年(1814)、文政6年(1823)、天保13年(1843)※3回、嘉永2年(1849) 史料1

⑧ 不二道^{ふじどう}孝^{こう}心^{しん}講^{こう}

- ・武蔵国鳩ヶ谷宿^{むさし} (現埼玉県川口市)の^{こたに}小谷三志^{おに}の一派
- ・河川の修復や道普請^{ふしん}などの土木工事を無償奉仕 (土持ち)
- ・幕末から明治初年にかけて、利根川流域の武蔵・常陸・下総で隆盛

4 房総の富士講

(1) 様々な資料 (史料)

① 歴史資料

○古文書

〈講共有、先達宅など〉

道中記、講行事記録、先達問や宿坊とのやりとりを記した書簡など

〈宿坊〉

宿帳、配札の記録など

○經典 「お伝え」「お免しの巻」「一字不説の巻」など身祿の教えを記載

※授与の系譜

○掛け軸 (ヒョウゴ) 御三幅 (御身拔) 木花咲邪姫命像「小御嶽」

② 富士塚 考古学的手法による調査

③ 石造物

○主神名 「浅間^{せんげん} (仙元) 大菩薩^{ぼさつ こんげん} (権現)」 「浅間大神 (神社)」 「木花咲邪姫命」

○主神以外の神名・山名・神社名など

「小御嶽^{こうみだけ} (岳)」 「宝永山^{ほうえいざん}」 「石尊大権現^{せきそん}」 「阿夫利神社^{あふり}」 「磐長姫命^{いわながひめのみこと}」

「角行」「食行 (身祿)」

○登山成就記念碑 講中登山記念碑、先達多登山回数顕彰碑

○先達業績顕彰碑

○浅間神社 (富士塚) 改修・移動記念碑

○石造奉納物 鳥居、常夜灯、狛犬、手水石、奉納物名記載碑

○墓塔

○その他

④ 聞き書き

○民俗

○オーラルヒストリー (先達)

⑤ モノ資料 祭具、拝み^{だんす}筆^{ぎようい}、マネキ、行衣、錫杖、笠、登山絵馬など

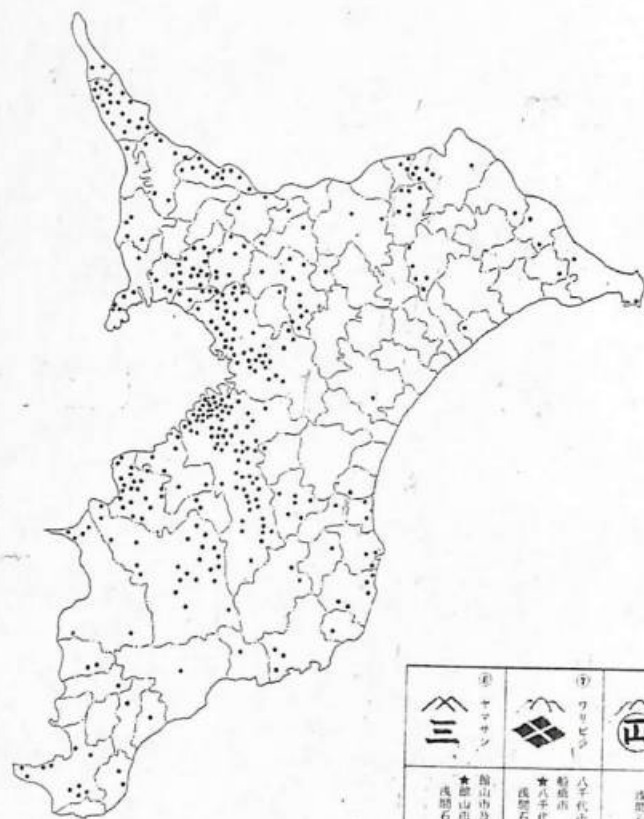
(2) 確認されている富士塚の数 157基 全国第2位

埼玉 (312)、千葉 (157)、東京 (114) [文献⑩では70基]、神奈川 (62)、群馬 (60)、長野 (58)、茨城 (41)、栃木 (28)、山梨 (22)、静岡 (7) (文献⑪)

(3) 最初の伝播

・天明・寛政期 (18世紀末期) に江戸から上総国市原郡海岸部へ [後述]

(4) 全域への展開と分布状況



- ・江戸湾（東京湾）岸・江戸川流域から各地へ
- ・時期は19世紀後半（江戸時代末～明治初年）？
→各地で富士塚の造営
- ・山水・山真・山包・一山などが優勢

図2 千葉県の富士講の分布（文献④）

千葉県下 富士講一覽表									
三	山	西	玉	真	包	水	山	真	八
★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市	★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市	★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市	★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市	★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市	★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市	★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市	★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市	★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市	★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市
の	あ	一	山	真	包	水	山	真	八
★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市	★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市	★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市	★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市	★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市	★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市	★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市	★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市	★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市	★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市
日	蘇	山	真	包	水	山	真	八	山
★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市	★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市	★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市	★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市	★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市	★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市	★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市	★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市	★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市	★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市 ★山形市・山形市

図3 千葉県に存在した富士講の講紋（文献④）

5 市原地域の富士講の歴史

(1) 近世

①内湾地方への伝来

○青柳村 史料2および伝承

※天明6年（1786）7月18日、当地へ来

訪し、富士講（一山講）を広めた江戸青柳村（現東京都港区）の渡辺三右衛門（行名「日（一）行八我」）が死去（戒名「真乗覚峰信士」）。2年後に、一山講中と先達三郎左衛門が願主となり、この墓塔を造立。

→千葉県最古の富士講石造物



○五井村 史料3

※五井村のうち、上宿・下宿・新田

の3地区の富士講は、寛政年間（1789～1801）に養老川沿いの吹上に清地を設

け、そこに毎年4月江戸橋（現東京都中央区）の人で、山包講の講祖（修山）禪行（本名は包市郎兵衛：麻布（現東京都港区）の蠟燭商）が来てこれを祭祀（史料4にも名が見える）

写真3 日行八我の墓塔（天明8年（1788））

②市原地域に展開した主な講



③近世の活動の一端を示す史料

○山水講と山真講 史料4

千葉郡寒川村（現千葉市中央区）の山真講（現山真十・三夜講）が山包講より分立

○村をこえた講の結合 史料5～7

※江戸麻布広尾の山真講先達三浦文次郎と五井村および近郊の村々（君塚・八幡・出津・岩崎・玉前）の先達とのやりとり（嘉永2（1849）～5年）

・芝愛宕山（現東京都港区愛宕神社）開帳供米への合力

・御身拔・御免しの授与

・山包講の講祖市郎兵衛（修山禪行）五十年忌

(2) 近・現代

①市域の展開状況 ※別表1も参照

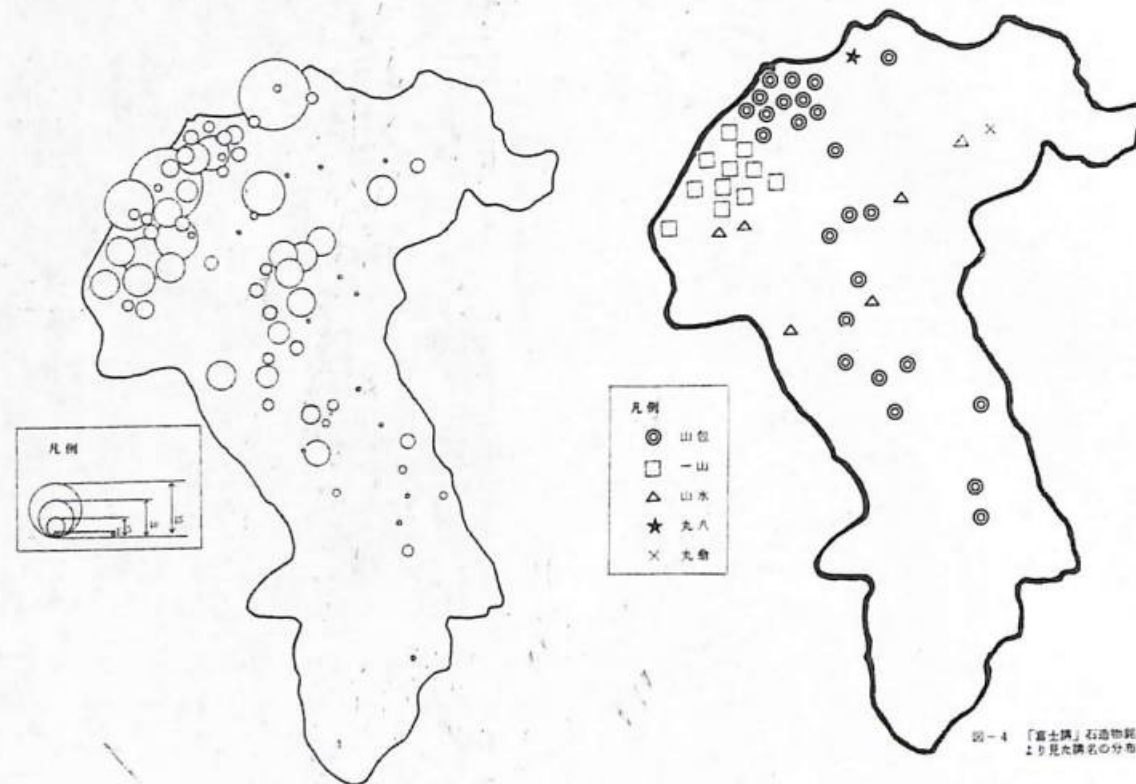


図4 市域の富士講石造物の分布

図5 市域の富士講各講の分布

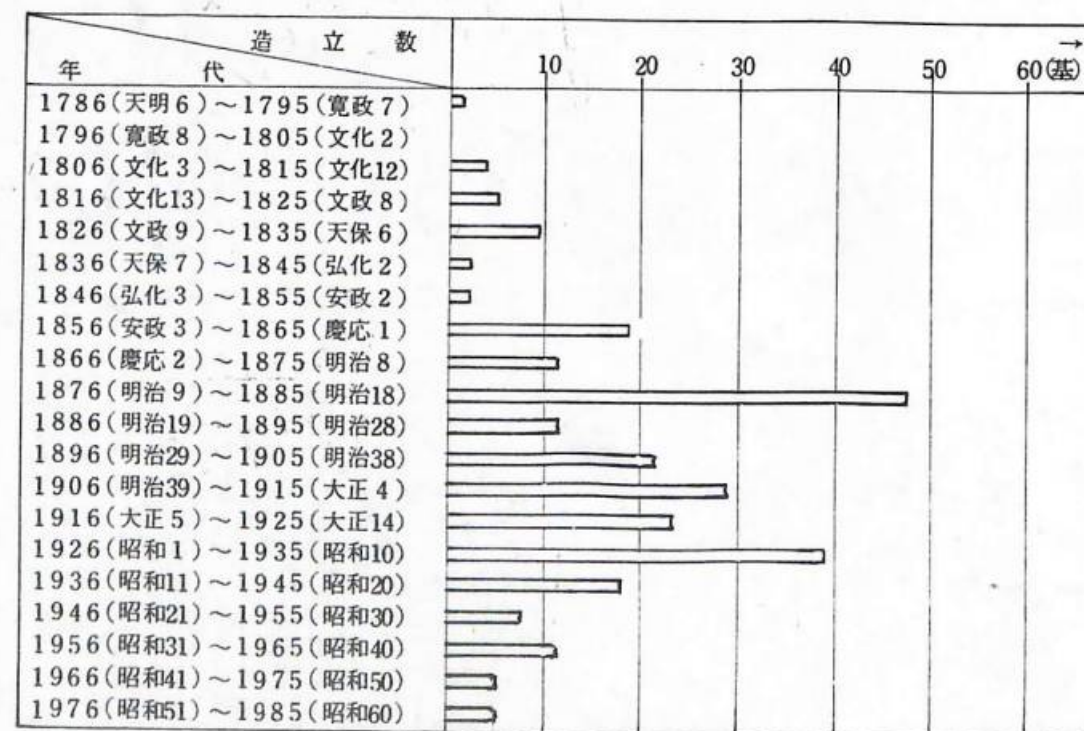


図6 市域の富士講石造物の年代別造立数の変遷

※図4～6 ばいずれも文献④

②講の創始

- 吉沢(史料8) 明治11年(1878)
- 藪・岩(史料9) 明治14年(1881) ※ともに扶桑教配下

③富士塚の建設

- 海保(史料11) 明治9年(1876)
- ※〈参考〉有吉(現木更津市) 明治3年(1870) 史料10



写真4 大宮神社(五井)境内の富士塚

写真5 稲荷神社(君塚)境内の富士塚

※市原市内の富士塚は合計57基確認。市町村単位では全国第1位(第2位は横浜市の29基)

④富士講石造物の造立

昭和60年(1985)時の調査では、市域全体で377基を確認(文献④) ※県内第1位

⑤先達の活動

- 山水講先達の豊行関我(片又木の齊藤喜六) 史料12
 - ・幕末期より活動し、明治12年(1879)に33度の登山の大願成就
 - ・富士吉田では「上総の先達」として著名
 - ・地元の鎮守境内の富士塚および富士吉田の浅間神社(文献⑦)と富士山の馬返しに講社の人たちが石碑を造立
- 一山講先達の慎行篤我(海保の間野源一郎) 史料13
 - ・40年間にわたって富士山を「崇信」
 - ・明治13年(1880)、地元講社が鎮守境内の富士塚に先導碑を造立
- 一山講先達の順行柔我(今津朝山の岡田紋太郎) 資料5
 - ・大正7年(1918)に33度めの登山→地内の富士塚に「大願成就碑」を造立
 - ・キツネ落としの祈禱、井戸の方角の占いなど
 - ・「岡田家旧蔵文書」中の『一字不説の巻』中に「痲瘡落とし」の文句、『富士浅間神社拝祝詞』の中に「病者加持身かため大事」「方位砂時神事之次第」

⑥講の結合：明治15年(1882)の食行身禄150年忌

○五井・出津・玉前の先達より山包・山真両講への寄附依頼 史料14

○扶桑教会の前に造立された記念碑→この時点で山包講・山真講が分布する地域

東京 江戸橋／人形町（以上現中央区）／浅草（現台東区）／
下五兵衛新田（現足立区）／東字喜田村（現江戸川区）
上総 市原郡／夷隅郡／望陀郡／周淮郡／武射郡
下総 香取郡／匝瑳郡／海上郡／印旛郡
常陸 行方郡／鹿島郡

⑥房総から富士山への道

○明治2年（1869）の上総国市原郡五井村の事例〔同行3人〕

五井（6／19）—船橋—行徳—扇橋（現東京都江東区）—新宿—府中—
八王子—駒木野（現八王子市）—高尾山—鶴川（現山梨県上野原市）—野田尻
（現同市）—谷村（現都留市）—吉田（御師：外川坊）—駒返し—八合目—頂上
—外川坊—竹之下（現静岡県小山町）—関本（現神奈川県南足柄市）—子安
（現伊勢原市）—藤沢—川崎—逆井（現東京都江戸川区）—市川—馬加
（幕張）（現千葉市）—五井（6／29） ※大山や江ノ島に寄る事例もあり

⑦房総を檀那場とした吉田（現山梨県富士吉田市）の御師 ※配札の史料

- ・小猿屋（刑部家：安房国）
- ・堀端屋（小佐野家：上総国、下総国千葉郡・葛飾郡）
- ・菊谷（秋山家：下総国葛飾郡）
- ・外川坊（外川家）、大国屋（田辺家）〔ともに上総国市原郡〕 など

6 市原市域の富士講の民俗

①八幡（観音町） 資料6

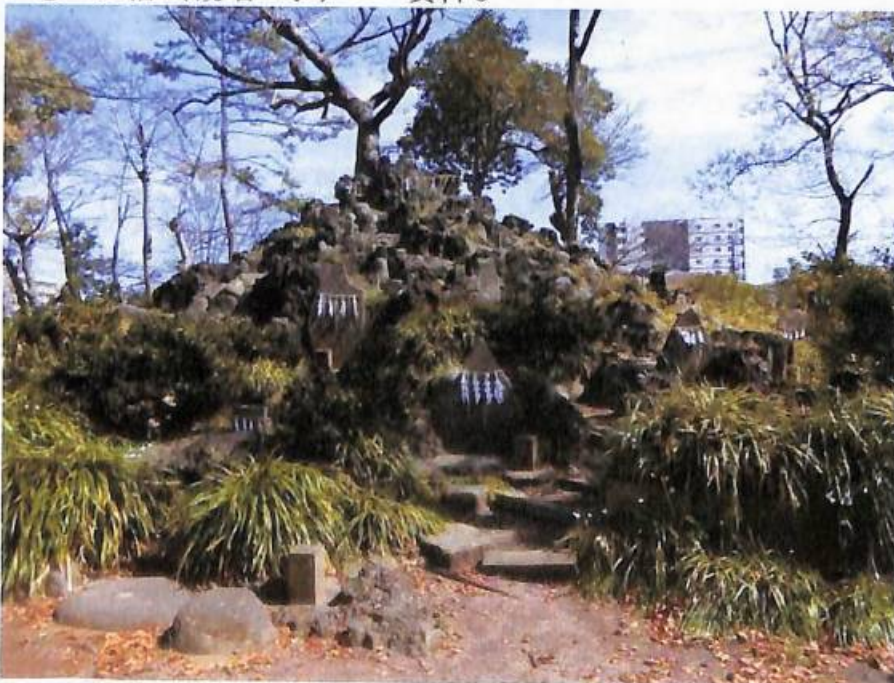


写真6 八幡の富士塚

※大きさは、径約15.0
m、高さ約3.5m。
→県内最大級

〔参考〕

千葉県では県指定文化財の富士塚は現状なし。市町村では、流山市と習志野市で有形民俗文化財の富士塚あり

②青柳（青柳台） 資料7

③松ヶ島 資料8

④海保（中谷） 資料9

〈参考文献〉

- ①井野邊茂雄氏『富士の信仰』（古今書院、昭和3年）
- ②岩科小一郎氏『富士講の歴史』（名著出版、昭和58年）
- ③沖本博氏「富士講紋について—房総の富士講調査報告 その1—」（房総石造文化研究会『房総の石仏』第4号、昭和61年）
- ④立野「市原市内の富士信仰石造物」（市原市教育委員会『市原地方史研究』第14号、昭和61年）
- ⑤立野「千葉県下のセンゲンマイリ」（西郊民俗談話会『西郊民俗』第118号、昭和62年）
- ⑥沖本博氏「富士塚—房総の富士講調査報告 その1—」（『房総の石仏』第6号）、昭和63年
- ⑦沖本博氏「富士山周辺の石造物について—房総の富士講調査報告 その3—」（『房総の石仏』第7号、平成元年）
- ⑧沖本博氏「山包講と「禅行」を追って—房総の富士講調査報告 その4—」（『房総の石仏』第8号、平成2年）
- ⑨立野「市原市北部地域の富士講の民俗」（国書刊行会『房総地域史の諸問題』、平成3年）
- ⑩『富士をめざした安房の人たち』（館山市立博物館、平成7年）
- ⑪富士市立博物館調査報告書『富士見十三州富士塚調査報告書～富士山信仰と富士塚～』（富士市立博物館、平成8年）
- ⑫青柳至彦氏・時田克男氏「市原の山包講」（『富士山信仰研究』第2号、平成13年）
- ⑬『山野浅間神社富士講の歴史』（山野浅間神社富士講、平成15年）
- ⑭『千葉県の歴史』資料編 近世1（房総全域）（千葉県、平成18年）
- ⑮『あしなかな』第279号—富士塚小特集—（山村民俗の会、平成19年）
- ⑯『もっと江東のお富士山を楽しむためのガイドブック』（江東区船番所資料館、平成25年）
- ⑰立野「房総における富士講の歴史」（歴史教育者協議会『歴史地理教育』No.957—山・川・海に学ぶ歴史とくらし—、令和5年）
- ⑱『富士信仰研究』第1号～第5号（富士信仰研究会、平成12～16年）『富士山文化研究』第6号～第11号（富士山文化研究会、平成17～25年）

【聞き書き資料編】

資料1 「中の瀬の法螺貝と印旛沼の主の争い」の伝説

昔、(東京湾の)中の瀬に住んでいた山のように大きな法螺貝が、常陸の霞ヶ浦の先にあるという竜宮を見物しようと出かけた。途中印旛沼の主である八千巻大蛇が邪魔をしたので、七日七晩の大喧嘩の末、ついに法螺貝は大蛇を相模まで投げ飛ばしたが、その時にできたのが猿島(現神奈川県横須賀市)である。法螺貝はさらに進んで霞ヶ浦に到達し、ここで鹿島の要石と争ったが、これにはどうしても勝てず、とうとう竜宮行きをあきらめて中の瀬に引き返した。法螺貝が帰ると、猿島は伊豆大島の三原山と組んで、敵討ちの戦いを挑んだ。天地鳴動の激戦となり皆が迷惑したので、筑波山と鹿野山が調停したが聞き入れられなかった。仕方なく仲裁を富士山に頼んだ。柔和な富士山は一言も口を開かなかったが、ふと自分が吐いていた火煙を止めた。法螺貝と三原山は、富士山の威厳と沈黙に威圧され争いを止めた。

資料2 富士山をめぐる観天望気の民俗事例

- ・夕方、富士山に雲が流れると南風が吹く(現市原市八幡)
- ・夕方、富士山の頂上に雲があると、三日のうちに雨が降る(現富津市富津)
- ・夕方虹が出ると翌日は晴れ。虹が富士山をまたぐと雨が続く(現市原市今津朝山)
- ・南風が大きくなる時は、笠雲が一段、二段、三段と出る。特に富士山の左側に出ると大風になるという(現船橋市船橋)

資料3 センゲンサマ(千葉市稲毛区稲毛町浅間神社)

稲毛の浅間神社は、社伝によると、大同3年(808)の勧請という古社である。毎年7月14日の宵祭と翌15日の本祭には近郷近在から多くの参拝者がある。当社は、安産・子育ての神として著名であり、この日は1歳から7歳までの子どもが親に連れられて多数お参りする。神社では、参拝した子どもに対して、「子育ての笹のお守り」を授与する。地元である千葉市のほか、市原・四街道・船橋・八千代・佐倉・印西の各市など広範囲からの参拝が確認できる。(文献⑤)

資料4 ハツヤマ(野田市関宿台町)

野田市関宿台町下納谷の浅間神社では、毎年7月1日に幟が立てられ、この日をハツヤマ(初山)という。旧関宿地区では、前年の初山以降に生まれた赤ん坊が親に連れられて参拝する。お参りすると、神職に祈禱してもらったあと、社殿に詰めていた神社の役員が子どもの額に判を押してもらい、さらにお守りと御札が授与される。また、この日の土産として、ネギと団扇を求める。ネギは自分の家用で、子どもがまっすぐ育つようにとの意味であるという。また、団扇は近所の家へ配る。(野田市史民俗調査報告書10『二川・関宿地区の民俗』(平成29年))

資料5 一山講先達順行柔我についての伝承

順行柔我は、弘化3年(1847)上総国市原郡今津朝山村(現市原市)の生まれで本名を岡田紋太郎といった。昭和8年(1933)に86歳で亡くなっている。

子どもころは病気がちであったが、富士山を信仰するようになってから体が丈夫になり、富士講にも加わり、何度も富士登拝をするようになったという。大正7年(1918)には三十三度登山の「大願成就」を果たし、今津朝山の浅間神社境内の富士塚にその記念碑を建立した。

当時の順行は、右に出る者がいないと言われたほどの信心深い先達で、近在の人たちの求めに応じて、様々な祈禱を行った。特に、キツネ落としに霊験があったと伝えられている。かつて

当地では、ウロウロと歩き回ったり、おかしなことを口走ったりする人がいると、「キツネが憑いた」といわれた。順行がある時キツネを落とすことを依頼されたが、強く憑いていたためか、二度、三度と祈禱をしても落とすことができず、四回目の祈禱をした。すると、キツネが憑いて臥っていた人が突然起き上がり外へ出ていこうとするので、驚いて追いかけると、その人は家のトボグチで敷居をまたいだ瞬間そこに倒れてしまい、ようやくキツネが落ち、正気に戻ったという。また、近所の人が井戸を掘る前に良い方角を相談にくることがあり、順行に占ってもらいその指示通りに掘ると必ずいい水が出たという。

資料6 市原市八幡（観音町）の富士講

観音町は南隣の浜本町とともに、近年まで富士講が行われていた。地元出身者でなくても、また、第2次世界大戦後は女性でも富士山へ登拝でき、講へも加入できた。飯香岡八幡宮境内に大字八幡の富士講が共同で祭祀する浅間神社（富士塚）がある。

観音町の講や役員には、先達と副先達が1人ずついる。講員の中でも特に信仰の篤い人がこの役に就くことが多いという。同一の家系から二人、三人と継続して先達になっている例もある。観音町の講社は弘化2年（1845）に創始されたという。当初は「山水講」であったが、途中から「山の講」に変わったと伝わっている。なお、先達は、昭和60年（1985）までの間に27代を数える。先達・副先達とも任期は特に定められていないが、役の勤めが無理と自己判断すると、自発的に後進へ道を譲って勇退する。先達や副先達になれるのは、観音町の出身者に限られている。

富士登山を終えた人はツキナミに参加することができる。ツキナミは、毎月中旬以降の適当な日に、講員の中で都合のつく人が、観音町青年会館に集まって行われる。以前は講員の家をヤドとして、持ち回りで行っていた。集まるのは毎回男女合わせて30人くらいで、40～50歳代の人もあるが大半は70歳くらいの人であるという。なお、この時には、原則として行衣を着て参加する。

昭和60年（1985）10月19日のツキナミは次のように行われた。午後1時ころより講員が集まり始め（この日は最終的に男性9人・女性8人の合計17人）、1時30分過ぎに行事が開始された。事前に設けておいた祭壇（3本のヒョウゴ〔御三幅（御身拔・木花咲邪姫命の御影・小御嶽の掛け軸）をオハコから出して壁にかけ、拝みの道具を組み立てて、神を供えたもの）の前に、先達を中心にして講員全員が座る。そして、まず、先達がお祓いと切り火・神下ろしを行い、その後全員で柏手を打ち、オツタエを読み上げる。約20分後、オタキアゲが始まる。すると、全員が各自手にしていた折り本の経本を順々にこの火であぶり、体の各部位をそれで撫でる。これらが終了すると、先達が神送りをして、オツトメは終わりとなる。その後は全員で共食となる。ツキナミによする費用はすべて実費である。なお、富士講のツキナミに参加している人のほとんど全員が出羽三山講にも参加しているという。

〔浜本町の富士講先達で出羽三山講の中先達をつとめた人の墓石がある〕

この他、毎年旧暦6月1日には、浜本町の講社で合同で「山開き」の行事を行う。富士塚の前に行衣を着た講員が集まり、拝みをあげる。

（文献⑨）

なお、観音町の富士講は、近年活動を停止したという。

また、八幡地内には、富士塚上および周辺に合計28基（明治17年（1884）～平成20年（2008））、浜本町の金刀比羅大神・富士浅間大神敷地に4基（明治15年（1882）～平成5年（1993））の関係石造物が現存している。

『市原市八幡の石造物研究』（八幡の積層物研究会、平成24年）

資料7 市原市青柳（青柳台）の富士講

青柳台は、大字青柳の中央部に位置し、その北端に浅間神社がある。境内の西側に富士塚が造立されている。建設の年代は不詳であるが、「昔、神社の南側にあった松の木の生えていた塚の砂を使い、ムラ総出で作った」と伝わっている。塚上と周辺には合計21基の石造物が残されている。なお、青柳台には、「昔、日行八我がご神体とお巻物を持ってこの村（青柳村）へやってきて信仰を広めた」という伝承がある。



写真 青柳の浅間神社と富士塚

青柳台では、昔からほぼ全戸が富士講に加入していた。講社の家には、1か月ごとに順送りで行きまわりのゴサンブク（御三幅）が回ってくる。青柳台の旧来からの家は約120軒あるので、およそ10年に1回程度回ってくることになる。

講の諸行事を実際に行うのは、何回も富士山に登山して、かつ信仰心の篤い「行者」とよばれる人たちである（昭和60年（1985）現在8名）。行者になるような人は、先祖にも富士山を強く信仰していた人がいる場合が多いという。この行者の中の最年長者が「先達」（1名）となり、これに次ぐ人が「副先達」（2名）になる。青柳台の先達は初代の日行八我から数えて、昭和60年現在で16代を数える。彼らは十数回から20回程度富士登山を経験しており、富士山北口の富士吉田の坊（大國屋）より行名をいただく。これを後世に残すため、単独もしくは数人が共同で、富士塚に石碑を建てることを通例としている。

講の行事はすべて浅間神社の社殿で行われる。現在（昭和60年時点）の建物は昭和28年（1953）に建築されたものである。社殿内部の北側に祭壇が設けられており、ご神体として、富士山の山型をした木像に銅鏡が載せられたものと3本の幣束が納められている。周囲の壁には、歴代先達の写真その他が掛けられている。

講の行事としては次のようなものがある。

① 浅間講（毎月旧の26日）

旧26日と決まっているのは、以前は海で働いている人が多く、ちょうどシオグチの良い

日であるためこの日としていたからだという。当日午前10時ころになると、行者が浅間神社に詣める。11時ころから宝冠と行衣を身に着け、右手に錫杖、左手に数珠を持ち、自分の体の前に経本を置き、拝みを開始する。前列の祭壇の直前には先達、これをはさんで両脇に副先達が座る。拝みは約40分続けられ、その後にお焚き上げが始まる。その日が5分ほどで燃え尽きると、行事は終了する。なお、家で不幸のあった行者は浅間講への出席を遠慮する。また、この日以降、行者たちは都合の良い日を選んで、分担して一般の講員の家を拝んで歩く。

②正月元日～3日

③2月年越し

④4月の初申

この日は、浅間神社のマチ(祭礼)の日とされている。ただし、現在では4月第2日曜日に変更されている。昔は、キヤクメとよばれる当番の家が、毎年20軒ずつ交代でマチの用意をしていたが、海岸が埋め立てられたころ(昭和30年代)からは、すべてを行者にまかせるようになった。以前は、この日に他のムラの講社が参拝に来ることもあったという。また、埋め立て以前には、行者たちが海岸へ行って拝みをあげ、続いて海に入り潮垢離をとって身を清め、再び海岸に戻ってお焚き上げをした。この火で、前の年の御札や注連などを燃やした。このお焚き上げの時にできた炭は、1年間の厄除けになるというので、参拝した人たちが争ってこれを奪いあったという。現在は、拝み・お焚き上げともに浅間神社の社殿で行われる。またこの日には、子ども神輿の渡御が行われるようになった。

⑤山開き(7月1日)

⑥山仕舞い(8月27日)

⑦辻切り(正月・5月・9月の適当な日)

この日行者たちは、浅間神社で拝みをあげた後、古くから伝存する版木で御札を印刷する。これを木の板に貼り、ムラ外れの6か所に吊り下げておく。こうしておけば、ムラに病気が入ってこないからだという。この御札は、講員の家々へも配布する。各戸では、これを家のトボグチに貼っておく。

(文献⑨)

なお、富士塚上および周辺には、昭和60年段階の調査では、合計21基の関係石造物(天明8年(1788)～昭和50年(1975))が現存している。

(文献④)

資料8 市原市松ヶ島の富士講

松ヶ島の町内に居を構えるの家のほとんどが富士講に加入している。また、分家して新しく加入する家もあるので、次第に講員数は増加している。

鎮守の養老神社の境内に富士塚があり、最も古い石造物は天保2年(1831)の「浅間神社」碑である。但し、隣接する青柳が一山講であるのに対して、山包講に属する。第2次世界大戦前までは、毎年のように富士山への代参を行っていた。戦後は代参による登山は行われなくなったが、昭和52年(1977)には36名が登拝した。

講の運営の中心となるのが、先達と世話人である。先達はオケヤという屋号の家が2代続けて勤めていたため、同家が世襲するものと見なされていた時期もあったが、現在は2名ずつの交代制となっている。一方世話人は、大字内の五つの町会(仲町・本郷・出戸・判ヶ台・新田)から1人ずつ出ている。

講全体の行事として「4月の初申」がある。ただし、現在では初申その日ではなく、第2日曜日に変更されている。行事を取り仕切る中心となるのがヤド(宿)である。これは、町会順(仲町→本郷→出戸→判ヶ台→新田)に毎年1軒ずつ講社の家に回ってくるもので、ほぼ50年間隔となり、一代にすれば一度きりしか行えないため、非常にめでたいものとされていた。昔は、当

日このヤドの家に講社全体が集まっていたので、同じ町会に住む近所の人たちが鍋や釜などを持ち寄ってこれを手伝った。現在は公会堂で催すようになっている。

当日になると、幟が建てられ、講社の家々から1人ずつ(通常は各家の戸主)が公会堂に集まる。そして、まず掛け軸の前で拝みをあげる。続いて富士塚へ行き、塚の上から、当日掲げた餅を参拝にやってきた人たちに向かって投げる。その後、公会堂へ戻って共食となる。最後に、当年のヤドから次年のヤドへ錫杖・幟・宿帳が入った柳行李、版木の入った木箱が引き継がれる。これらは次年のヤドの家で1年間保管しておく。

(文献⑨)

なお、富士塚上および周辺には、昭和60年段階の調査では、合計5基の関係石造物(天保2年(1831)～昭和52年(1977))が現存している。

(文献④)

資料9 市原市海保(中谷)の富士講

大字海保は南和・上郷・中郷・中谷の4集落に分かれていて、このうち中谷に富士講が伝存している。中谷には、旧来の家が約60軒あるが、ほとんど全戸が加入している。ただ、講は存在するものの、近年富士山への登拝は行われていない。第2次世界大戦前は盛んであったというが、石造物を見る限り、昭和27年(1952)に25名の登拝があったのが最後の記録である。

鎮守の熊野神社境内に富士塚が造られている。あわせて13基の石造物が残されている。最も古のものは、安政7年(1860)に一山講が「郷中安全」を祈願するために造立した「富士浅間大神」碑である。

現在の講の役員には、先達と世話人がある。先達は、明治年間には「豈信於富岳大神四十年」と讀えられた間野源一郎(「慎行篤我」)や「二代目先達」鈴木重郎平などのように、近隣にもその名が聞こえた篤信な人を輩出し、この人たちが長く勤めたが、現在は任期2年の交代制となっている。先達は、自宅に「一年不説の巻」と「お決定の巻(文政11年(1828)3月17日付け「禄行三志=内武州住田嶋精行三松」)」の2本の巻物および大正2年(1913)から昭和30年(1955)までの「諸事控帳」3冊などの入った木箱を保管しておく。

戦前は、近隣の富士講の浅間神社の山開きへの参加などもあったが、現在では浅間講が行われているだけである。この行事は、以前は毎年3月16日(熊野神社のマチの翌日)に行われていたが、現在は熊野神社のマチと合同し、3月中旬の日曜日に行われている。この日の行事の費用は、事前に講社各戸から600円ずつ徴収して賄う。以前は糯米を各戸から徴収していたこともあったという。

当日は、講社の人たちが富士塚の前で拝みをあげた後、塚の上から餅やみかん・金銭などを投げる。これを拾うため、ムラ中の人が出て、かなりの賑わいとなる。これが終わると、隣接する公民館で共食となる。

(文献⑨)

別表 1 市原地域の富士講石造物造立数の旧村別年代分布

旧 町 村 名 年 代	旧 市 原 市 域							旧 南 総 町 域							旧 加 茂 村 域				合 計	
	八 幡	菊 間	渥 津	市 原	五 井	東 海	千 種	姉 崎	海 上	市 西	養 老	戸 田	明 治	内 田	鶴 舞	平 三	高 滝	富 山		里 見
1786～1795	3	4	12	11	8	6	5	1												1
1796～1805																				0
1806～1815					2					1										3
1816～1825				1	2		1				1									5
1826～1835			1		1	1	2	1				1	1							8
1836～1845							1					1								2
1846～1855						1							1							2
1856～1865			1		2	2	5	4	1		2	1								18
1866～1875						1	1	6	1	1			2							12
1876～1885	2		2		5	12	3	8	3	2	3	5	1							46
1886～1895	1			1	1	2	2			2	1		1							11
1896～1905	1	1	3		3	3	2	1	1	1	1	1	2		1					21
1906～1915	3	1	3		5	1	3		1	5					3	3				29
1916～1925			2	1	4	2	7			1	2	1	1		1			1		23
1926～1935	1	1		4	7	2	5	2		5	6	1	2	2				1		39
1936～1945	1		1	2	2	2		1		3	1	1	1			1	2			18
1946～1955				1		2	1	1		1		1								7
1956～1965	1			3		1	3			1	1	1								11
1966～1975							2			1	1				1					5
1976～1985	2						1			1			1							5
年 欠	14		3	4	17	9	12	22	1	12	5	3	5	3	1					111
合 計	26	3	16	17	51	41	52	46	8	37	24	17	18	5	7	2	2	4	1	0

(旧町村地名の下の数字は大宇の数)

市東は0 - 内連字地域

【史料編】

史料1 富士講禁止の江戸幕府触書 嘉永二年（一八四

九）九月

富士講之儀ニ付而ハ、町触之趣并文化度猶又内々にてても富士信仰之者、先達と唱不取留儀を講釈杯致し、俗之身分ニ而行衣を着し、望之者江ハ護符を出し、或ハ加持祈禱、且人集致候始末、愚昧より之事にハ候得共、右之内にハ身分を不顧、其席江立交候族も有之由、風俗にも不宜、且第一ハ触を不用不届に付、急度咎をも可申付候条、此後右体之儀等見聞に及候ハ、差押早々可訴出旨申触有之処、近年猶又御府内・御府外之者共講中仲ケ間を立、追々信仰之者不少哉ニ相聞不届之事ニ候、今般於寺社奉行所、富士淺間師職共并講中之者、重立候者共を相糺候處、其祖ハ尊信致す画行藤仏并右教を伝来致候食行身様（様）と申者、神道・仏道ニ而無之、自己之存付を以種々異様之儀申唱候を致帰依候段、於公儀御立被置候神道并諸宗門之外、俗人之申論を信用致し、異様之儀等相唱、兼而触渡之趣相背不埒ニ付、急度可及沙汰候處、文化度以来年歴も相立、殊ニ江戸市中のみニ無之、最寄国々にて講中ニ相加り、同様之及所業候者も有之哉ニ相聞、畢竟愚昧之者ハ追々心違をも生し候儀ニ付、今度ハ令宥免候、以降食行同行杯と唱、講中仲ケ間を相立、或ハ行衣を着し、鈴を持、異形にて

登山等致し、平日も如何敷唱事、又ハ俗人之身分にて焚上ケと号し、加持祈禱に紛敷儀等致し、護符様之物差出候儀、一切令停止候間、向後面行、食行等之申述候害物等持伝、内々信心致候者も有之候ハ、其所之役人共も精々相改、其筋江可申出候、若等閑ニ相過候ハ、当人ハ勿論、所之役人迄嚴敷可申付候

史料2 一山講講祖日行八我墓塔 天明八年（一七八八）

十一月

（右）

天明六丙午年

（種子）真乗覚峰信士

七月十八日

俗名 三右衛門

（正）

日行八我

（左）

江戸青山百人町 渡辺氏

（裏）

天明八申霜月廿九日

（台正）

願主 一山講中

先達 三郎左衛門

（市原市青柳淺間神社境内富士塚）

史料3 五井富士講由来碑 大正三年（一九一四）四月

（正） 参明藤開山

一此度芝愛岩^(岩)山開帳二付、拙者事も前々御出入場所二御座候間、無抛相被頼御同行中江御供米代呂別付二相成、殊之外こまり入候間、江戸・田舎とも相頼申候二付、其御地御同行様方江も無抛御頼申候、開帳之儀者来ル三月三日方六十日之間二御座候得共、御供米之儀者三月中二も奉納仕度候、尤出来候ハ、芝^(幸)いも問屋迄も御手紙ヲ御添被出被遣可被下候、此段御願申上度如斯二御座候、以上

酉（嘉永二年）二月廿日

文治郎

五井郷先達

弥兵衛様

君塚作治郎様

岩崎吉五郎様

庄兵衛様

喜兵衛様

八幡清蔵様

惣同行中様

追啓、右之趣御世話人方御承知御座候ハ、此段近日御左右承度、御左右次第奉納書付差出シ度候間、左様二思召可被下様奉願上候、以上

（市原市時田家文書）

史料6 御身拔・御免しにつき五井吹上村先達・同行中あて書状 嘉永五年（一八四九）閏二月

日追而暖氣二相成候得共、弥其御地御家内様始メ御同行衆中御機嫌克御座被成候由大慶奉存候、然ハ当春中も何卒参上仕度罷有候処、扱々種々取込罷有候而乍改前度延引候段御用捨被下度候、此度者 御身^(被)・御免し等之儀仰被遣、誠ニ々々目出度御弘りと御嬉しく奉存候、右ニ付早々相調候差上申候、乍然シ十幅は被仰候処、いろ々々御願申上候処、九幅ニて仰付二候間、又々其内御願申上送り可申候、左様二御承知可被下候、猶亦其内貴面万々可申述候、以上

（嘉永五年）閏二月十三日

文次郎

五井吹上村

弥兵衛様

庄兵衛様

御同行中様

（市原市時田家文書）

史料7 先達市郎兵衛年忌法要につき五井村ほか先達あて書状 嘉永五年（一八四九）四月

以手紙申上候、追日而暖氣二相成候所、其御地家内御揃御堅勝ニ御暮し被成候、珍重之御儀ニ奉存候、次ニ当方無異儀在罷候、乍憚御心易く思召可被下候、打泣御尋も不仕御用捨可被下候、然者当六月三日市郎兵衛先達五拾

我富士講社上宿下宿新田三区寛政中養老川沿岸吹上清地設於齋庭伝承東都江戸橋人山包^(元)祖^(元)禪行師每歳四月以初申日善修祀事迄明治四十二年改築山移祠大宮神社境内信仲益厚深思熟慮刻著干石予以為念蓋欲使社中長不忘斯意也維時大正三年四月吉辰

発願主 岡田四郎平

祭主（8名）、賛助員芳名（25名）、上宿区安産講社（26名）

（市原市五井大宮神社境内）

史料4 山真十三夜講あて山包講勘当証文 天保三年（一八三二）七月

（鳥帽子）
あほし岩御信心御法書

参国藤開山月日仙元大菩薩様御信心之元祖

食行身祿^(二)

二世 北行鏡月真

三世 師匠仙行真月伸

四世 ☆包^(八)修山禅行伸

五世 ★真^(八)真行妙仲伸

六世 ☆包^(八)正行真鏡伸

然ル所去ル卯年師匠仙行五十年忌二付、御同行衆中の丹

（精）情をもつて表門建立仕、☆包正の字ヲ其門江印シ候所、御先代方の御意ニも相叶ひ候哉、何事も無之^(無)難に相勤メ、目出度一同喜悦いたし候、然ル所何様ニ心得候哉、正之字をきらい、自分勝手ヲもつて印シヲなほし候段同行一同甚いきどふり、尚又我儉なる致し方、夫のミならず先達中格別之雜言申条不届キ至極ニ付、是迄相渡し置候書物品々相返し、只今より勘当申付候もの也、然上ハ☆包ハ決^(而)口無用たるへし、岩和田・勝浦之同行も不殘此方へ取返し候段、左様心得へくもの也

天保三年辰年

七月 日

（君塚）
きみつか

正行真鏡（花押）

寒川

長右衛門殿

（千葉市山真十三夜講文書）

史料5 芝愛宕山開帳につき五井郷ほか先達らあて供米

依頼 嘉永二年（一八四九）二月

以手紙致啓上候、日追而暖氣二相成候得共、弥其御地御家内始メ御同行之衆中御障りも無御座、御出^(精)被成目出度御儀奉存候、然ハ先達而幸便ニ付御身^(被)祿御両所江差上申候処相届キ候哉、其後御便りも不承候、相届候ハ、何卒御便り次第御左右可仰被下候

富岳者衆山之宗而皇國之鎮也凡登岳者數十百人為一夙
團有首長稱先達先達率衆而登老幼不能徒以為遺憾因就
其地山上建岳神之祠而祭焉岳祠之偏於海內蓋以此也我
有吉郷地無山郷人事神不能無遺憾先達平野長右衛
門與衆議築一山以創岳祠明治三年也越七年祠山漸壞先
達打木三左衛門與衆議謀改築募金郷人金集若干円起工
一月竣於八月而祠山復新焉（以下略）
明治三十年八月
（木更津市有吉八幡神社富士塚）

史料11 海保富士塚建築由來碑 明治十一年（一八七八）
四月

正 〇者我輩社中與衆度協同勸力自富士嶽則遷祠淺間大神
於我郷日枝神社祠之丘以經營神碑而終至奏成功將報神
恩萬分之一當此時也余雖淺陋驚下無一所善為國郷所拔
擢擔任其經營之事矣於是乎社中之諸君共施行於祭典
之式協同國郷人和美明治九年七月十七日也念茲十一年
夏四月某日我輩亦則有所夙禱以築石窟於其祠傍而獻納
石嶽二頭先是供石鹽一個以為永世祈禱國郷之安榮云爾
明治十一年夏四月

海保村
吉井芳太郎百拜
享年廿三歲
（市原市海保海保神社富士塚）

史料12 先達豐行開我報恩碑 明治十二年（一八七九）
十二月

正 報恩碑
神威赫々御基德妻登於名山者我先導豐行開我也通稱齊
藤喜六管周旋講社之事以進副督事於是乎厚之三十三度
為大願成就以建之方依る於教師秋行及先導米行之遺言
云亦不忘神恩豈不可有不敬
于明治十二年卯十二月
（市原市片又木十二社神社富士塚）

史料13 先達慎行篤我先導碑 明治十三年（一八八〇）
十二月

正 先導碑
扶桑協會教導職間野源一郎慎行篤我其号也當崇信 富
嶽大神四十年今矣欠盡不一所禱必應焉故我輩社中等相
謹而所以欲報敬神創始之勲也乃建碑石以伝不朽焉抑
神威赫々之其德儼然光被四表以致今日之盛矣是我慎行
篤我亦為敬神之嚆矢者也謹因社中等奮然竭力以概記其
教言爾
明治十三年十二月十八日
講社中建之
（市原市海保熊野神社富士塚）

年忌ニ相当り候由下波谷鷺峰寺方申來り、尤も石碑ニ世
話人名前印有之候間捨置かたぐ、依之無規和尚様御地へ
御渡り被成候間、御同行世話人衆様江宜敷御相談被成被
下候様御頼申上候、猶又木更津作左衛門殿・江戸橋新八
殿江此段申入候、先者右之段申上度、早々以上
（嘉永五年）子四月

五井 四郎 治様
同 庄兵衛様
岩崎 吉五郎様
出津 仙右衛門様
玉崎 吉兵衛様

（市原市時田家文書）

史料8 吉沢富士講創立由來碑 明治四十三年（一九一〇）

正 淺間大神
伏シテ惟ルニ淺間大神々威赫々靈德廣大ハ明治十一
年吉沢扶桑教講ヲ起スヤ郷民汪乎トシテ帰依シ信徒ト
ナリ神光郷内ヲ照治シ除災去禍無々其ノ徳沢ニ沐浴セ
サルモノナシ明治四十三年十一月二十二日ヲトシ堀谷
山上ノ大神ヲ國常立神社ニ合祀シ神殿ヲ壯大ニセリ蓋
群生ニ神徳ヲ感仰シ肅然敬処ノ意ヲ示スモノナリ茲ニ
謹ンテ由來ヲ略叙シ記念トナス

（19名）、十級元講長世話人（1名）、教導職権訓導
（1名）、教導職訓導（1名）、教導職訓導現講長發
起人（1名）、講社員（18名）、世話人（5名）
☆包
（市原市吉沢淺間神社富士塚）

史料9 藪・岩富士講創立由來碑 明治十四年（一八八
一）十月

正 參神初頭乾坤爰開由是万物化成由是 皇基鞏固所謂造
化之首羣之祖者嗚呼盛哉參神之為德也矣我伊藤身祿師
開扶桑教會實資 神德以宜此教我藪岩二村十九名信之
深矣仰之久矣遂相謀建石記之以表不謬 神德不負師恩
之意云
明治十四年十月十七日

墓 碑建設碑寄附人名記

ヤブムラ（29名）、皆吉村（2名）、金沢村（1名）、
イハムラ（8名）、シキデ村（1名）、今津朝山村
（1名） 此地名□ 以上
（市原市藪淺間神社富士塚）

史料10 有吉富士塚建築・改修由來碑 明治三十年（一
八九七）八月

正 富士山改築記

史料14 元祖御入定百五十年回遠祭執行に付寄附依頼
明治十年代前半

尊師之一百五十年敬拝祭祀營之

明治十五年七月

(山梨県富士吉田市上吉田扶桑教会前)

(前略)而ルニ右元祖ノ御入定ノ年ヨリ来ル十五年ハ一
百五十年回ニ相当リ、遠祭執行仕度候ニ付、別紙絵図面
ノ如ク聖設立致シ度志願ニ候得共微力ニ難及、就テハ
☆包・★真ノ両講社中篤志ノ諸君等同心・協力シテ、何
卒一ケ年ニ金六錢宛三ケ年間特別ノ御信心ヲ以テ御寄附
被成下度、此段奉懇願候、以上

五井村先達 時田庄 辛

出津村先達 高橋重太郎

玉寄村先達 高澤安太郎

(市原市時田家文書)

史料15 食行身祿百五十年祭執行記念碑 明治十五年
(一八八二)

夫富士者靈山也故為拜座上天元之父母所登山之開祖則角
行尊師也然後六世食行身祿尊師為衆生濟度享保十八年遂
入定於御山惠^後穗子岩之下是曾所知各講社愛不贅矣又天明
二年仙行真月下東都麻布示御山之由來於包市郎兵衛修山
禪行初感其尊而為師弟之約日日信心弥增焉其講社斯漸弘
關東六州有志之社中皆以心一致也于時今回以當食行身祿